

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財実探調査報告書13

神原Ⅱ遺跡

1997年の調査成果

(第1分冊)

2002年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

神原Ⅱ遺跡
— 1997年の調査成果 —
(第1分冊)

2002年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

序

当事務所ではいわゆる斐伊川・神戸川治水計画3点セットの一翼を担う事業として神戸川の上流に平成22年度完成目標に志津見ダムの建設事業を進めています。このダムにより、頓原町大字角井・志津見・八神にわたり面積約2.3㎢もの貯水池ができることになりますが、神戸川流域では古くから鉛製鉄が行われていたように、ダムによる水没予定地内にもこれらを含め多くの遺跡の存在が予想されたことから、ダム建設に先立ち、島根県教育委員会を始め関係各位の御協力を頂き、これら遺跡についての調査を計画的に実施しております。

当報告書は、そのうち神原Ⅱ遺跡の調査結果をとりまとめさせていただいたものです。当遺跡からは、縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物のほか近世大鍛冶場も確認されるなど、地域の歴史を解明する上で貴重な資料となるものと考えられます。

当遺跡の場所は、志津見ダム建設工事に関連する国道184号線の付け替え部分に位置することから、現状での保存は困難と言わざるをえない状況です。そのような意味からも、ダム事業を契機として得られたこの貴重な資料をできるだけ正確かつ詳細に記録し後世に残すことが、せめてもの我々の務めでもあり、この報告書はその成果とも言えるものです。

最後になりましたが、当遺跡の発掘並びに報告書のとりまとめに関係された皆様に深く感謝申し上げます。

平成14年3月

国土交通省中国地方整備局

斐伊川・神戸川総合開発工事事務所

所長 田中 靖

序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局（旧建設省中国地方建設局）の委託を受けて、平成元（1989）年度から志津見ダム建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。

志津見ダムが建設される神戸川は中国山地に源を発し、斐伊川とともに出雲平野を形成しており、一方では古くから陰陽を結ぶ交通路としての役割を担ってきました。また当流域は、良質な砂鉄や豊富な森林資源より産出される木炭を背景とした「鉛製鉄」が盛んな所で、当時を代表する一大産業として人々の生活を支えていました。

本書で報告する神原Ⅱ遺跡は、平成9年度に発掘調査を実施したもので、近世大鍛冶場をはじめ縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が確認され、この地域の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができました。本書がこの地域の歴史を解明していく糸口となり、郷土の歴史と文化財に対する理解や関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の作成にあたり、地元の皆様及び頃原町教育委員会をはじめ、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所ならびに関係各方面から御協力・御指導賜りましたことに対し、心よりお礼申し上げます。

平成14年3月

島根県教育委員会

教育長 山崎 悠雄

例　　言

1 本書は、平成9（1997）年度に島根県教育委員会が建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）より委託を受けて実施した志津見ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2 本書に掲載した遺跡とその地番は下記の通りである。

神原Ⅱ遺跡　島根県飯石郡飯石町大字志津見269-3 外

3 調査組織は次の通りである。（役職名については当時の呼称を用いた）

調査主体　島根県教育委員会

（平成9年度）現地調査

事務局　勝部　昭（文化財課長）　島地　徳郎（同課長補佐）

穴道　正年（埋蔵文化財調査センター長）　古崎　藏治（同課長補佐）

調査員　田原　淳史（埋蔵文化財調査センター主事）　錦織　稔之（同教諭兼主事）
佐藤　幸子（同調査補助員）

（平成12年度）報告書作成

事務局　穴道　正年（埋蔵文化財調査センター所長）　内田　融（同総務課長）
松本　岩雄（同調査課長）　今岡　宏（同総務係長）

調査員　田原　淳史（埋蔵文化財調査センター主事）
和田　康宏（同教諭兼文化財保護主事）

（平成13年度）報告書作成

事務局　穴道　正年（埋蔵文化財センター所長）　内田　融（同総務課長）
川原　和人（同調査第二課長）　今岡　宏（同総務係長）

調査員　田原　淳史（埋蔵文化財調査センター主事）

整理作業員　金森千勢子　和田　初子　野中　洋子　羽島ひとみ　西　郁子
上谷　美鈴　柳原　准子　神谷登青美

4 発掘調査（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達・測量発注）については、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部

〔現場担当〕　持田　明典　金山　浩司

〔事務担当〕　市川　美奈

- 5 発掘調査並びに報告書作成にあたっては、次の方々から有益な指導・助言をいただいた。記して感謝を表したい。(敬称略・五十音順)
- 穴澤 義功(たらら研究会委員) 稲垣 寿彦(庄原市教育委員会)
大澤 正己(たらら研究会委員) 河瀬 正利(広島人文学部教授)
杉原 清・(島根県文化財保護指導委員)
松井 整司(島根人文学汽水域研究センター客員研究員)
- 6 調査に関する自然科学分析については、次の機関・方々に委託した。
- 地磁気年代測定:時枝 克安(島根大学総合理工学部教授)
製鉄関連遺物金属学的調査:㈱九州テクノリサーチ 大澤 正己・鈴木 瑞穂
- 7 本報告書に記載した遺物の実測は七として調査員が行い、以下の者の協力を得た。
- 今岡 一三 川崎 英司 板倉 芳朗 岩崎 健 寺尾 合
田原 修一 西 郁子
- 8 本書の執筆・編集は調査員が協議して行い、文責は目次に明示した。また以下の者の協力を得た。
- 川崎 英司 寺尾 合
- 9 本書に記載した写真撮影は、調査員及び板倉が行った。
- 10 本書に記載した「神原Ⅱ遺跡と周辺の遺跡」に使用した図は国土交通省国土地理院発行の地形図を使用した。
- 11 図中の方位は、測量法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。従って、磁北より $7^{\circ}15'$ 、真北より $0^{\circ}25'$ 東の方向を指す。
- 12 掲図の縮尺は、図中に明示した。
- 13 山上遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会(埋蔵文化財調査センター)で保管している。

本文目次

本文編（第1分冊）

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	(田原)	1
第2章 位置・環境と周辺の遺跡	(寺尾)	3
第3章 調査の結果 (1)	(田原)	5
第1節 遺跡の概要		5
第2節 1区の調査 (1) - 第1黑色土・第1ハイカ上面 -		5
第3節 1区の調査 (2) - 第2黑色土・第2ハイカ上面 -		26
第4節 2区の調査		28
第5節 3区の調査		54
第6節 まとめ		66

本文編（第2分冊）

第4章 調査の結果 (2)	(田原)	1
第1節 大鐵冶場の調査		1
第2節 まとめ		31
第5章 製鉄関連遺物の考古学的観察	(穴澤義功・田原)	33
第6章 自然科学分析		79
第1節 神原II遺跡出土鐵冶関連遺物の金属性的調査	(大澤正己・鈴木端輔)	79
第2節 神原II遺跡1区大鐵冶場の地磁気年代	(時枝克安)	155

挿図目次

（第1分冊）

第1図 頓原町位置図		1
第2図 斎伊川・神戸川と志津見ダム建設予定位置図		1
第3図 神原II・神原I遺跡 97・98年度 調査区位置図 (S=1/4,000)		2
第4図 神原II遺跡と周辺の遺跡		4
第5図 1区 遺構配図・地形測量図 (S=1/400)		6
第6図 1区SI01実測図 (2) 遺物出土状況 (S=1/30)		7
第7図 1区SI01実測図 (1) (S=1/60)		7
第8図 1区SI01出土遺物実測図 (S=1/3)		8
第9図 1区SI02実測図 (S=1/60)		9
第10図 1区SI03実測図 (S=1/60)		9
第11図 1区SB01実測図 (S=1/60)		10

第12図	1区SB02実測図 (S=1/80)	11
第13図	1区SB03実測図 (S=1/60)	12
第14図	1区SB04実測図 (S=1/80)	12
第15図	1区SK01実測図 (S=1/40)	12
第16図	1区SK01出土遺物実測図 (S=1/3)	12
第17図	1区SK02実測図 (S=1/30)	13
第18図	1区SK02出土遺物実測図 (S=1/3)	14
第19図	1区SK04出土遺物実測図 (S=1/3)	15
第20図	1区SK03～SK05実測図 (S=1/40)	15
第21図	1区箱式石棺実測図 (S=1/30)	16
第22図	1区遺構に伴わない出土遺物実測図 (1) 織文土器 (S=1/3)	18
第23図	1区遺構に伴わない出土遺物実測図 (2) 弥生土器 (S=1/3)	18
第24図	1区遺構に伴わない出土遺物実測図 (3) 弥生土器 (S=1/3)	19
第25図	1区遺構に伴わない出土遺物実測図 (4) 土師器 (S=1/3)	20
第26図	1区遺構に伴わない出土遺物実測図 (5) 須恵器・土師器・その他 (S=1/3)	21
第27図	1区遺構に伴わない出土遺物実測図 (6) 弥生土器 (S=1/3)	22
第28図	1区遺構に伴わない出土遺物実測図 (7) 石器 (S=1/3)	22
第29図	1区遺構に伴わない出土遺物実測図 (8) 陶磁器類・その他 (S=1/3)	22
第30図	1区遺構に伴わない出土遺物実測図 (第2黒色上) (S=1/3、4はS=1/4)	26
第31図	1区第2ハイカ上面地形測量図 (S=1/300)	27
第32図	1区上層図 (S=1/120)	27
第33図	2区上層図 (S=1/80)	28
第34図	2区遺構配置図・地形測量図 (S=1/400)	29
第35図	2区SI01実測図 (S=1/60)	30
第36図	2区SI01出土遺物実測図 (1はS=1/3、2～10はS=1/1)	31
第37図	2区SI02出土遺物実測図 (S=1/3)	32
第38図	2区SI02実測図 (S=1/60)	32
第39図	2区SI03実測図 (S=1/60)	33
第40図	2区SI04実測図 (1) (S=1/60)	34
第41図	2区SI04出土遺物実測図 (2) 遺物出土状況 (S=1/60)	34
第42図	2区SI04出土遺物実測図 (S=1/3)	35
第43図	2区SB01実測図 (1) (S=1/60)	36
第44図	2区SB01実測図 (2) 遺物出土状況 (S=1/60)	37
第45図	2区SB01出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	38
第46図	2区SB01出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	39
第47図	2区SK02出土遺物実測図 (S=1/3)	40
第48図	2区SK03出土遺物実測図 (S=1/3)	40
第49図	2区SK01～SK07実測図 (S=1/60)	41
第50図	2区遺構に伴わない出土遺物実測図 (1) 織文土器 (S=1/3)	43
第51図	2区遺構に伴わない出土遺物実測図 (2) 弥生土器 (S=1/3)	43
第52図	2区遺構に伴わない出土遺物実測図 (3) 弥生土器 (S=1/3)	44
第53図	2区遺構に伴わない出土遺物実測図 (4) 弥生土器 (S=1/3)	45
第54図	2区遺構に伴わない出土遺物実測図 (5) 弥生土器 (S=1/3)	46
第55図	2区遺構に伴わない出土遺物実測図 (6) 弥生土器 (S=1/3)	47
第56図	2区遺構に伴わない出土遺物実測図 (7) 弥生土器 (S=1/3)	48

第57図	2Ⅹ造構に伴わない出土遺物実測図 (8) 土師器 (S = 1 / 3)	48
第58図	2Ⅹ造構に伴わない出土遺物実測図 (9) その他 (S = 1 / 3)	49
第59図	3Ⅹ造構配置図・地形測量図 (S = 1 / 300)	54
第60図	3区SK01実測図 (S = 1 / 60)	55
第61図	3区SK02実測図 (S = 1 / 60)	55
第62図	3区SK03実測図 (S = 1 / 40)	56
第63図	3区SK04～SK09実測図 (S = 1 / 40)	57
第64図	3区SK04出土遺物実測図 (S = 1 / 2)	58
第65図	3区SK05出土遺物実測図 (S = 1 / 2)	58
第66図	3区SK06出土遺物実測図 (S = 1 / 2)	58
第67図	3区SK05出土錢貨折本 (S = 1 / 1)	59
第68図	3区SK06出土錢貨折本 (S = 1 / 1)	60
第69図	3区SK07・SK08出土錢貨折本 (S = 1 / 1)	61
第70図	3区SX01実測図 (1) (S = 1 / 60)	62
第71図	3区SX01実測図 (2) (S = 1 / 60)	63
第72図	3Ⅹ造構に伴わない出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	64
(第2分冊)		
第73図	大鐵冶場 造構配置図 (S = 1 / 60)	1
第74図	大鐵冶場 1号炉実測図 (S = 1 / 30)	2
第75図	大鐵冶場 2号炉実測図 (1) (S = 1 / 30)	3
第76図	大鐵冶場 2号炉実測図 (2) (S = 1 / 30)	4
第77図	大鐵冶場 土坑(鉄床・鉄床石)実測図 (S = 1 / 30)	5
第78図	大鐵冶場 製鐵関連遺物 取り上げ用メッシュ範囲	6
第79図	製鐵関連遺物構成図 (1)	7
第80図	製鐵関連遺物構成図 (2)	8
第81図	製鐵関連遺物構成図 (3)	9
第82図	製鐵関連遺物実測図 (1) 炉壁(製鍊炉)・楔形鐵治津(1号炉) (S = 1 / 4)	10
第83図	製鐵関連遺物実測図 (2) 炉壁(鐵治津) (2号炉) (S = 1 / 4)	10
第84図	製鐵関連遺物実測図 (3) 羽口(2号炉より、2号炉?) (S = 1 / 4)	11
第85図	製鐵関連遺物実測図 (4) 羽口(2号炉?) (S = 1 / 4)	12
第86図	製鐵関連遺物実測図 (5) 楔形鐵治津(2号炉より) (S = 1 / 6)	12
第87図	製鐵関連遺物実測図 (6) 楔形鐵治津・鐵津(2号炉より) (S = 1 / 4)	13
第88図	製鐵関連遺物実測図 (7) 楔形鐵治津(2号炉?) (S = 1 / 4)	14
第89図	製鐵関連遺物実測図 (8) 楔形鐵治津・合鉄II(○) (2号炉?) (S = 1 / 4)	15
第90図	製鐵関連遺物実測図 (9) 楔形鐵治津・合鉄H(○)	
	・ 鐵津?・流动津?・鐵治津?・流动津(2号炉?) (S = 1 / 4)	16
第91図	製鐵関連遺物実測図 10 鐵津・流动津	
	・ 楔形鐵治津(工具痕付)(2号炉?) (S = 1 / 4)	17
第92図	製鐵関連遺物実測図 10 楔形鐵治津(工具痕付)合鉄H(○) (S = 1 / 4)	18
第93図	製鐵関連遺物実測図 12 鐵塊系遺物 特L(☆) (2号炉・2号炉?) (S = 1 / 4)	19
第94図	製鐵関連遺物実測図 13 鐵塊系遺物 特L(☆) (2号炉?) (S = 1 / 4)	20
第95図	製鐵関連遺物実測図 14 鐵塊系遺物 特L(☆) (2号炉?) (S = 1 / 4)	21
第96図	製鐵関連遺物実測図 15 鐵塊系遺物 L(●) (2号炉より) (S = 1 / 4)	21
第97図	製鐵関連遺物実測図 16 鐵塊系遺物 L(●) (2号炉?) (S = 1 / 4)	22
第98図	製鐵関連遺物実測図 17 鐵塊系遺物 L(●) (2号炉?) (S = 1 / 4)	23

第99図	製鉄関連遺物実測図	08 含鉄鉢（鉄塊系遺物）M(○)（2号炉?）(S=1/4)	24
第100図	製鉄関連遺物実測図	09 含鉄鉢（鉄塊系遺物）M(○)（2号炉?）(S=1/4)	25
第101図	製鉄関連遺物実測図	10 含鉄鉢（鉄塊系遺物）H(○)（2号炉より）(S=1/4)	25
第102図	製鉄関連遺物実測図	11 含鉄鉢（鉄塊系遺物）II(○)（2号炉?）(S=1/4)	26
第103図	製鉄関連遺物実測図	12 着すり止め釘（2号炉）、鉄製品（2号炉?）(S=1/2)	26

表 目 次

第1表	神原II遺跡と周辺の遺跡	4
第2表	1区SI01出土遺物観察表 (1)	9
第3表	1区SI01出土遺物観察表 (2)	9
第4表	1区SK01出土遺物観察表	13
第5表	1区SK02出土遺物観察表 (1)	14
第6表	1区SK02出土遺物観察表 (2)	14
第7表	1区SK04出土遺物観察表	15
第8表	1区遺構に伴わない出土遺物観察表 (1)	23
第9表	1区遺構に伴わない出土遺物観察表 (2)	23
第10表	1区遺構に伴わない出土遺物観察表 (3)	23
第11表	1区遺構に伴わない出土遺物観察表 (4)	24
第12表	1区遺構に伴わない出土遺物観察表 (5)	24
第13表	1区遺構に伴わない出土遺物観察表 (6)	25
第14表	1区遺構に伴わない出土遺物観察表 (7)	25
第15表	1区遺構に伴わない出土遺物観察表 (8)	25
第16表	1区遺構に伴わない出土遺物観察表 (9)	26
第17表	2区SI01出土遺物観察表 (1)	30
第18表	2区SI01出土遺物観察表 (2)	30
第19表	2区SI02出土遺物観察表	32
第20表	2区SI04出土遺物観察表 (1)	35
第21表	2区SI04出土遺物観察表 (2)	36
第22表	2区SB01出土遺物観察表 (1)	39
第23表	2区SB01出土遺物観察表 (2)	40
第24表	2区SK02・SK03出土遺物観察表	40
第25表	2区SK01～07計測表	40
第26表	2区遺構に伴わない出土遺物観察表 (1)	49
第27表	2区遺構に伴わない出土遺物観察表 (2)	50
第28表	2区遺構に伴わない出土遺物観察表 (3)	50
第29表	2区遺構に伴わない出土遺物観察表 (4)	51
第30表	2区遺構に伴わない出土遺物観察表 (5)	51
第31表	2区遺構に伴わない出土遺物観察表 (6)	52
第32表	2区遺構に伴わない出土遺物観察表 (7)	53
第33表	2区遺構に伴わない出土遺物観察表 (8)	53
第34表	2区遺構に伴わない出土遺物観察表 (9)	53

第35表	2区遺構に伴わない出土遺物観察表 (I)	53
第36表	2区遺構に伴わない出土遺物観察表 (II)	53
第37表	3区SK01・SK02計測表	55
第38表	3区SK03計測表	56
第39表	3区SK04～09計測表	56
第40表	SK05出土錢貨計測表	59
第41表	SK06出土錢貨計測表	60
第42表	SK07出土錢貨計測表	61
第43表	SK08出土錢貨計測表	61
第44表	3区遺構に伴わない出土遺物観察表 (I)	65
第45表	3区遺構に伴わない出土遺物観察表 (2)	65
第46表	3区遺構に伴わない出土遺物観察表 (3)	65

写真図版目次

- 図版1 神原II遺跡全景（南から）、神原II遺跡97年度調査区及びその周辺
- 図版2 1区SI01、1区SB02及び箱式石棺、1区SK01
- 図版3 1区SK02（検出状況）、1区SK02、1区SK03
- 図版4 1区箱式石棺、1区箱式石棺、1区上層
- 図版5 2区SI04、2区SB01（遺物出土状況）
- 図版6 2区SI01、2区SI02、2区SI03
- 図版7 2区SI04（遺物出土状況）、2区SB01、2区SK02
- 図版8 3区下段（遺構検出状況）、3区SK01、3区SK03
- 図版9 3区上段、SX01
- 図版10 3区SX01（上層）、3区SX01（側石）、3区SX01（石除去後）
- 図版11 1区SI01出土遺物、1区SK01出土遺物、1区SK02出土遺物、1区SK04出土遺物
- 図版12 1区遺構に伴わない出土遺物（縄文土器）、1区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）
- 図版13 1区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）、1区遺構に伴わない出土遺物（土師器）
- 図版14 1区遺構に伴わない出土遺物（須恵器・土師器）
- 図版15 1区遺構に伴わない出土遺物（石器・弥生土器・陶磁器）、
1区遺構に伴わない出土遺物 第2黑色土（縄文土器）
- 図版16 2区SI01出土遺物、2区SI04出土遺物、2区SI04出土遺物
- 図版17 2区SB01出土遺物
- 図版18 2区SB01出土遺物、2区SK02・SK03出土遺物、2区遺構に伴わない出土遺物（縄文土器）
- 図版19 2区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）、2区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）
- 図版20 2区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）、2区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）
- 図版21 2区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）、2区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）
- 図版22 2区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）、2区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）
- 図版23 2区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）、2区遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）
- 図版24 3区SK04出土遺物、3区SK05出土遺物、3区SK06出土遺物
- 図版25 3区遺構に伴わない出土遺物
- 図版26 大鎧冶場跡全景（南から）、大鎧冶場2号炉（西から）

図版27 大鋳冶場 2号炉（南から）。大鋳冶場 2号炉・断面

図版28 大鋳冶場 1号炉（南から）。大鋳冶場 1号炉（西から）。2号炉粘上面

図版29 鉄床石周辺鉄滓検出状況。鉄床石・鉄床、大鋳冶場鉄滓出土状況

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

志津見ダムは、斐伊川・神戸川治水計画の一環として建設される洪水防御及び工業用水の供給等を目的とした多目的ダムである。湛水地域は、島根県飯石郡頓原町大字角井から大字志津見・大字八神にまたがり、その総面積は230haにおよぶ。

この湛水地域内には多くの埋蔵文化財の存在が想定されたため、島根県教育委員会と頓原町教育委員会によって昭和63（1988）年に分布調査が行われ、その結果をもとに平成元（1989）年より建設省中国地方建設局（現・国土交通省中国地方整備局）から委託を受けてのダム建設予定地内及び関連事業地内埋蔵文化財発掘調査が進められている。

今回報告する神原Ⅱ遺跡（旧称：森脇遺跡^(注1)）は平成9年度から調査を開始した遺跡である。

平成9（1997）年度は、この他に神原Ⅰ遺跡（旧称：神原遺跡^(注2)）、小丸遺跡の3遺跡についても調査を実施した。3遺跡は、前年度の段階で建設省より、調査対象地のうちトンネル工事とそれに伴う工事用道路、および道路建設に伴う橋脚工事部分が急がれるとして、山裾部分を早急に調査調査して欲しい旨の協議があったため、遺跡内の当該箇所を優先して調査を実施した。なお、いずれの遺跡も面積が広いため複数年にわたっての調査となっている。



第1図 頓原町位置図



第2図 斐伊川・神戸川と志津見ダム建設予定地位置図

（注1）神原Ⅱ遺跡、神原Ⅰ遺跡はともに先述の分布調査によって確認されたもので当初は所在地の地名をとって北側（下流側）の遺跡を「森脇遺跡」、南側（上流側）の遺跡を「神原遺跡」と呼んでいた。しかし今回の発掘調査を実施中に再度学名を確認したところ「森脇」は本来、対岸の地点を呼ぶ学名であることが判明したため、両遺跡地内が学名「神原」で同じであることを確認したうえで、遺跡名を変更、それまでの「森脇遺跡」を「神原Ⅱ遺跡」に、「神原遺跡」を「神原Ⅰ遺跡」に改めた経緯がある。なお、分布調査では両遺跡とも集落遺跡の可能性が高いとされたところで、その面積は神原Ⅱ遺跡が32,000m²、神原Ⅰ遺跡が20,000m²あるものと推定された。遺跡は名称上二つに分かれているが、両遺跡が立地する地形等から考えて一連の遺跡と捉えて差し支えないといえよう。

（注2）註1と同じ

第2節 調査の経過

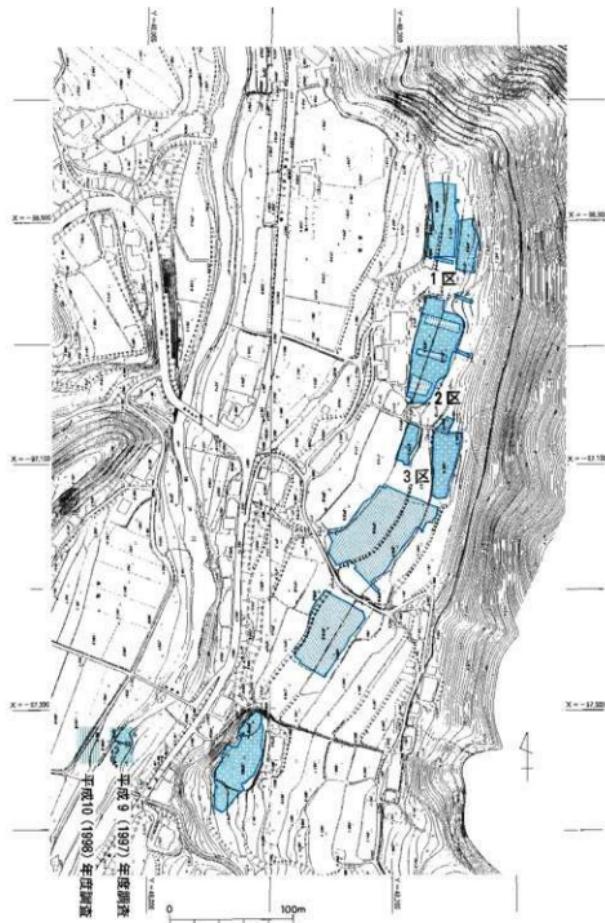
現地調査 神原II遺跡の調査は平成9（1997）年4月より開始した。前年度の協議をふまえて、遺跡の東側の山裾部分を水田の区画をもとに1区・2区と区分けし、1区から調査を行った。途中、再度建設省から、2区の南側部分も工事の進行上調査を至急行って欲しい旨の協議があり、これを受けて新たにその部分を3区として追加、平行して調査を行った。6月～7月には1区において奈良時代頃の建物跡を検出したほか、大鐵冶場の存在も明らかとなった。この段階で調査指導会を実施し有益な指導、指摘を得ている。8月からは2区・3区の調査を平行して行った。2区からは弥生時代を中心とする

建物跡が検出された

ほか、3区においても造構・遺物が確認された。すべての現地調査が終了したのは12月26日である。

現地調査期間中は、時間等の関係上現地説明会の開催はしなかったが毎年春秋に行われるボビー祭、コスモス祭において本遺跡出土遺物の展示や造構のパネル展示を行い、多数の方々に見学していただいた。

報告書作成 平成12～13年にかけて報告書の作成をおこなった。この間、製鉄関連遺物について二度の調査指導を受け、分析の必要な遺物については㈱九州テクノリサーチに委託した。



第3図 神原II・神原I遺跡 97・98年度 調査区位置図 (S = 1/4,000)

第2章 位置・環境と周辺の遺跡

神原Ⅱ遺跡は島根県飯石郡飯石町志津見に所在する。志津見は、「源は飯石郡の琴引山より出で…」と『出雲国風上記』にも記載のある神戸川の中流域、標高500～600mの吉備高原面が開析され、そこにわずかな氾濫原とそれに伴う河岸段丘からなる谷底平野が形成されているところで、遺跡は神戸川右岸のそうした河岸段丘上に立地している。これらの平坦地は、冬季に季節風による積雪があるものの、比較的温暖な気候と周囲の山地に広く分布する落葉広葉樹林とにより、古来より重要な生活の場であったと考えられ、以下に報告するように多くの遺跡が確認されている。なお、これらの遺跡を含むこの地域の西6kmのところには「瓶山」があり、過去に幾度となく噴火を繰り返している。志津見においてもその影響をうかがうことができ、地元で「ハイカ」と呼ばれる数層の火山噴出物の堆積層が確認されている。

旧石器時代

現在までのところ旧石器時代に関係する遺跡や遺物は確認されていない。

縄文時代

縄文時代の遺跡は数多く確認されている。前期の建物跡をはじめとする多くの造構や、草創期末から晩期に至るまでの土器が連続して確認された板屋Ⅲ遺跡、また、後期初頭から前葉にかけての建物跡や後期前葉の磨消縄文土器が良好な状態で大量に確認された五明田遺跡などのはか、東北地方からもたらされたと考えられる「屈折像土偶」や後期の配石造構の確認された下山遺跡などがある。

弥生時代

弥生時代の遺跡としては、森遺跡、板屋Ⅲ遺跡、門遺跡、下山遺跡などがあげられる。前期のものとしては、配石造構群が確認された板屋Ⅲ遺跡のほか数遺跡において土器が前期の土器が出土しているが数は多くない。中期から後期にかけては、門遺跡や森遺跡など拠点的な集落跡と考えられる遺跡が代表的である。特に森遺跡においては、竪穴住居跡や溝状造構のほか上坑墓群も確認され重要な遺跡となっている。またこの時期には、広島県北部を中心に分布する塙町式土器に類似する土器も出土しており交流をうかがわせている。

古墳時代

古墳時代の遺跡としては前述の遺跡に加え比丘尼塚古墳、中原遺跡、小丸遺跡などがあげられる。前期のものはその初頭に弥生時代より継続して営まれるもの認められる程度であり確認されていない。中期のものも同様で、当地域において確認される遺跡のほとんどは後期のものである。後期の集落跡としては神原Ⅰ遺跡や小丸遺跡などがあり、石組みの造り付け窓を備えた住居跡が確認されている。またこの時期には横穴式石室を内蔵した古墳や横穴墓も造られており、比丘尼塚古墳や中原遺跡の中原古墳、堂の原横穴墓などが確認されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡としては神原Ⅱ遺跡や森遺跡、門遺跡などがあげられる。特に門遺跡からは大型柱穴の掘建柱建物跡が確認されており注目される。

中世

中世の遺跡としては森脇山城跡や森遺跡などのほかに、多くの製鉄関連遺跡が確認されている。近世の高殿鉢成立以前と推定される製鉄関連遺跡は、板屋Ⅲ遺跡や戸井谷尻遺跡など20ヶ所近くに及ぶ。また森遺跡、門遺跡、板屋Ⅲ遺跡などからは貿易陶磁や信楽、備前といった国産陶器が出土しており、当時の経済的活動をうかがわせている。

近世

近世の遺跡としては製鉄関連遺跡の数が漸然多いものの、当地域における産業のうちの一つである麻生産に關係すると考えられる遺構なども確認されている。製鉄関連遺跡としては高殿鉢とよばれる大型が地下構造が確認された壇原遺跡や大槻遺跡などがあり、麻生産に關係する遺構は神原Ⅱ遺跡などで確認されている。

主な参考文献

頃原町『頃原町史』1997

島根県『土地分類基本調査一・三瓶山』1981

島根県埋蔵文化財調査センター『かんどの流れー特別号ー』2000

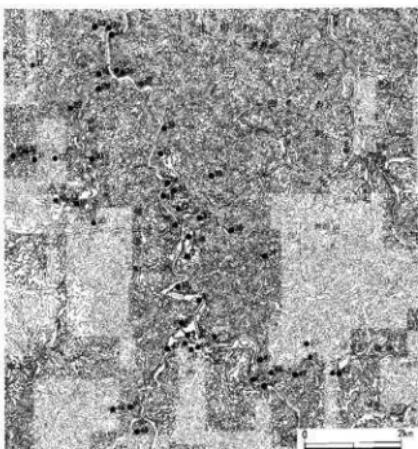
島根県教育委員会『阿丹谷辻堂跡・森脇山城跡・板屋Ⅰ遺跡・森遺跡』1994

島根県教育委員会『門遺跡』1996

島根県教育委員会『板屋Ⅲ遺跡』1998

島根県教育委員会『中原遺跡』1999

島根県教育委員会『戸井谷尻遺跡・長老焼遺跡』2001



第4図 神原II遺跡と周辺の遺跡

第1表 神原II遺跡と周辺の遺跡

遺跡名
1 神原II遺跡
3 中原遺跡
5 森遺跡群
7 比丘尼塚古墳
9 三代木遺跡
11 門遺跡
13 徳原遺跡群
15 貝谷遺跡
17 伊比谷遺跡
19 宮ノ原櫛穴墓
21 鋤子谷遺跡
23 戸井谷尻遺跡
25 駿河山毛宅前鉄跡
27 大槻鉄跡
29 駿子谷遺跡(大鏡井遺跡)
31 伊比谷1号鉢跡
33 伊比谷3号鉢跡
35 徳原鉢跡
37 戸谷尻鉢跡
39 戸谷奥鉢跡
41 段原鍛冶跡
43 反根鍛冶跡
45 大御鉢跡
47 落合製鍊所跡
49 獅子古鉢跡
51 中尾鉢跡
2 神原I遺跡
4 谷川遺跡
6 五明田遺跡
8 竹谷遺跡
10 小丸遺跡
12 板屋遺跡群
14 後平遺跡
16 下山遺跡
18 角井遺跡
20 杉戸遺跡
22 戸井谷遺跡
24 長老煙鉢跡
26 駿河カクノ烟鉢跡
28 標現上鉢跡
30 向原鉢跡
32 伊比谷2号炉跡
34 丸山鉢跡
36 板屋奥鉢跡
38 弓谷鉢跡
40 寿安寺鉢跡
42 上井ノ上鉢跡
44 一代木鉢跡
46 飼原鉢跡
48 獅子尻鉢跡
50 海ヶ追谷鉢跡
52 仁井屋鉢跡

第3章 調査の結果（1）

第1節 遺跡の概要

神原Ⅱ遺跡は、飯石郡額原町大字志津見に所在する遺跡である。遺跡は神戸川右岸の河岸段丘上にあり、ダム建設計画の中では国道181号線と県道川本波多線の付け替え予定地とされた箇所にある。遺跡の面積は32,000m²と広大である。周辺には、同一河岸段丘の南側にある神原Ⅰ遺跡や対岸にある門遺跡など多くの遺跡が存在する。

調査は平成9年度より数箇年に行なって行われている。第1章において述べたとおり、平成9年度における調査では、遺跡東側にあたる山裾部分を対象とし水田の区画を基本に3つの調査区にわけておこなった。

その結果、縄文時代から近世にかけての多くの遺構・遺物を検出した。検出した主な遺構は以下のとおりである。

- (1区) 建物跡（竪穴・掘建柱）5以上・土坑5・箱式石棺1・大鍛冶場跡（炉跡・土坑・粘土面）・ビット多数
- (2区) 建物跡（竪穴・掘建柱）5・上坑7・ビット多数
- (3区) 炭窯1・土坑9・ビット多数

検出した遺構のうち、建物跡は基本的に弥生時代と奈良～平安時代頃のものがあり、2つの時期が認められる。土坑の多くは近世の墓と想定されるものであるが、古墳時代のものと考えられる石蓋上坑や当地域における産業の1つ「麻」の生産に関わると想定される石・炭を多量に含んだ七坑も確認された。また大鍛冶場からは、2基の炉跡のほか、鉄床石・鉄床、当時の作業面と考えられる粘土面を確認した。鉄生産は当地域における一人産業であり、これまでにも多くの製鉄関連遺構が調査されているが、今回大鍛冶場が確認されたことは新たに資料を追加することとなった。

今回の調査では以上のようないくつかの遺構のほかに多量の遺物も出土した。その多くは弥生土器と土師器である。弥生土器の多くは中期と考えられる時期のものが多数を占め、中には広島県三次市塙町遺跡出土の土器を指標とする「塙町式」土器の特徴をそなえた土器や、流水紋が施された上器など特徴的なものも確認された。

第2節 1区の調査（1）－第1黒色土・第1ハイカ上面－

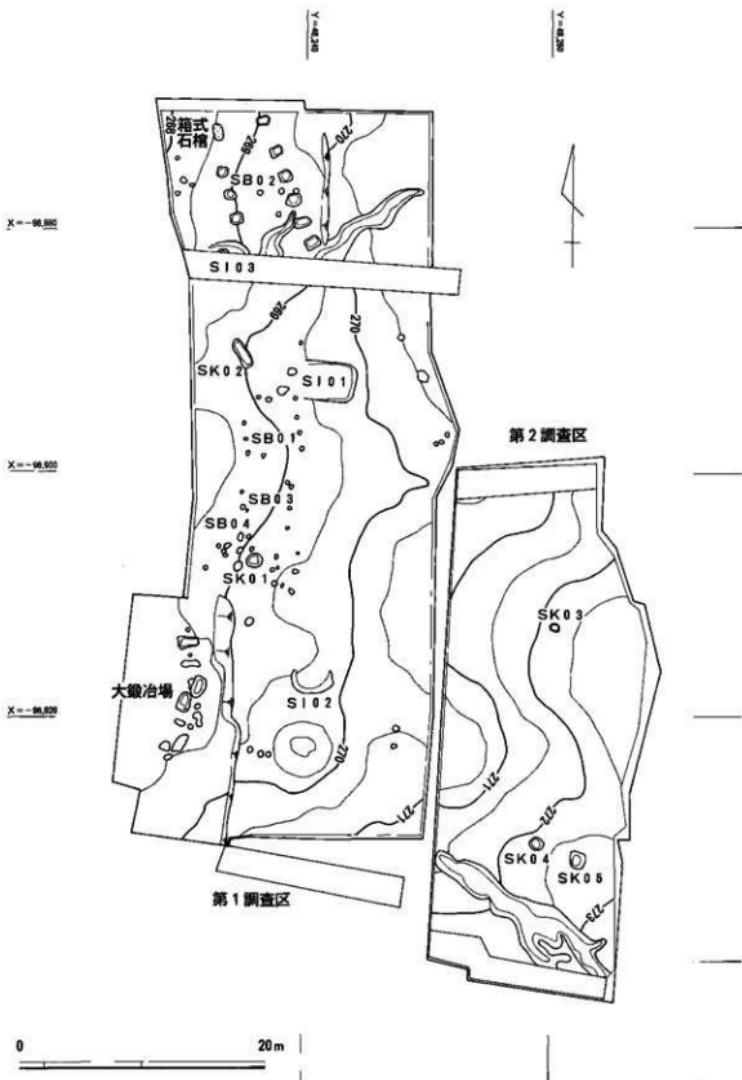
1区は今回調査した調査区のうち最も北側に位置する調査区である。神戸川からの比高は約11～16mで、尾根からの急な斜面が緩やかな斜面に変化する付近にあたる。調査前は水田が営まれていた。

1区の基本的な層序は水田耕作上、水田面造成時の盛上、黒色土（第1黒色土）、ハイカ（第1ハイカ）となっている。周辺の遺跡において既に確認されているように、ハイカ（第1ハイカ）の下には黒色土（第2黒色土）が存在していることが考えられたためトレンチにより確認したところ、ハイカの厚い堆積の下に厚さ約30～50cmの黒色土層が認められたため、一部その部分まで掘り下げて調査を行った。

調査の結果、第1黒色土から第1ハイカ上面にかけては主に奈良～平安時代頃の建物跡や近世の

大鐵冶場跡などを確認した。また、第2黒色土から第2ハイカ上面にかけては、顕著な遺構は確認されなかったものの縄文土器片を検出した。

以下、各遺構について報告する。なお大鐵冶場跡については別章において報告することとする。



第5図 1区 遺構配図・地形測量図 ($S = 1/400$)

S I 0 1 (第6~8図、第2・3表)

(立地) 標高約269.5mに立地する。神戸川からの比高は約12.5mを測る。

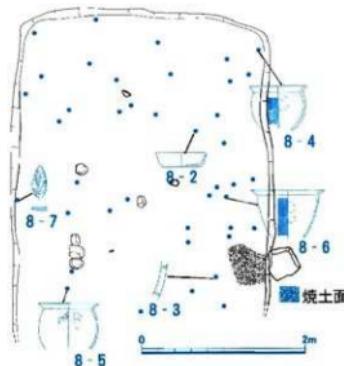
(規模・概要) (第7図) この建物跡は、

調査段階で既に斜面下方側にあたる内側の壁が失われており全容は明らかでないが、残存部分から平面形が長方形で、規模が南北方向3.0m、東西方向3.4m以上を測るものと推測される。壁はほぼ垂直に掘り込まれており高さは30cm前後を測るが、上面はかなり削平されているものと考えられる。建物床面からは柱穴に相当するようなピット等は確認されておらず、建物の柱数などは不明である。また建物内南西側床面では、幅約50cmの焼土面が認められた。なお、この焼上面の周辺からは板状の石を数点検出しており、竈等の施設が存在したこととも考えられる。

(遺物出土状況) (第6図) 須恵器や土師器などが床面近くから出土した。全面的な山土で場所による粗密はほとんど認められない。遺物はほとんどが破片である。建物北側の壁沿いからは鉄鏃が1点出土した。

(出土遺物) (第8図、第2・3表) 出土遺物のうち実測が可能だったものについて掲載した。1は弥生土器の甕または壺の底部と考えられるもので、周辺から流入したものと思われる。2は須恵器壺である。体部は直線的に開き、底部には糸切り痕が残る。3は土師器壺の破片と考えられるもので、器壁がかなり厚みを持つ。4~6は土師器壺である。いずれのものも外側の調整はハケメ、内面の調整はヘラケズリがなされている。6は鉢状に口縁が開き、底部が張らない形で4、5と器形に違いをみせている。

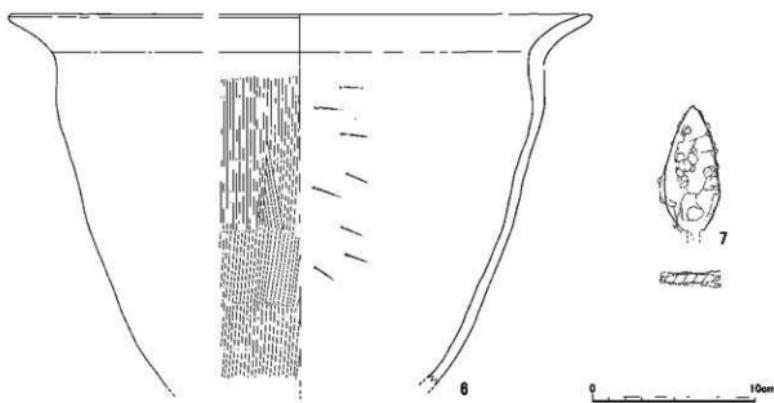
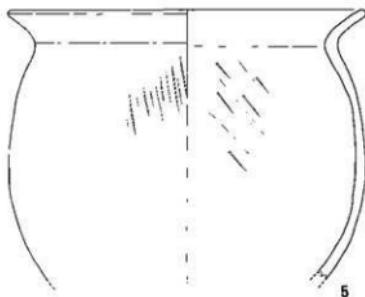
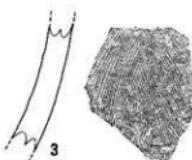
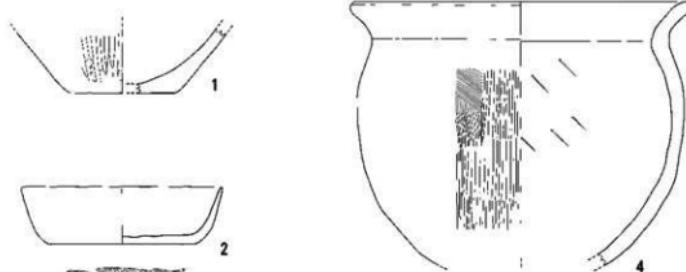
(時期) 出土遺物のうち2などから判断して、奈良時代頃の建物と考えられる。



第6図 1区S I 0 1実測図(2) 遺物出土状況 (S = 1/60)
＊出土遺物は縮尺任意



第7図 1区S I 0 1実測図(1) (S = 1/60)



第8図 1区S I 0 1出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

第2表 1区S101出土遺物観察表 (1) 口径()の数値は後元径

標図番号	写真版	山土地点	種別	法量(cm)	調査盤	特徴	胎土	焼成	色調	備考
8-1	S101 (復元)	甕(陶土器)	底径:(6.6)		外面:ヘラミガキ、ナデ 内面:ナデ		1mm程度の砂粒を含む	良	淡黒茶色	一部のみ残存
8-2	11	S101 (須恵器)	口径:(12.2) 高さ:3.5 底径:9.0		外面:回転ナギ、回転糸切り	体部は外方に直線的に開く	1mm程度の砂粒を含む	良	淡茶褐色	残存率40%
8-3	S101 (床面近)	甕? (七輪器)			外面:ハケメ、ナデ 内面:ラケズリ	器壁が厚い	1~4mm程度の砂粒を含む	良	淡黒茶色	一部のみ残存
8-4	11	S101 (床面近)	甕 (十輪器)	口径:20.0	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1~3mm程度の砂粒を含む	良	淡黄褐色	残存率40%
8-5	11	S101 (床面近)	甕 (上輪器)	口径:21.5	外面:ナデ、一部ハケメ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1~3mm程度の砂粒を含む	良	淡茶褐色	残存率40%
8-6	11	S101 (床面近)	甕 (十輪器)	口径:(35.2)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ヘラケズリ	肩部が張らない	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黒茶色	残存率30%

第3表 1区S101出土遺物観察表 (2) ()の数値は現行長

標図番号	写真版	出土地点	種別	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
8-7	S101 (床面近)	鉄 罐		(7.9)	(3.4)		端化により破損

S102(第9図)

(立地) 標高約270.0mに立地する。神戸川からの比高は約13mを測る。

(規模・概要) 北側半分が既に流出しており残存状況が良くないため建物跡かどうか判断が難しい。平面形・規模とも明らかでないが、円形で径3~4m前後と推測される。壁は緩やかな傾斜をもって掘り込まれており、床面との境は明瞭でない。また床面からはピット等は検出されなかった。

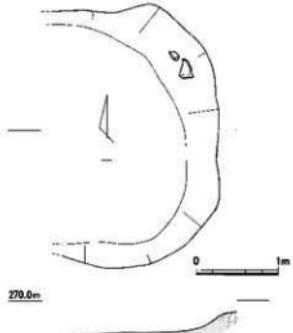
(出土遺物・時期) 遺構に伴う遺物は出土していない。したがって時期も明らかでない。

S103(第10図)

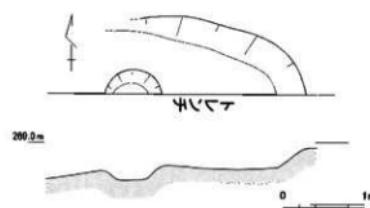
(立地) 標高約269.0mに立地する。神戸川からの比高は約12mを測る。

(規模・概要) 調査前のトレチで遺構の大部分を破壊してしまったためその詳細については明らかにできなかった。残存部分からは平面が方形状の建物跡になる可能性が考えられるが、推測の域をでない。壁は緩やかな傾斜をもって掘り込まれている。床面ではピットを一基確認しているが、上層の様子からピットはほかにも数基存在したものと考えられる。

(出土遺物・時期) 本遺構に伴う遺物は出土していない。したがって時期も明らかでない。



第9図 1区S102実測図 (S=1/80)



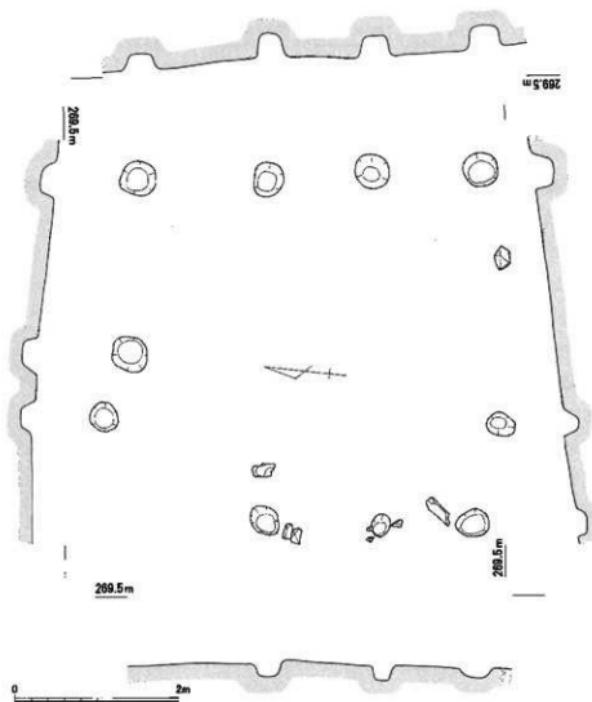
第10図 1区S103実測図 (S=1/60)

S B 0 1 (第11図)

(立地) 標高約269.0mに立地する。神戸川からの比高は約12mを測る。S I 0 1 の南西に隣接して存在するが、主軸はそれからややずれている。

(規模・概要) 柱穴と想定されるビットは全部で9基検出している。北西側のビットが認められないが、基本的には3間×2間の建物跡と想定される。各柱間は南北方向が1.3m前後、東西方向が2.0m前後で、全体として約4.2m×4.1の規模である。ビットは径が約40cm、深さは約20~30cmであったが、ビット上面は既に欠われているものと考えられる。

(出土遺物) 本遺構付近では包含層も含めて多量の土師器片が出土している。その中にこの建物に伴う遺物もあると考えられるが、厳密に区別することはできなかったため、本遺構付近の遺物は包含層出土の遺物として別に掲載している。



第11図 1区SB 01実測図 (S=1/80)

S B 0 2 (第12図)

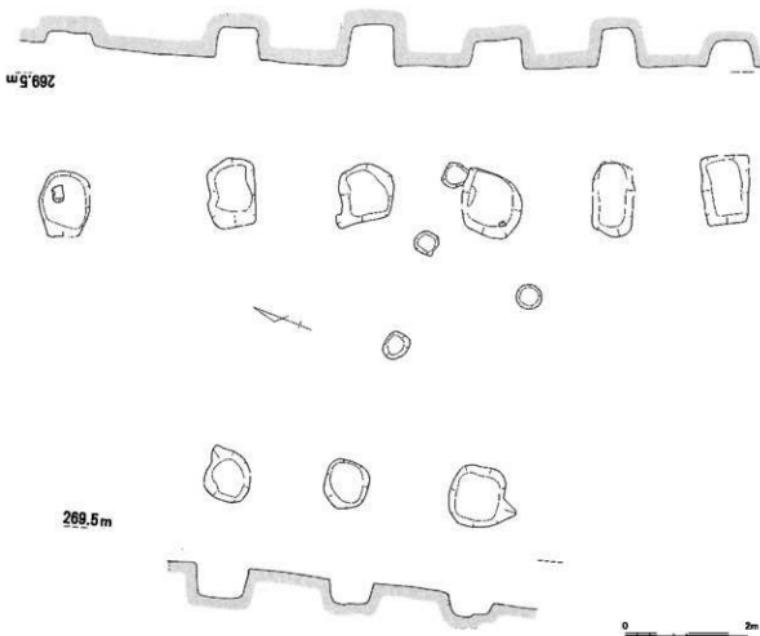
(立地) 調査区の北側、標高約269.0mに立地する。神戸川からの標高は約12mを測る。

(規模・概要) 柱穴と想定されるビットは東側で6基、西側で3基の計9基を検出した。このうち東側のビット1基は他のものと比べて浅い上に柱間が若干長いことから直接関係したものではない。

ことも考えられる。また西側のピットが3基しか検出されていないため疑問も残るが、1間×4間（または1間×5間）の建物であったものと考えられる。ピットは平面形が長方形状を呈するものが多く、その規模は約1.2m×0.6m、深さは40~80cmと大型である。各柱間は1.8~2.0mを測り、全体では南北方向約11.0m、東西方向約5.0mの規模になる。

（出土遺物）本遺構に伴う遺物は出土していない。

（時期）本遺構に直接伴う遺物がないため明確な時期を特定することは難しいが、隣接する神原I遺跡の例などから近世以降のものである可能性が高いと考えられる。



第12図 1区SB 02実測図 (S=1/80)

SB 03 (第13図)

（立地）SB 01から南に約5mの所に立地する。標高は約269.0mである。

（規模・概要）確認された柱穴は基本的に建物東側の柱穴と考えられるものである。西側の柱穴は一部に可能性のあるものも認められるが、残存状況が良くなく明らかでない。柱間はSB 01とはほぼ同じ約1.3mで、2間以上の建物であったと考えられる。

（出土遺物・時期）SB 01同様、本遺構付近では須恵器や土師器の破片が多く出土している。これらの遺物の中にはこの建物跡に伴うものもあると考えられるが、厳密な区分はできなかったため別に包含層出土の遺物として掲載している。これら遺物の多くが奈良時代頃のものと考えられるところから、奈良時代頃の建物である可能性が高い。

S B 0 4 (第14図)

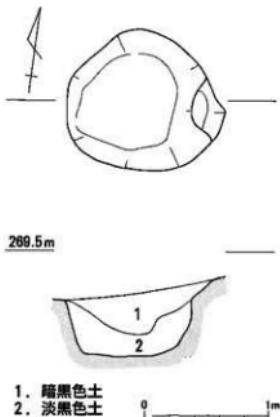
(立地) 標高約269.0mの所に立地している。
 (規模・概要) ほぼ同規模のピットが3基直線的に並んでおり、調査段階ではこれに対応する辺のピット列は確認できなかったものの掘建柱建物跡の可能性が高いものと判断した。ピットは径が約70cmを測り若干大きめで、またピット間の距離も1m前後ではかの建物跡より短い。これを建物跡とした場合、柱穴の規模や各柱間の距離が異なる建物であったと考えられるが詳細は不明である。

(出土遺物・時期) S B 0 1、S B 0 3と同様に周辺から多くの遺物が出土している。それらからは同じく奈良時代頃と想定されるが、遺構の様相が違うことから時期が異なる可能性も考えられる。

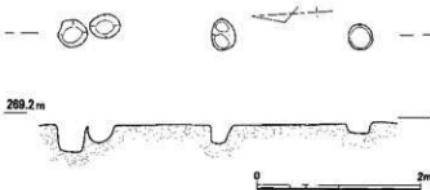
S K 0 1 (第15・16図、第4表)

標高約269.0m地点に位置する。平面形はほぼ円形で、径約1.2m、深さ約60cmを測る。上坑内からは土師器片が出土しており、このうち実測が可能だったものについては第16図に掲載した。土師器はどちらも器壁の比較的薄いもので、外面はハケ目、内面はヘラ削りを施している。

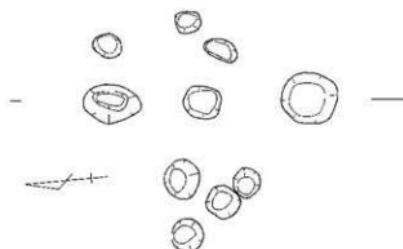
古墳時代以降のものであると思われるが、明確な時期は不明である。



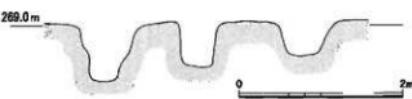
第15図 1区SK 0 1実測図 (S = 1/40)



第13図 1区SB 0 3実測図 (S = 1/60)



第14図 1区SB 0 4実測図 (S = 1/60)



第16図 1区SK 0 1出土遺物実測図 (S = 1/3)

第4表 1区SK01出土遺物観察表

口徑()の数値は復元径

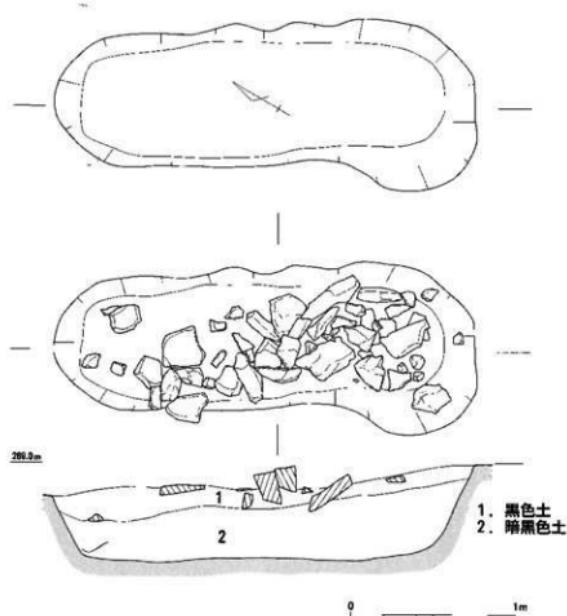
種別 番号	写真 図版	出土地点	種別	法長(cm)	面	特徴	胎土	焼成	色調	備考
16-1	11	SK01 (覆土4) (土師器)	壺	口径:(12.8)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1~3mm程度 の砂粒を含む	良	明黄褐色	表面が一部黒化 残存率20%
16-2	11	SK01 (覆土中) (土師器)	壺	口径:(16.6)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1~3mm程度 の砂粒を含む	良	淡黄褐色	残存率30%

SK02 (第17・18図、第5・6表)

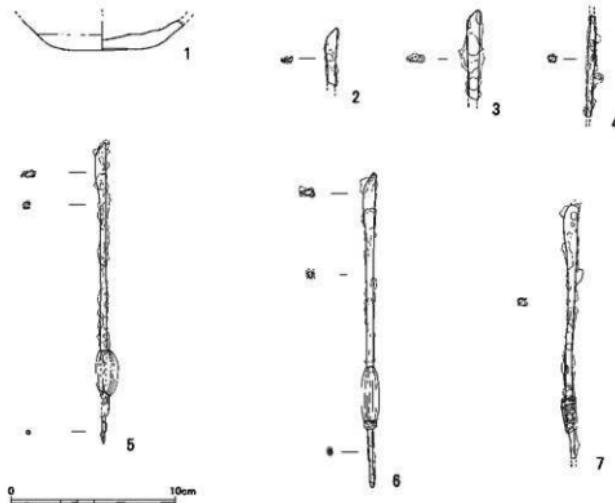
標高269.0m地点に立地している。斜面に対してほぼ平行につくられており、規模は長軸が2.6m、短軸80cm~1m、深さ約30cmを測る。この上坑は、その上面に大きさが30cm前後の石が散乱した状態で検出されており、原形は留めていないものの、上坑の上面を石で覆ったいわゆる石蓋上坑とよばれるものと考えられる。

土坑からは須恵器や十師器の破片のほか、底面付近で5点以上の鉄鎌が出士した。これらのうち実測が可能だったものについては、第18図に掲載した。1は須恵器壺と考えられるが別のもの可能性もある。2~7は鉄鎌である。すべて長茎の鎌で片刃箭式であると考えられるが、全体的に鋒化しているために鎌身や闘の形態など不明瞭な部分も多い。

時期については直接遺構に伴う上器が出土していないため明らかでないが、底面近くから出土した鉄鎌から古墳時代後期前半代のものである可能性を考えておきたい。



第17図 1区SK02実測図 (S=1/30)



第18図 1区SK 02出土遺物実測図 (S=1/3)

第5表 SK 02出土遺物観察表 (1)

□印()の数値は復元径

標識番号	可否	出土地点	種別	法量(cm)	調査	特徴	地土	焼成	色調	備考
18-1	可	SK 02 (裏面中)	环?	底径: 4.8	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ		1mm程度の砂粒を含む	良	青灰色	底部のみ残存

第6表 SK 02出土遺物観察表 (2)

()の数値は現行長及び現存幅

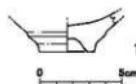
標識番号	可否	出土地点	種別	全長(cm)	刃部幅(cm)	備考
18-2	可	SK 02 (裏面近)	鉄 鋸	(3.5)	0.8	長茎鋸、刃部の一部のみ残存
18-3	可	SK 02 (裏面近)	鉄 鋸	(5.6)	0.8	長茎鋸、刃部の一部のみ残存
18-4	可	SK 02 (裏面近)	鉄 鋸	(6.5)	0.4	長茎鋸、茎部の一部のみ残存
18-5 11	可	SK 02 (裏面近)	鉄 鋸	18.6	0.8	長茎鋸
18-6 11	可	SK 02 (裏面近)	鉄 鋸	19.3	0.8	長茎鋸
18-7 11	可	SK 02 (裏面近)	鉄 鋸	(15.7)	0.9	長茎鋸

SK 03 (第20図)

1区第2調査区の中央より北側に、周辺の構造とやや離れて存在している。平面形は円形を呈し、規模は径1.4mを測るが掘りこみは浅い。土坑は一部に粘土が貼られ、その周囲を10~20cmほどの大きさの石が不規則に囲んでいた。炉の可能性も考えたが、粘土は熱を受けている様子もないことから別の性格のものと想定される。

SK 04 (第19・20図、第7表)

1区第2調査区の南側、標高272mの所に位置している。平面形は円形で、径1.1m、深さ0.6mを測る。土坑内からは肥前系と考えられる陶器碗が出上している。



第19図 1区SK 04出土
遺物実測図 (S=1/3)

この土坑の性格については明らかでないが、近世の墓である可能性も考えられる。

SK 05 (第20図)

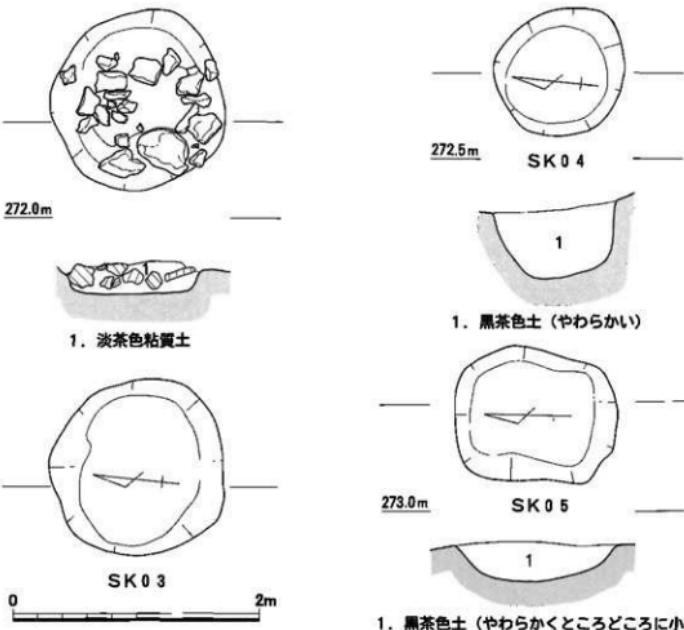
1区第2調査区の南側、SK 04の東隣に位置している。平面形は方形と考えられ、長軸1.3m、短軸1.1m、深さ30cmを測る。遺物等は出土していない。

この土坑の性格については明らかでないが、SK 04と同じく近世の墓である可能性も考えられる。

第7表 SK 04出土遺物観察表

口述()の数値は復元値

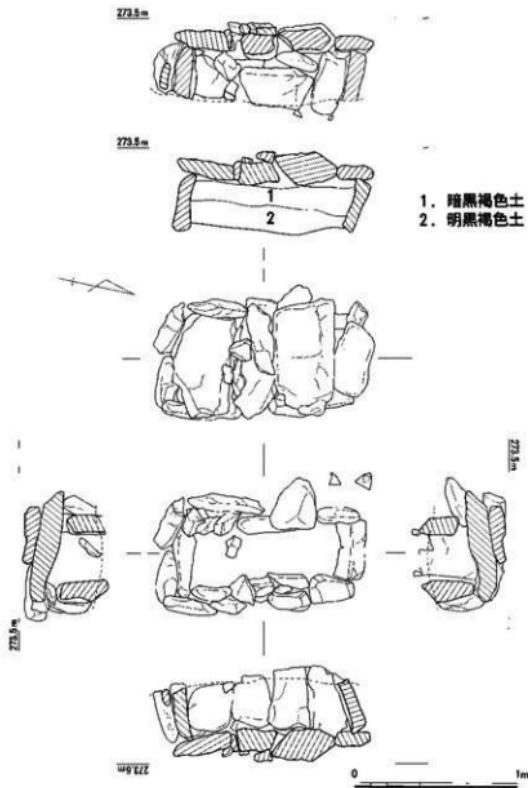
調査号	写真 図版	出土地点	種別	器種	法量(㎤)			特徴および文様・施物	推定生産地	残存量
					口径	底径	器高			
19-1	11	SK 04 (覆土中)	陶器	碗			(3.5)	削り出し高台 内面に施物	肥前	底部の半分が残存



第20図 1区SK 03~05実測図 (S=1/40)

箱式石棺（第21図）

調査区の最も北側、標高268.5mの地点に立地している。石棺は割石を用いて造られた箱式石棺で、規模が内法で測って長さ1.0m、幅0.3m、床面からの高さは0.25m前後と小型である。これに伴う埴丘や溝などは確認できなかった。石棺の蓋石は基本的に4枚の石で構成され、一部蓋石と蓋石との間隙を塞ぐように小さな石が配されていた。また棺身は10個以上の石で構成されており、東側は4石、西側は3石立て並べられている。側石の一部は二重に石が置かれているところも見られた。粘土等による目張りなどは認められず、調査時点で棺内には既に上砂が流入していた。遺物などは一切出土しておらず、したがって時期などは明らかでないが、古墳時代のものである可能性がある。



第21図 1区箱式石棺実測図 (S = 1 / 30)

遺構に伴わない遺物（第22～29図、第8～15表）

1区では包含層中から多くの遺物が検出されている。中でも土師器片が多く出土しており、SB01、SB03付近では集中的に出土した。先に報告したとおり、出土した土師器のうちいくつかはこれらの遺構に直接伴うものと考えられるが、厳密に区分する事ができなかったので、ここで合わせて報告することとする。^(註3)

第22図には繩文七器を掲載した。1は口縁部内面に2段の刺突列を有するもので、端部にもキザミが施される。2～6はキザミのある突帯文を有する土器、7～10は粗製の深鉢と考えられる。

繩文土器は出土量が少なく、また時期も後期～晩期と考えられるものがほとんどを占めるようである。^(註4)

第23図には弥生土器のうち内面・外面とも無文の上器を掲載した。1～5のように口縁部の屈曲が弱いものと、6～8のように比較的強いものがある。調整はヘラミガキやナデによるものがほとんどである。

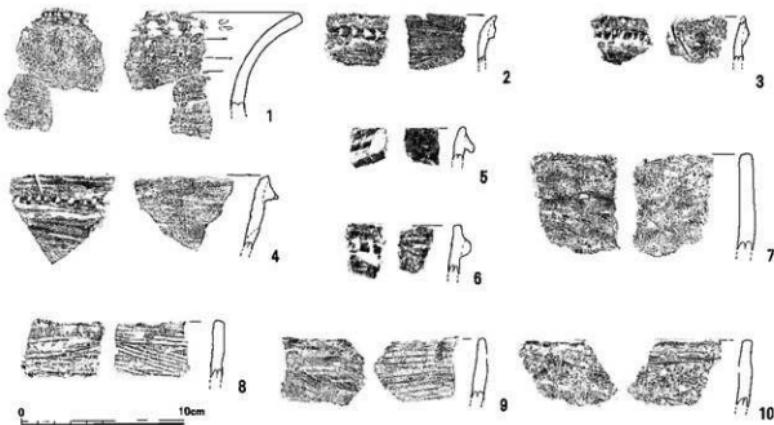
第24図も弥生土器である。1は壺の肩～胴部にかけての破片と考えられるもので、直線文・斜格子文が描かれている。2～5は壺の口縁部～頸部の破片と考えられるものである。2は口縁部に平坦面を有するもので、そこに斜格子文や円形浮文が、端部にはキザミが施されている。また口縁部～頸部にかけても外面にキザミのある断面三角突帯や斜格子文が施され装飾度が強い。3もほぼ同様の形態の壺の口縁部で、平坦面には斜格子文、外面には波状文が描かれている。4・5は壺の頸部で、4にはキザミのある断面三角突帯や棒状浮文が、5にはキザミのない断面一角突帯が施される。6は尚坏である。口縁部は平坦面を有し内面・外面ともヘラミガキされている。7～15は壺・甕類である。7・8は器壁が全体的に薄く、口縁部の強く屈曲する形態のものである。9～13は口縁端部が拡張され、そこに数条の凹線文が施されるもので、内面は頸部肩部までヘラケズリがなされる。14は壺と考えられるもので、口縁端部は丸く、無文である。15は甕と考えられるもので、口縁部は無文で端部は尖り気味である。

これらの土器の時期は、第24図の1～8が中期中葉頃、9～13が後期前葉頃、14・15が後期後葉のものと考えられる。第23図に掲載した上器については時期がはっきりとしないが、中期後半代以前と考えておきたい。

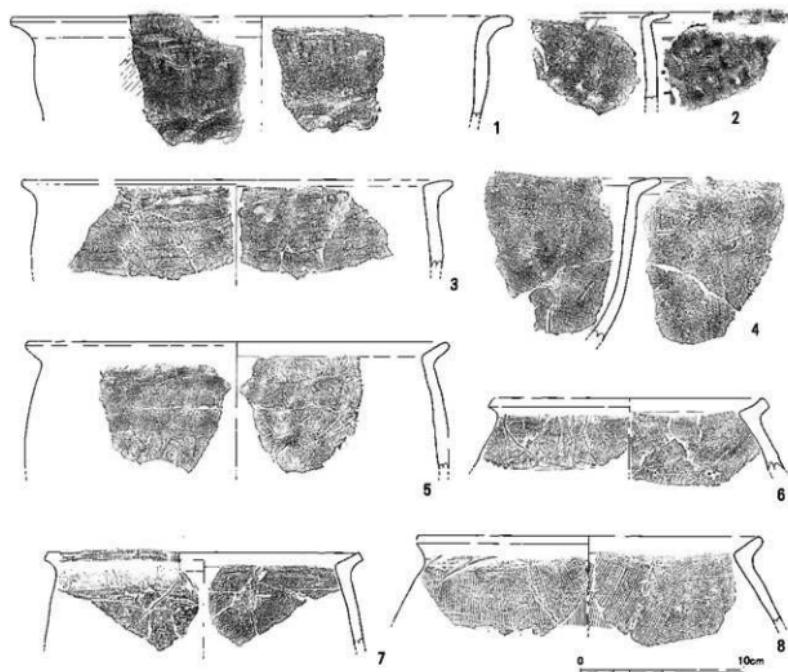
第25図・26図は土師器・須恵器類を掲載した。第25図は土師器蓋である。全体の形がわかるものはないが、胴部が張るものやその反対で胴部が張らないもの、長めの胴部になるとされるものなどが見られる。第26図1は破片のため推測の域をでないが、須恵器蓋と考えられるものである。外面はヘラケズリが認められることから、他の須恵器よりも時期がさかのばるものと考えられる。2も須恵器蓋である。口縁部の内側にはかえりがつく。3～6は須恵器坏である。いずれも高台のつくもので、3・4は体部が丸みをもち、6は直線的に立ち上がる。8は土師器坏である。内面・外面とも丁寧にヘラミガキがされ、また内面には暗文が見られる。9・10は土師器の高坏と考えられるものである。10は内面・外面とも赤色塗彩されている。11～13は瓶の把手部分と考えられ、様々な形態のものがみられる。14・15は瓶である。14は把手がつき脚部には円形の孔が穿たれている。

第27図は弥生土器壺・甕類の底部、第28図は石器を掲載した。第28図1は黒曜石製の石礫である。^(註5)

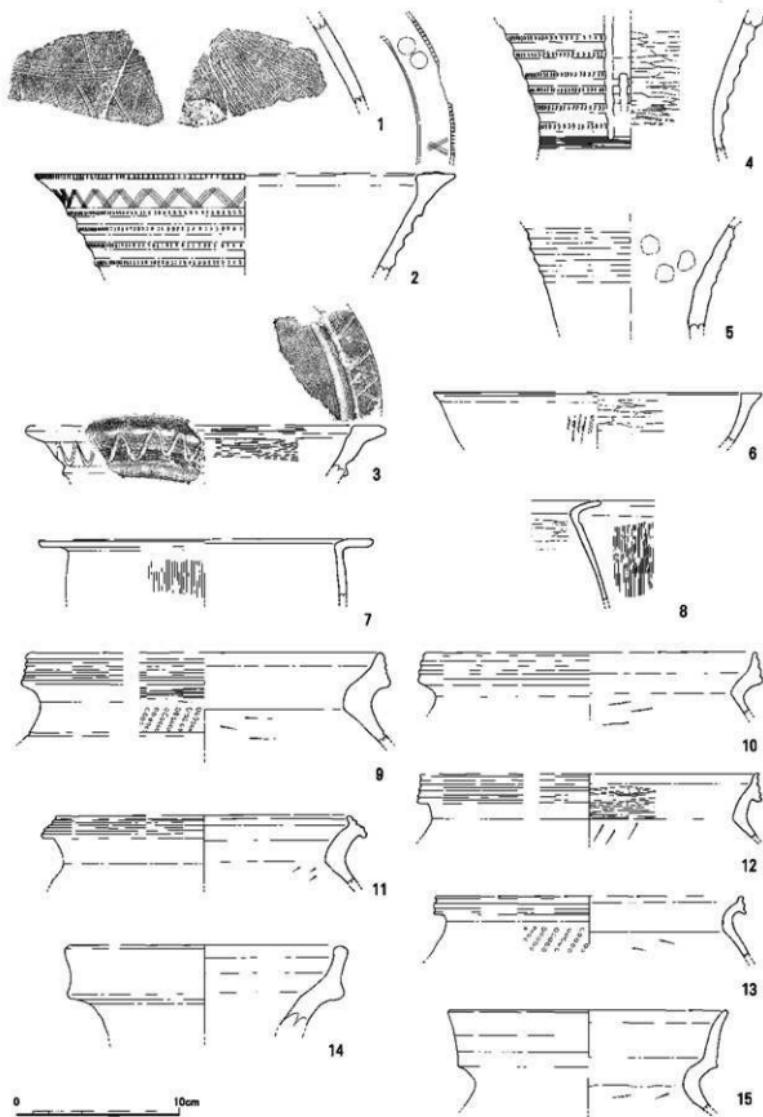
第29図は陶磁器類を掲載した。1は備前の鉢で、15世紀代のものと推測される。また2は青磁で劍先の鎬連弁文が認められる。3～5はいずれも肥前系の碗や皿と考えられるものである。掲載遺物以外でも肥前系と考えられるものが多く出土した。



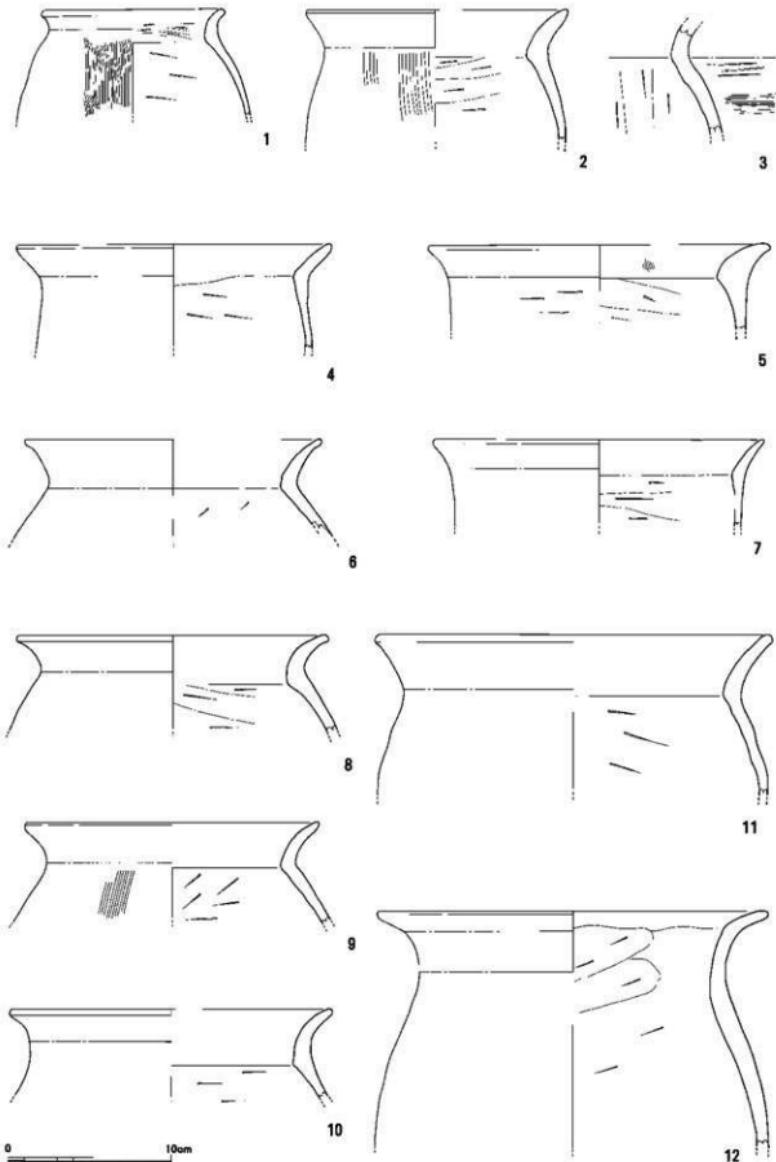
第22図 1区遺構に伴わない出土遺物実測図(1) 縄文土器 (S = 1 / 3)



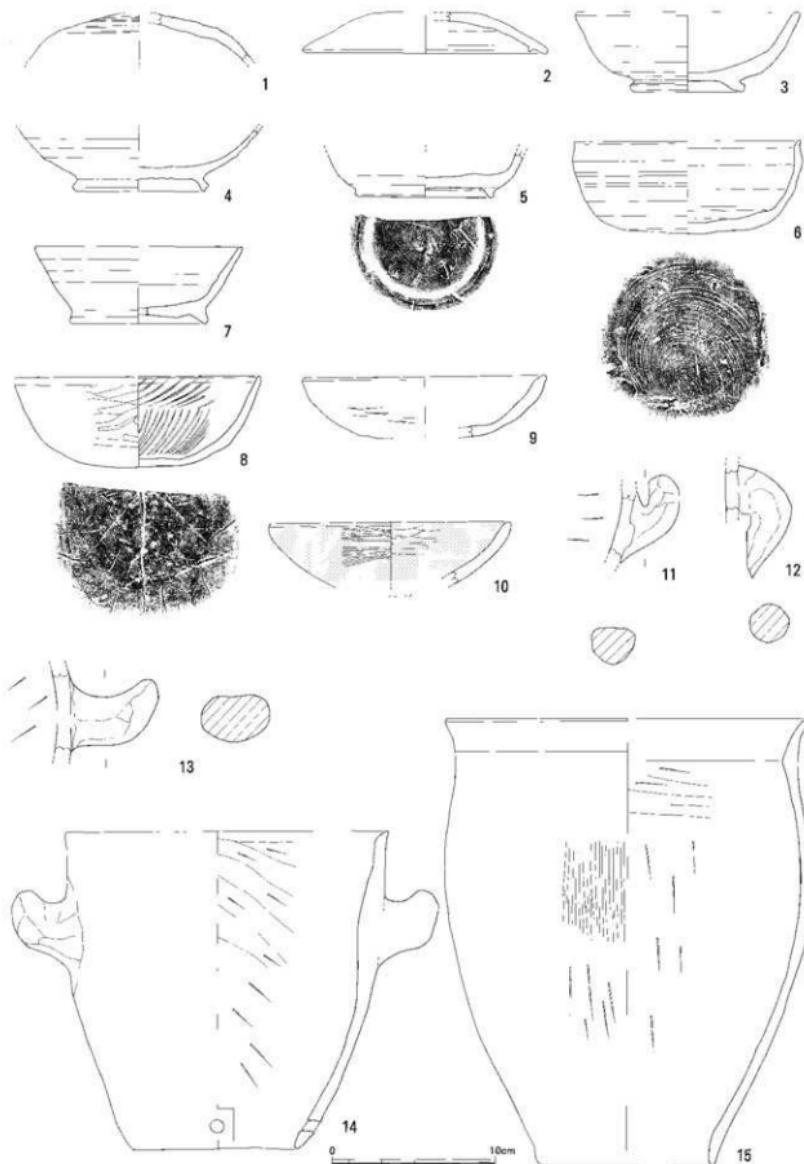
第23図 1区遺構に伴わない出土遺物実測図(2) 亦生土器 (S = 1 / 3)



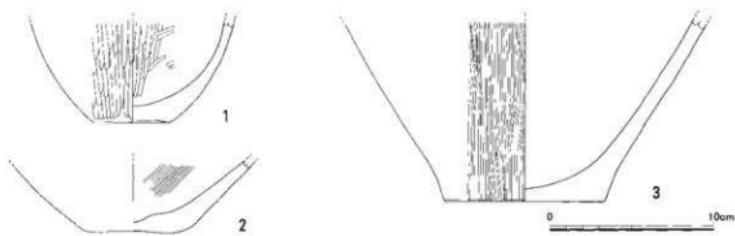
第24図 1区遺構に伴わない出土遺物実測図(3) 弥生土器 (S = 1 / 3)



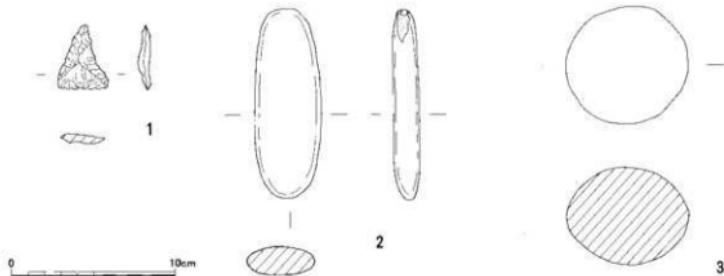
第25図 1区遺構に伴わない出土遺物実測図(4) 土師器 (S = 1 / 3)



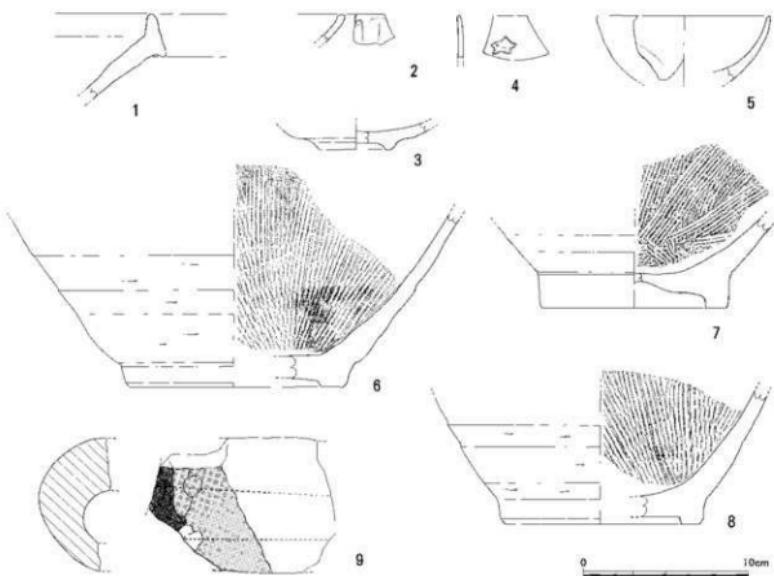
第26図 1区遺構に伴わない出土遺物実測図(5) 須恵器・土師器・その他 (S = 1 / 3)



第27図 1区遺構に伴わない出土遺物実測図(6) 弥生土器 (S = 1 / 3)



第28図 1区遺構に伴わない出土遺物実測図(7) 石器 (S = 1 / 3)



第29図 1区遺構に伴わない出土遺物実測図(8) 陶磁器類・その他 (S = 1 / 3)

第8表 1区遺構に伴わない出土遺物観察表(1) (第22図)

口径()の数値は復元径

探査番号	写真番号	出土地点	種別	法量(cm)	調査	特徴	胎土	焼成	色調	備考
22-1	12	1区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ、ミガキ 内面:ナデ、ケズリ	口縁内部に刺突文 口縁部にキザミ	1~2mm程度の 砂粒を多く含む	良	茶色	口縁部の一部のみ残存
22-2	12	1区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	キザミのある突起 内面:ナデ	1~2mm程度の 砂粒を含む	良	黒茶色	口縁部の一部のみ残存
22-3	12	1区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	キザミのある突起 内面:ナデ	1~3mm程度の 砂粒を含む	良	外側:黒褐色 内側:茶褐色	口縁部の一部のみ残存
22-4	12	1区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	キザミのある突起 内面:ナデ、(条痕?)	1mm程度の砂粒 を含む	良	黒褐色	口縁部の一部のみ残存
22-5	12	1区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	キザミのある突起 内面:ナデ	1~2mm程度の 砂粒を含む	良	茶褐色	口縁部の一部のみ残存
22-6	12	1区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	キザミのある突起 内面:ナデ	1~2mm程度の 砂粒を含む	良	黄褐色	口縁部の一部のみ残存
22-7	12	1区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ナデ		1~3mm程度の 砂粒を含む	良	黄褐色	口縁部の一部のみ残存
22-8	12	1区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ナデ		1~2mm程度の 砂粒を含む	良	外側:黒褐色 内側:淡茶褐色	口縁部の一部のみ残存
22-9	12	1区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ナデ		1mm程度の砂粒 を含む	良	外側:黒褐色 内側:淡茶褐色	口縁部の一部のみ残存
22-10	12	1区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ナデ		1~3mm程度の 砂粒を含む	良	茶褐色	口縁部の一部のみ残存

第9表 1区遺構に伴わない出土遺物観察表(2) (第23図)

口径()の数値は復元径

探査番号	写真番号	出土地点	種別	法量(cm)	調査	特徴	胎土	焼成	色調	備考
23-1		1区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(30.8)	外面:ヘラミガキ、ナデ 内面:ヘラミガキ、ナデ 指測直底	口縁部が外方に傾 やかに屈折	1~2mm程度の 砂粒を多く含む	良	褐色	口縁部の一部のみ残存
23-2	12	1区 (包含層)	壺 (弥生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	口縁部が外方に傾 折	1~2mm程度の 砂粒を多く含む	良	淡黒茶色	
23-3	12	1区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(25.6)	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	幅の広いヘラミガキ キ、口縁部が外方に 強く屈折	1mm程度の砂粒 をわずかに含む	良	褐色	
23-4	12	1区 (包含層)	壺 (弥生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラミガキ	口縁部が外方に傾 折	1mm程度の砂粒 を含む	良	茶色	
23-5	12	1区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(25.2)	外面:ナデ 内面:ナデ	口縁部が外方に傾 折	1mm程度の砂粒 をわざかに含む	良	淡褐色	
23-6	12	1区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(16.2)	外面:ナデ、ヘラミガキ 内面:ナデ	口縁部が外方に傾 く屈折	1~2mm程度の 砂粒を含む	良	茶褐色	
23-7	12	1区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(19.0)	外面:ナデ、ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	口縁部が外方に傾 く屈折、口縁部に 半球面を有する	1mm程度の砂粒 をわざかに含む	良	茶褐色	
23-8	12	1区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(20.6)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ハケメ	口縁部が外方に傾 く屈折	1mm程度の砂粒 をわざかに含む	良	茶褐色	

第10表 1区遺構に伴わない出土遺物観察表(3) (第24図)

口径()の数値は復元径

探査番号	写真番号	出土地点	種別	法量(cm)	調査	特徴	胎土	焼成	色調	備考
24-1		1区 (包含層)	壺?	(弥生土器)	外面:ナデ 内面:ハケメ	直線文(へら書き)? 斜格子文	1mm程度の砂粒 を含む	良	淡褐色	
24-2	13	1区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(25.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	キザミのある突起 斜格子文、円形浮文 口縁部は上面が平 坦面となり、端部に キザミを有する	1mm程度の砂粒 をわざかに含む	良	暗褐色	
24-3	13	1区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(22.0)	外面:ハケメ、ナデ 内面:ハケメ	ヘラ書き波状文 斜格子文	1mm程度の砂粒 をわざかに含む	良	暗褐色	
24-4	13	1区 (包含層)	壺 (弥生土器)		外面:ナデ 内面:ミガキ	キザミのある突起 斜格子文? 横状 斜格直線文?	1mm程度の砂粒 をわざかに含む	良	暗褐色	
24-5	13	1区 (包含層)	壺 (弥生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	キザミのない三角 突起	1mm程度の砂粒 をわざかに含む	良	灰白色	
24-6	13	1区 (包含層)	高杯 (弥生土器)	口径:(20.0)	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	口縁部は上面が平 坦面となる	1mm程度の砂粒 をわざかに含む	良	黒褐色	

24-7	13	1区 (包含層)	燒 (弔生土器)	口径:(20.4)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ	口縁部が外方に膨張する器壁が薄い	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	黄褐色	
24-8	13	1区 (包含層)	燒 (弔生土器)		外面:ハケメ 内面:ナデ	口縁部が外方に膨張する器壁が薄い	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	黄褐色	
24-9	13	1区 (包含層)	燒 (弔生土器)	口径:(21.4)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ	口縁部に凹線文(4条)	1mm程度の砂粒を多く含む	良	淡黄色	
24-10	13	1区 (包含層)	燒 (弔生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ	口縁部に凹線文(3条)	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄褐色	
24-11	13	1区 (包含層)	燒 (弔生土器)	口径:(17.8)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ	口縁部に凹線文(4条)?	1~4mm程度の砂粒を含む	良	灰白色	
24-12	13	1区 (包含層)	燒 (弔生土器)	口径:(20.5)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ	口縁部に凹線文(4条)	1mm程度の砂粒を多く含む	良	灰白色	
24-13	13	1区 (包含層)	燒 (弔生土器)	口径:(18.6)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ	口縁部に凹線文状の僅み 列点文	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色	
24-14	13	1区 (包含層)	燒 (弔生土器)	口径:(17.2)	外面:ナデ 内面:ナデ		1~3mm程度の砂粒を含む	良	褐色	
24-15	13	1区 (包含層)	燒 (弔生土器)	口径:(17.0)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ	口縁部所面は薄め	1~2mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色 内部:褐色	

第11表 1区遺構に伴わない出土遺物観察表(4) (第25図)

口径()の数値は復元径

辨団 番号 図版	写真 出土地点	種 別	法量(cm)	調 整	特 強	胎 土	焼 成	色 調	備考	
25-1	13	1区 (包含層)	燒 (土師器)	口径:(11.0)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ヘラケズリ	1~2mm程度の砂粒を含む	良	明褐色	口縁部の一箇のみ残存	
25-2	13	1区 (包含層)	燒 (土師器)	口径:(15.6)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ヘラケズリ	1~3mm程度の砂粒を含む	良	赤褐色	口縁部の一箇のみ残存	
25-3	1区 (包含層)	燒 (土師器)		外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1mm程度の砂粒を含む	良	灰白色	口縁部の一箇のみ残存	
25-4	13	1区 (包含層)	燒 (土師器)	口径:(19.0)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ	胸部があまり張ら ない形か?	1~2mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	復元率20%
25-5	1区 (包含層)	燒 (土師器)	口径:(20.8)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1~3mm程度の砂粒を含む	良	褐色	口縁部の一箇のみ残存	
25-6	13	1区 (包含層)	燒 (土師器)	口径:(18.2)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1~4mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	口縁部の一箇のみ残存
25-7	13	1区 (包含層)	燒 (土師器)	口径:(20.2)	外面:ナデ 内面:ナデ、ケズリ	胸部があまり張ら ない	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色	口縁部の一箇のみ残存
25-8	1区 (包含層)	燒 (土師器)	口径:(18.7)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1~2mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	口縁部の一箇のみ残存	
25-9	13	1区 (包含層)	燒 (土師器)	口径:(19.3)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	復元率20%
25-10	13	1区 (包含層)	燒 (土師器)	口径:(17.8)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	口縁部の一箇のみ残存
25-11	13	1区 (包含層)	燒 (土師器)	口径:(23.6)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1~3mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色	復元率30%
25-12	13	1区 (包含層)	燒 (土師器)	口径:(25.0)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ	やや長めの胸部	1~2mm程度の砂粒を含む	良	墨褐色~褐色	復元率40%

第12表 1区遺構に伴わない出土遺物観察表(5) (第26図)

口径()の数値は復元径

辨団 番号 図版	写真 出土地点	種 別	法量(cm)	調 整	特 強	胎 土	焼 成	色 調	備考	
26-1	14	1区 (包含層)	环? (須恵器)		外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ		1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	青灰色	
26-2	14	1区 (包含層)	环 (須恵器)	口径:(15.0) 高さ:(2.5)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ		1mm弱の砂粒を含む	良	青灰色	
26-3	1区 (包含層)	环(高台付) (須恵器)	口径:(13.8) 高さ:(4.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ			2mm大の砂粒を含む	良	青灰色	
26-4	14	1区 (包含層)	环(高台付) (須恵器)	口径: 7.7	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ		1mm程度の砂粒を含む	良	青灰色	器壁が薄い
26-5	14	1区 (包含層)	环(高台付) (須恵器)	口径: 8.2	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ切り 内面:回転ナデ		1mm大の砂粒を含む	普通	灰白色	

26-6	14	1区 (包含層) (乳頭器)	口径: (13.8) 器高: 5.7	外面: 回転ナデ、ナデ、 回転糸切り 内面: 回転ナデ、ナデ	体部が硬やかに屈曲	2mm以上の砂粒を含む	良	灰 色	
26-7	14	1区 (包含層) (乳頭器)	口径: (12.0) 器高: (8.3)	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	体部が直線的に開く	1mm程度の砂粒を含む	良	青灰色	
26-8	14	1区 (包含層) (坏)	口径: 14.9 器高: 5.6	外面: ナデ、ヘラミガキ 内面: ナデ		1mm以上の砂粒を含む	良	棕 色	縦文が認められる
26-9	14	1区 (包含層) (坏?) (土師器)	口径: (14.5)	外面: ナデ 内面: ナデ		1~2mm程度の砂粒を含む	良	褐 色	高坏の坏部か?
26-10	14	1区 (包含層) (坏?) (土師器)	口径: (14.6)	外面: ハケメ 内面: ヘラミガキ		1~2mm程度の砂粒を含む	良	赤褐色	内外面とも赤色 陶料豊富
26-11	14	1区 (包含層) (把手) (土師器)		外面: ナデ (内面): ヘラケズリ		1~3mm程度の砂粒を含む	良	黑褐色	瓶の把手か?
26-12	14	1区 (包含層) (把手) (土師器)		外面: ナデ		1mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	瓶の把手か?
26-13	14	1区 (包含層) (把手) (土師器)		外面: ナデ (内面): ヘラケズリ		1~3mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	瓶の把手か?
26-14	14	1区 (包含層) (土師器) 底径: (10.1)	口径: (19.6) 器高: 19.5 底径: (10.1)	外面: ナデ 内面: ナデ、ヘラケズリ	把手がある 脚部には円孔	1~2mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	
26-15	14	1区 (包含層) (土師器)	口径: (20.0) 器高: 27.4 底径: (10.4)	外面: ナデ、ハケメ 内面: ナデ、一部ヘラケズリ	把手・円孔は、認 められない	1~2mm程度の砂粒を含む	良	棕 色	

第13表 1区遺構に伴わない出土遺物観察表(6) (第27図)

口径()の数値は復元径

探査 番号 図版	写真 図版	出土地点	種 別	法量(cm)	調 整	特 徵	胎 土	焼成	色 調	備考
27-1		1区 (包含層) (弥生土器)	底部?	底径: 4.6	外面: ナデ、ミガキ 内面: ミガキ	1~2mm程度の砂粒をわずかに含む	良	黄褐色		
27-2		1区 (包含層) (弥生土器)	蓋?	底径: 6.0	外面: ナデ 内面: ナデ	1~2mm程度の砂粒を含む	普通	黄褐色		
27-3	15	1区 (包含層) (弥生土器)	蓋?	底径: 9.5	外面: ナデ、ハケメ 内面: ナデ、一部ハケメ	1~2mm程度の砂粒を多く含む	良	黄褐色	胎土中に石英を多く含む	

第14表 1区遺構に伴わない出土遺物観察表(7) (第28図)

探査 番号 図版	写真 図版	出土地点	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	重 墓(g)	備 考
28-1	15	1区 (包含層)	石 繩	2.0	1.5		平基式の石繩、材質は黒曜石である
28-2	15	1区 (包含層)		11.9	4.1		
28-3	15	1区 (包含層)	賽 石	7.7	7.5		

第15表 1区遺構に伴わない出土遺物観察表(8) (第29図)

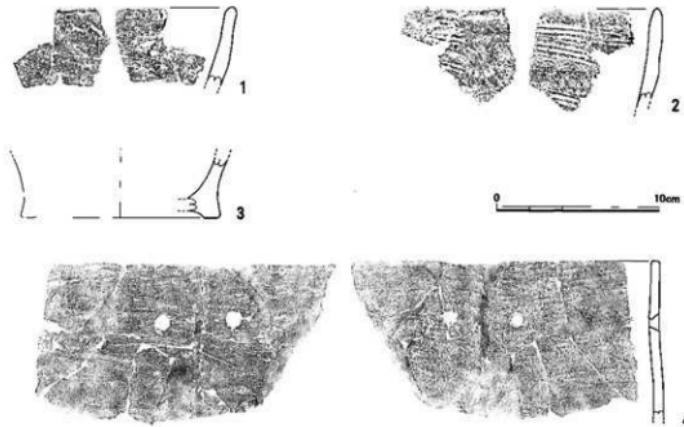
口径()の数値は復元径

探査 番号 図版	写真 図版	出土地点	種 別	器 様	法 量(cm)			特徴および文様・施錫	推定生産地	残 存 量
					口径	底径	高さ			
29-1	15	1区 (包含層)	炻器	鉢?					備 前	口縁部の一部のみ残存
29-2	15	1区 (包含層)	磁器	碗				青磁、刺先の鉛錫弁文	中 國 (龍泉窯系?)	口縁部の一部のみ残存
29-3	15	1区 (包含層)	陶器	鉢	(4.5)			見込みに施土自痕	肥 前	底部の一部が残存
29-4	1区 (包含層)	磁器	碗						肥 前	口縁部の一部のみ残存
29-5		1区 (包含層)	磁器	碗	(10.6)				肥 前?	
29-6	1区 (包含層)	陶器	鉢		13.0			外面は施釉	在地系	
29-7	1区 (包含層)	陶器	鉢		11.4				在地系	
29-8	1区 (包含層)	陶器	鉢		(12.0)				在地系	
29-9	1区 (包含層)		羽口							

第3節 1区の調査 (2) - 第2黒色土・第2ハイカ上面-

神原Ⅱ遺跡においては、第2黒色土層が2.5mにも及ぶ厚いハイカ層の下にわずかに存在していることが確認された。これまでの調査においても、この層に縄文時代の遺構や遺物が含まれていることが分かっており、掘り下げて調査をおこなった。ただし調査期間の関係上、平成9(1997)年度は1区部分のみ行い、2・3区の部分については平成10(1998)年度に行っている。

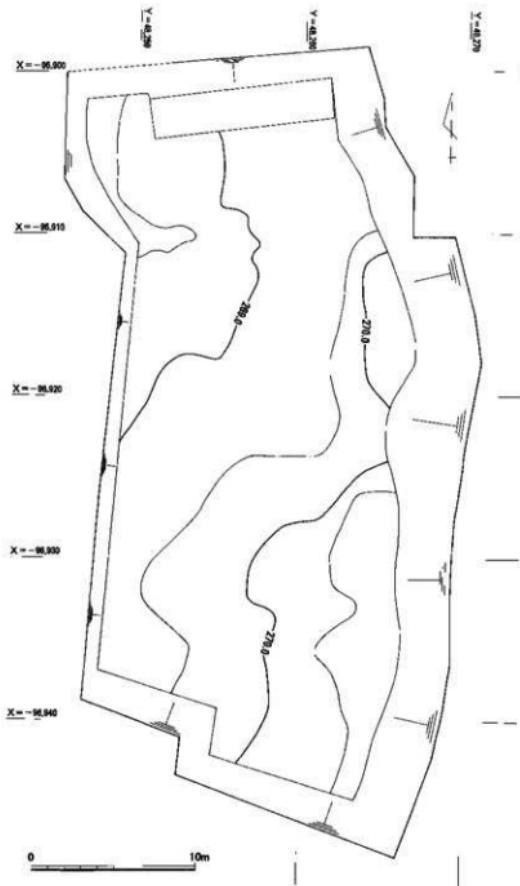
調査の結果、本調査区における第2黒色土層からは顕著な遺構・遺物とも確認されず、第30図に掲載した縄文土器片などがわずかに確認されたのみである。出土した遺物は4を除き小片で、いずれも粗製の深鉢と考えられる。4は口縁端部に面を行するもので、口縁部よりやや下がったところに円形の穿孔がみられる。



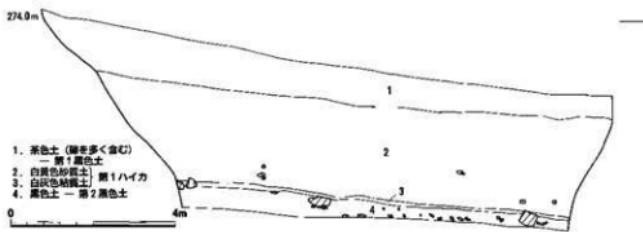
第30図 1区遺構に伴わない出土遺物実測図 (第2黒色土) (S = 1 / 3, 4はS = 1 / 4)

第16表 1区遺構に伴わない出土遺物観察表 (9) (第30図) 口括()の数値は復元径

規格番号	写真図版	出土地点	種別	法量(cm)	調 整	特 微	胎 土	焼 成	色 調	備 考
30-1	15	1区 (第2黒色土)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ケズリ		1mm人の砂粒 を含む	良	外側:黒褐色 内側:淡褐色	口縁部の一帯のみ が残存
30-2	15	1区 (第2黒色土)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ、条痕 内面:ナデ、条痕		1.5mm大の砂 粒を含む	良	淡褐色	口縁部の一帯のみ が残存
30-3	1区 (第2黒色土) 底径:12.2	深鉢 (縄文土器)			外面:ナデ? 内面:ナデ?		1.5mm大の砂 粒を含む	良	外側:灰褐色 内側:灰白色	底部の一部のみ残 存
30-4	15	1区 (第2黒色土)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ、条痕? 内面:ナデ	円孔が穿たれ る、口縁端部 は向む	1mm程度の砂 粒を含む	良	灰黄色	残存率20%



第31図 1区第2ハイカ上面地形測量図 ($S = 1/300$)



第32図 1区土層図 ($S = 1/120$)

第4節 2区の調査

2区は1区の南側、標高272~275mにかけて位置する調査区で、調査以前は水田であったところである。基本層序は水田耕作土、水田造成時の盛上、黒色土、ハイカ層となっている。

調査の結果、建物跡や土坑など遺構のほか多くの弥生土器をはじめとする遺物を確認した。中心となる時期は出土遺物から弥生時代と奈良~平安時代にかけての2つの時期であると考えられる。なお、本調査区北側では調査前より多量の鉄滓が散乱しており製鉄関連遺構の存在が想定されていたが、今回調査した範囲においては確認されなかった。

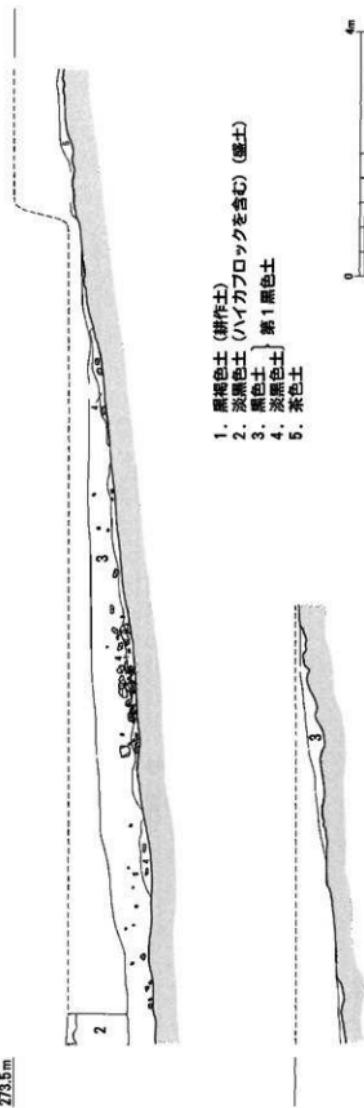
また、ハイカ層以下の調査については時間の関係上平成9(1997)年度には行わなかったが、翌年度にトレンチにより遺構・遺物の有無についての確認がなされ、一部調査がされている。それについては既に報告されているため、ここでは省略する。

以下、各遺構・遺物について報告することとする。ただし、いずれのものも残存状況が良くなく、また時期の判断が可能な遺物が少ないなど、時期の推測が難しいものもあるため、基本的に調査順に報告することとする。

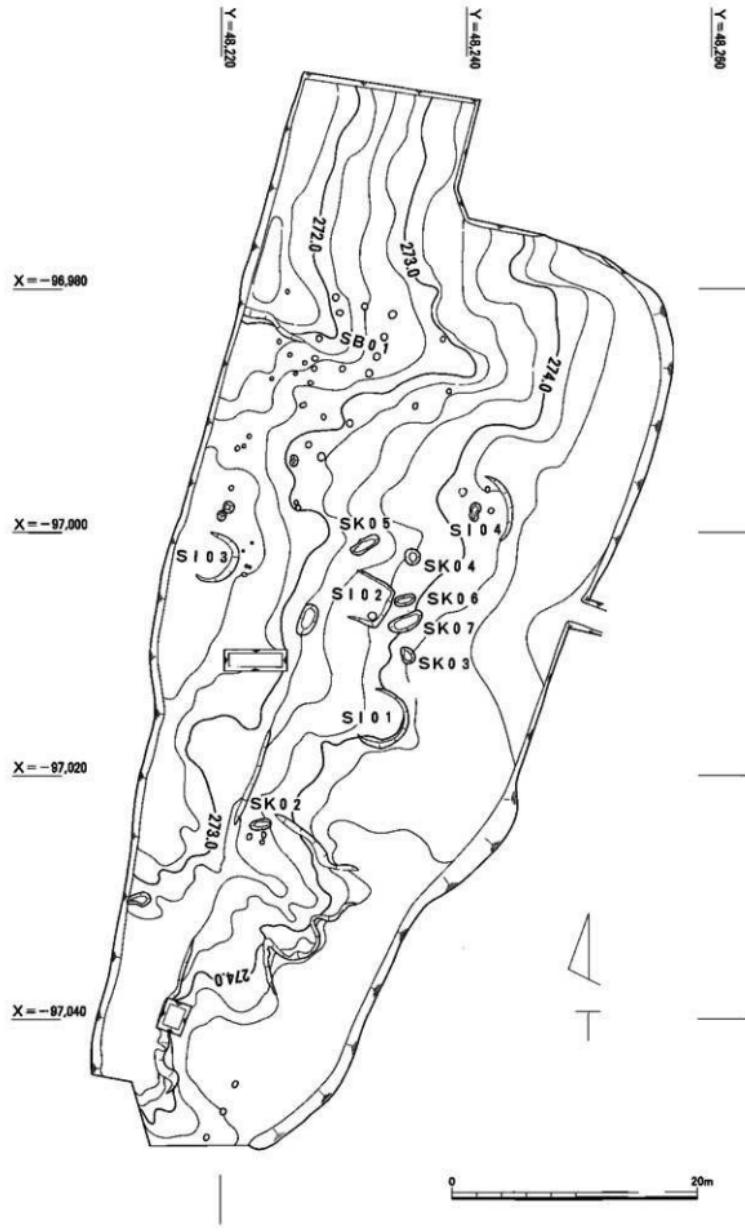
S 101 (第35・36図、第16・17表)

(立地) 2区の中央よりやや南側、標高274m地点で検出した。この付近は比較的平坦な面となっていた。

(規模・概要) (第35図) 調査段階ですでに西側が流出しており残存状況は良いないが、平面が円形で、径は4m前後のものと推測される。壁高は現状で20cm程度を測るが、上面はかなり削平されている



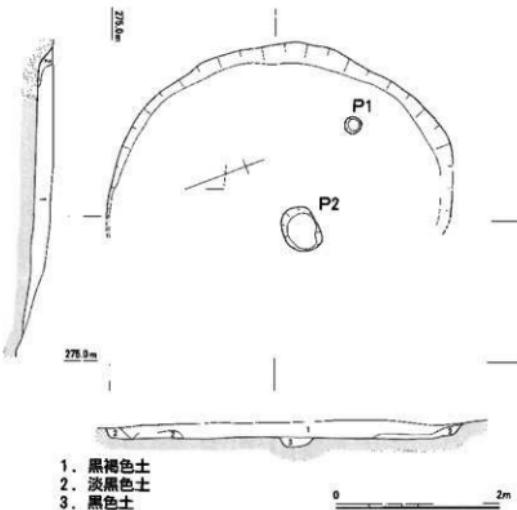
第35図 2区土層図 (S=1/80)



第34図 2区造構配置図・地形測量図 (S = 1/400)

ものと考えられる。床面ではピットを2基確認した。そのうちの1基は幅55cmを測る比較的大きなピットで、いわゆる中央ピットであろう。残りの1基は径が約20cmを測るもので柱穴と考えられる。しかしこの他に柱穴に相当するようなピットは確認されなかった。したがってこの建物の柱数は不明である。

(出土遺物) (第36図、第17・18表) 遺物は床面付近で全面的に出土して



第35図 2区SI 01実測図 (S=1/80)

いる。上器はほとんどが小片で、圓化が可能であったのは第36図に掲載したもののみである。また主に建物内南側を中心として、剥片と考えられる石が散乱していた。剥片と考えられる石は、大きさが2~3cm程度の厚みがほとんどないもので、一部には二次的な加工が認められるものもある。石鐵の素材またはそれを作成する際に生じた剥片である可能性が考えられる。

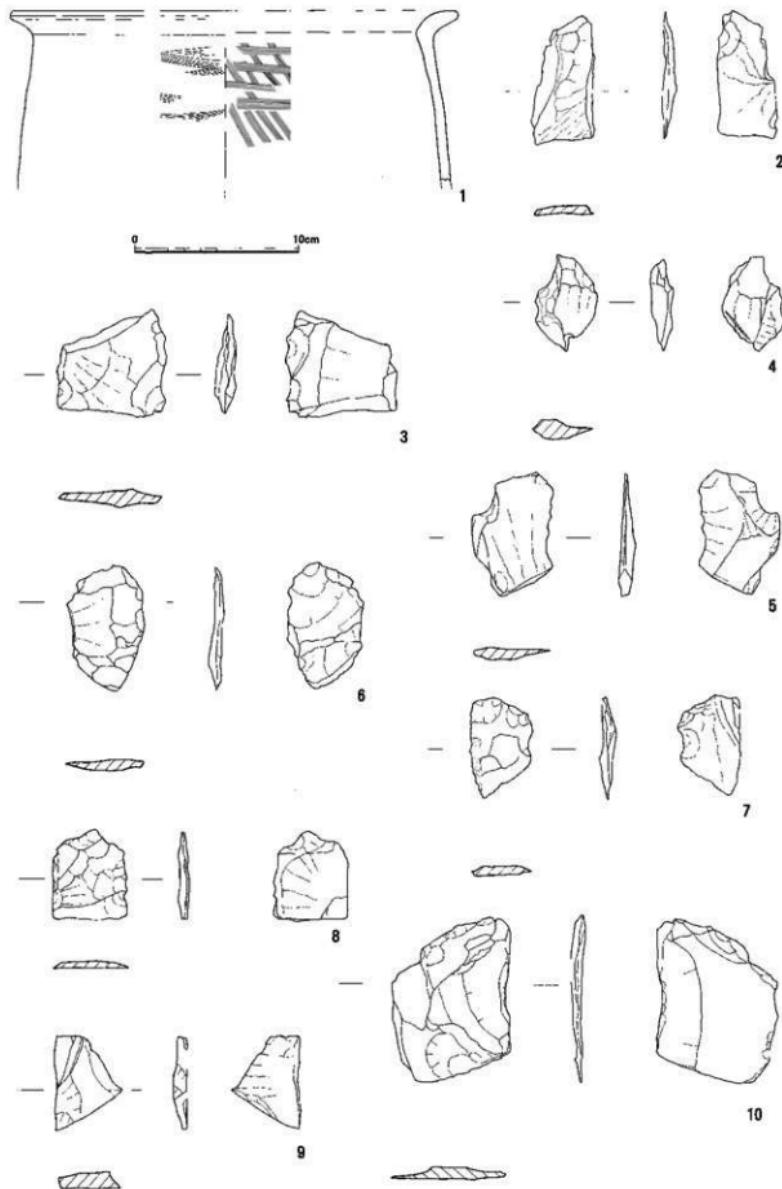
(時期) 時期の推測できる遺物が少ないが、1や造構の平面形態および周辺で検出した造構・遺物等から、弥生時代中期後半のものである可能性が高いと思われる。

第17表 2区SI 01出土遺物観察表 (1)

標図 番号	写真 版画	出土地点	種 別	法長(cm)	調 整	特 徴	破 上	施成	色調	備 考
36-1	16	SI 01 (床面)	剥片	外面:ナデ・ハケメ 内面:ナデ・ハケメ	口縁部が外方に屈折	1mm程度の砂粒を含む	度	赤褐色	部に斷面?	が見られる

第18表 2区SI 01出土遺物観察表 (2)

標図 番号	写真 版画	出土地点	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	備 考		
36-2		SI 01 (床面)	剥片	2.5	1.2	2.3	0.77			
36-3		SI 01 (床面)	剥片	2.2	2.2	3.2	1.85			
36-4		SI 01 (床面)	剥片	1.9	1.3	4.7	1.04			
36-5		SI 01 (床面)	剥片	2.5	1.7	2.6	0.95			
36-6		SI 01 (床面)	剥片	2.6	1.5	2.3	1.06			
36-7		SI 01 (床面)	剥片	2.0	1.8	1.8	0.60			
36-8		SI 01 (床面)	剥片	3.0	2.6	1.9	0.66			
36-9		SI 01 (床面)	剥片	2.0	1.4	3.6	1.04			
36-10		SI 01 (床面)	剥片	1.8	1.6	2.5	2.78			



第36図 2区S101出土遺物実測図 (1はS=1/3、2~10はS=1/1)

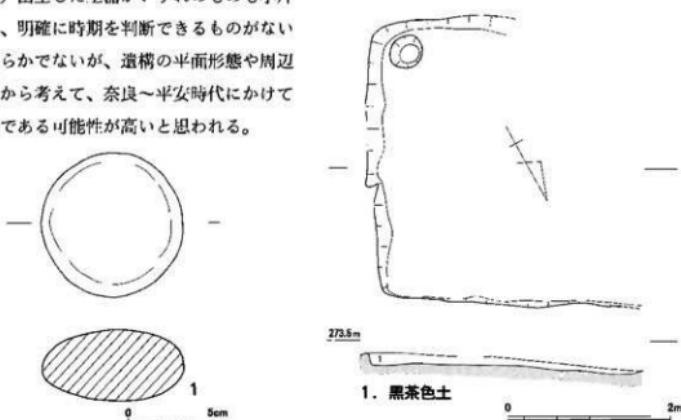
S I O 2 (第37・38図、第19表)

(立地) 2区のはば中央付近、標高273.5m地点の比較的平坦なところで検出した。

(規模・概要) (第38図) 調査段階すでに斜面下方にあたる南北側部分が流出しているが、残存部分から判断して平面形が方形または長方形を呈し、規模が南北方向で3.3m、東西方向で3.0m以上を測るものである。壁面は、上部がかなり削平されているものと考えられ全体的に残りが悪く、約10cm程度しか残っていないかった。床面ではピットを1基確認した。ピットは遺構の南側隅に位置しており、径約40cm、深さ約10cmを測る。この建物に伴う柱穴と考えられるが、北側隅部分では確認できなかった。

(遺物出土状況) 遺物は床面付近で全体的に出土しているが、ほとんどは小片である。なお覆土中より磨石が出上しているが、周辺からの流入によるもので本遺構に直接伴うものではないと考えられる。

(時期) 出土した土器がいずれのものも小片であり、明確に時期を判断できるものがないため明らかでないが、遺構の平面形態や周辺遺構等から考えて、奈良～平安時代にかけてのものである可能性が高いと思われる。



第37図 2区S I O 2出土遺物実測図 (S=1/3)

第38図 2区S I O 2実測図 (S=1/60)

第19表 2区S I O 2出土遺物観察表

探査番号	写真 面版	山十地点	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
37-1	S I O 2 (裏+中)	磨石		8.7	8.9	4.4	

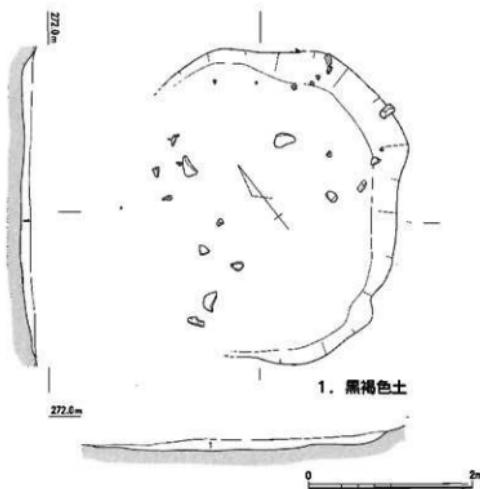
S I O 3 (第39図)

(立地) 標高272mのところで検出した。

(規模・概要) 建物跡かどうかあまりはっきりしない遺構である。平面形は、円形とも方形とも区別がつかない不整形な形状で、規模は南北方向で測って3.5m前後を測る。壁は斜めに掘り込まれており、また、床面と壁面との境は明確でない。床面もあまり平らでなく所々に躊躇が認められた。ピット等は確認されなかった。

(遺物出土状況) 土器の小片が数点出土したが、いずれのものも覆土中からの出土である。

(時期) 時期の判断できるものもなく、明らかではない。



第39図 2区S103実測図 ($S = 1/60$)

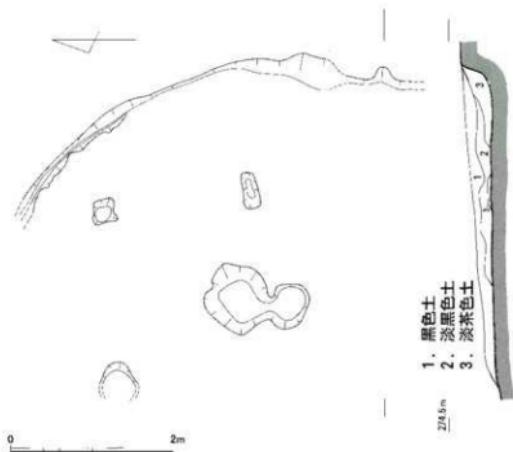
S104 (第40~42図、第20・21表)

(立地) 調査区中央よりやや北側、標高274m地点の平坦なところで検出した。

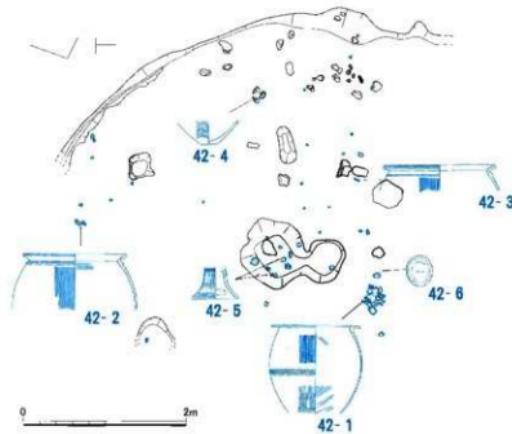
(規模・概要) (第40図) 調査段階で既に全体の4分の3以上が流出しており、残存状況の悪い遺構である。平面形・規模とも正確なことは不明であるが、残存する北西側部分から推測して、平面形が円形で規模が6.0m前後を測る建物跡と考えられる。壁はほかの遺構と同様に10~20cm程度しか残っていないなかったが、これも同じく遺構上面が削平を受けた結果と思われる。また壁際には幅10cm程度の深い壁体溝が認められたが、確認されたのは建物北側の一部で、どの程度巡らされていたかは不明である。床面ではピットを4基検出した。このうちP1は2基のピットが連接したような形状をした、長さ1.2mを測る大型のもので、中央ピットに相当するものと考えられる。ほかの3基は、いずれのものも径40~60cmを測るもので柱穴に相当するピットであろう。位置関係から6本の柱が想定されるが明らかではない。いずれにしても少なくとも4本以上の柱を持った建物であったものと想定される。

(出土遺物) (第42図、第20・21表) 遺物はほぼ床面で出土しているが、中央ピット付近で同一固体の土器の破片がまとまって出土しているほかは小片がほとんどである。また、中央ピットからは高壇の脚部が出土した。出土遺物については第42図に掲載した。1~3は壇である。基本的に器壇は薄く、外面・内面ともヘラミガキやハケメ調整がなされる。1は口縁部が強く屈曲し、また凹線文状の窪みを有している。2・3はどちらも頭部よりわずかに下の部分に刻みのある貼り付け突部を有し、口縁部には凹線文が施される。4は壇または壇の底部、5は高壇の脚部、6は磨石である。5は円形透かしや直線文を有し、内面はヘラ削り調整がなされている。

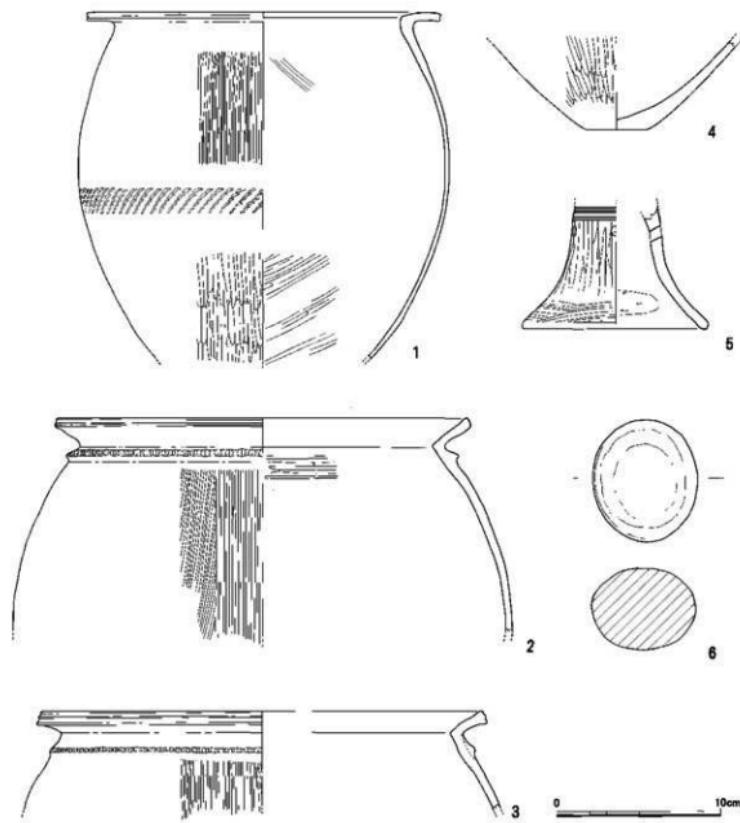
(時期) 出土した遺物の様相から、弥生時代中期後半と判断される。



第40図 2区SI04実測図(1) ($S = 1/60$)



第41図 2区SI04実測図(2) 遺物出土状況 ($S = 1/60$)
(図中遺物は縮尺任意)



第42図 2区S104出土遺物実測図 (S=1/3)

第20表 2区S104出土遺物観察表 (1)

口徑()の数値は復元径

部品 番号	弓高 寸法	山土地点	種別	法量(cm)	調 整	特 徴	胎 土	焼成	色調	備 考
42-1 16	S104 (底面)	発 (発生土層)	口径:(21.6)	外面:ヨコナデ、ハケメ、ヘラミガキ 内面:ヨコナデ、ハケメ、ヘラミガキ	口縁部に凹線文様の 産み、側部に列点文	1mm以下の砂 粒を含む	良	黄褐色 ～黒褐色	残存率70%	
42-2 16	S104 (底面)	発 (発生土層)	口径:(26.0)	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ヘラミガキ	口縁部が凹線文状に 僅かに仄れ 脇部屈曲部よりやや 下にオサツのある突部	1mm以下の砂 粒を含む	良	黄褐色 ～黒褐色	残存率20%	
42-3 16	S104 (底面)	発 (発生土層)	口径:(27.0)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ	口縁部に凹線文(2条) 脇部屈曲部よりやや 下にオサツのある突部	1mm以下の砂 粒を含む	良	黄褐色	残存率10%	
42-4	S104 (底面)	発 (発生土層)	底径:(3.8)	外面:ヘラミガキ、ナデ 内面:ナデ、一部にハケメ		1mm以下の砂 粒を含む	良	灰黄褐色	残存率10%	
42-5 16	S104 (底面)	発 (発生土層)	底径: 11.0	外面:ヘラミガキ 内面:ヨコナデ、一部にヘラケズリ	平行線文、円形透 かし	1mm以下の砂 粒を含む	良	灰黄褐色	残存率20%	

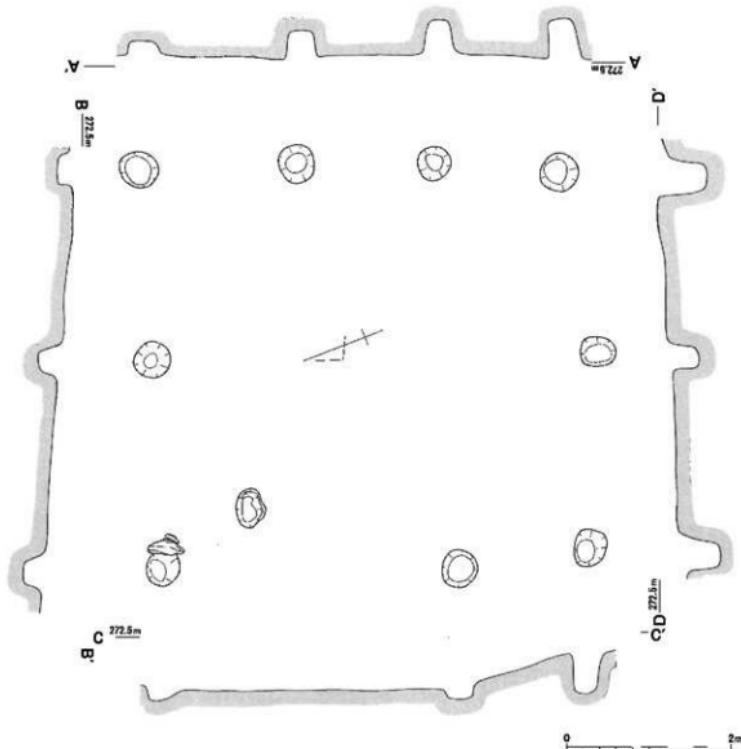
第21表 2区S I 0 4出土遺物観察表 (2)

地図番号	写真番號	出土地点	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
42-6	S I 0 4 (4340)	石	塔	7.5	6.4	5.0	

SB 01 (第43~46図、第22・23表)

(立地) 調査区北側、標高272.5m地点で検出した。南北方向から若干方位をずらして建てられている。

(規模・概要) (第43図) 柱穴と想定されるピットは全部で9基確認され、西側の柱穴が1基認められないものの、2間×3間の建物跡と考えられる。各柱間は南北方向が1.6m~1.8m、東西方向が2.4m前後を測り、全体として5.2m×5.0mの規模である。ピットはいずれも径が40cm前後、深さは調査段階で20cm~50cmであった。全体的に斜面下方側のものが浅いことから、こちら側のものは上面が失われている可能性が高いといえる。したがって、基本的にはいずれのものも50cm以上の深さがあったものと想定される。

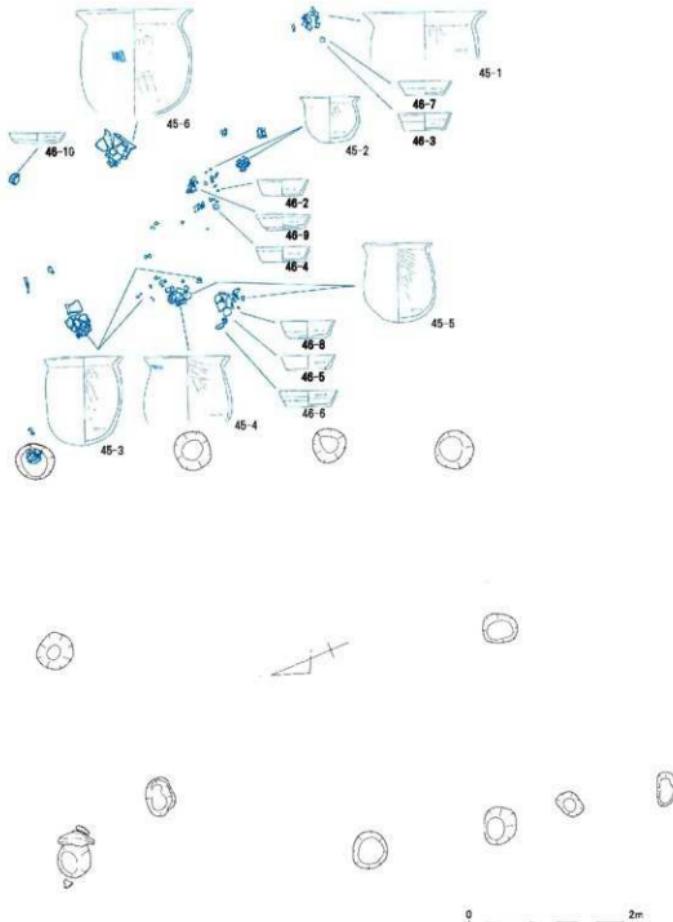


第43図 2区SB 0 1実測図(1) (S = 1/60)

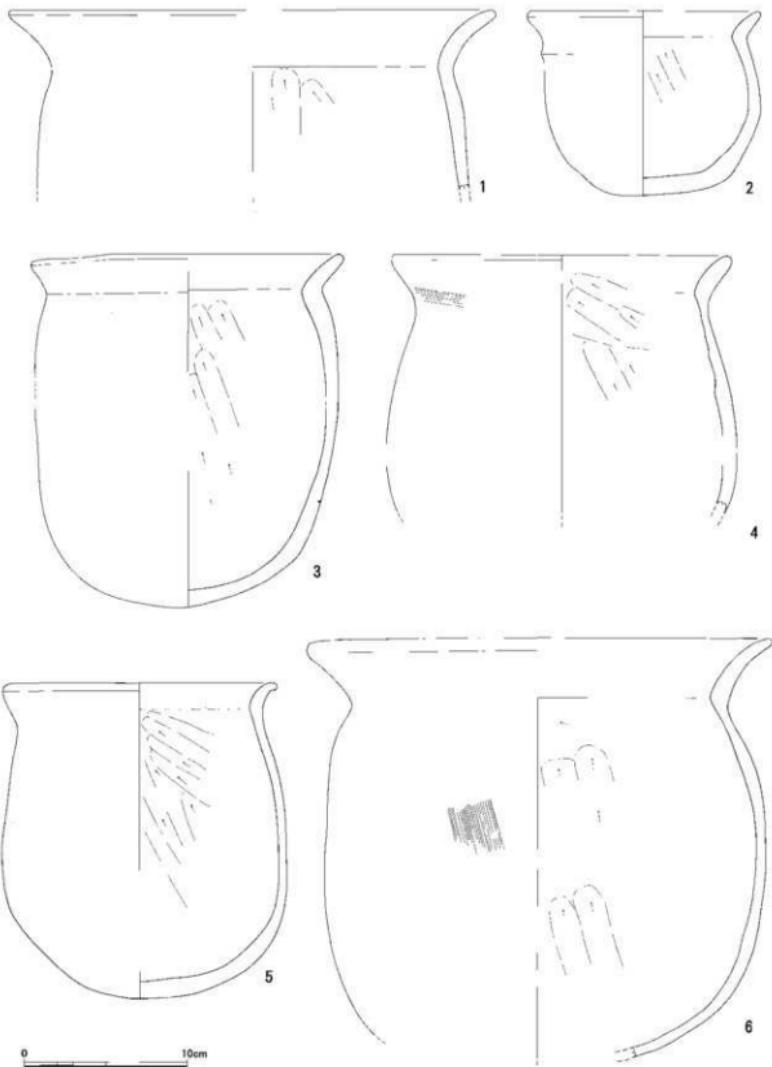
(遺物出土状況) (第44図) 建物跡の東側でまとまって出土している。破片での出土であるが、各個体ごとにまとまりを見せており、ほぼ完形に復元できるものも認められる。

(出土遺物) (第45・46図、第22・23表) 出土した遺物は須恵器蓋、須恵器环、土師器甕などの土器類のほか、鉄製の鎌なども出土した。土師器甕は大型のものから小型のものまであり、器形も胴のやや張るものや寸胴型のものなどがみられる。須恵器环は体部が直線的に伸びるものがほとんどである。高台の付くものや、底部に回転糸切り痕を残すものもみられる。また須恵器蓋は輪状つまりを有し、端部が下方に折れ曲がるタイプのものである。

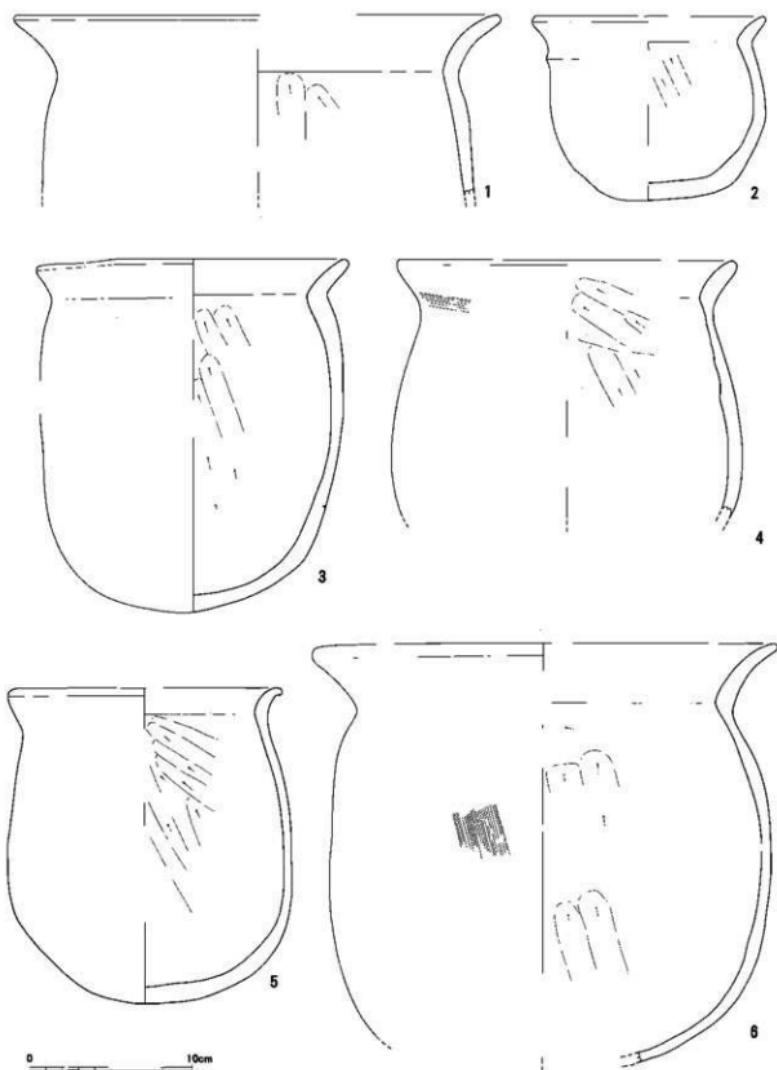
(時期) 山上遺物から奈良時代頃の建物跡と考えられる。



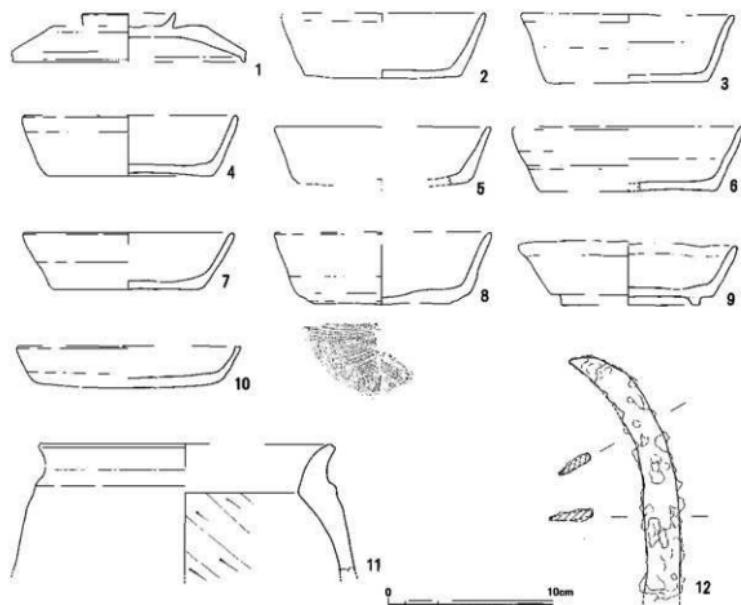
第44図 2区SB01実測図(2) 遺物出土状況 (S = 1/60) (図中遺物は縮尺任意)



第45図 2区S B 0 1出土遺物実測図(1) (S = 1/3)



第45図 2区S-B-01出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第46図 2区SB 01出土遺物実測図(2) (S = 1 / 3)

第22表 2区SB 01出土遺物観察表 (1)

(口添()の数値は復元率)

番号 表記	写真 図版	出土地點	種別	法量(cm)	調 整	特 徴	胎 土	焼成	色調	備 考
45-1	S B 0 1	甕 (上部器)	口径:(30.0)		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ヘラケズ	1~2mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色~黒褐色	残存率30%	
45-2	17	S B 0 1 (十師器)	甕	口径: 14.0 高さ: 11.4	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズリ	小型の縫 1~3mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色~黒褐色	残存率90%	
45-3	17	S B 0 1 (十師器)	甕	口径: 19.0 高さ: 22.8	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズ	内部はあまり 張らない	1~3mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色~黒褐色	断面が若干壊化 出光完形
45-4	S B 0 1 (須恵器)	甕	口径:(20.0)		外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ヨコナデ、強ヘラケズリ	内部はあまり 張らない	1~2mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色~黒褐色	残存率20%
45-5	17	S B 0 1 (上部器)	甕	口径: 17.0 高さ: 19.5	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズ	内部はあまり 張らない	1~3mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色~黒褐色	残存率70%
45-6	17	S B 0 1 (十師器)	甕	口径: 26.6 高さ: (27.0)	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ヨコナデ、ヘラケズ	内部はあまり 張らない	1~3mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色~黒褐色	残存率50%
46-1	17	S B 0 1 (須恵器)	环 (須恵器)	口径:(14.0) 基高: 3.0	外面: 同軸ナデ 内面: 同軸ナデ	輪状つまりを 有する	1~3mm程度の砂粒を含む	良	青灰色~灰白色	残存率50%
46-2	17	S B 0 1 (須恵器)	环	口径: 12.4 基高: 4.0	外面: 回転ナデ、ヘラ切り	体部は直線的 に立ちあがる	1~2mm程度の砂粒を含む	良	青灰色~灰白色	ほぼ完形
46-3	17	S B 0 1 (須恵器)	环	口径: 13.0 基高: 4.2	外面: 回転ナデ、ヘラ切り	体部は直線的 に立ちあがる	1mm程度の砂粒を含む	良	青灰色~灰白色	ほぼ完形
46-4	S B 0 1 (須恵器)	环	口径: 13.0 基高: 3.7	外面: 回転ナデ、ヘラ切り			1mm程度の砂粒を含む	良	青灰色~灰白色	壊化のため調 査不能 残存率40%
46-5	S B 0 1 (須恵器)	环	口径: 13.0	外面: 回転ナデ、ヘラ切り?			1~4mm程度の砂 粒をわずかに含む	良	青灰色~灰白色	残存率30%
46-6	S B 0 1 (須恵器)	环	口径:(14.0) 基高: 4.0	外面: 回転ナデ、ヘラ切り			1mm程度の砂粒を含む	良	青灰色~灰白色	残存率30%

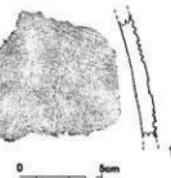
46-7	S B 0 1	环 (須恵器)	L径:(12.8) 器高: 3.5	外面: 回転ナデ?、ヘラ切り? 内面: 回転ナデ?	1~2mm程度の砂粒を含む	良	青灰色～ 灰白色	風化のため 擦痕・剥離 残存率40%
46-8	17	S B 0 1	环 (須恵器)	口径: 12.2 器高: 4.5	外面: 回転ナデ、静止系切り 内面: 回転ナデ	1~3mm程度の砂粒を含む	良	青灰色～ 灰白色 残存率40%
46-9	17	S B 0 1	高台付环 (須恵器)	口径: 13.4 器高: 3.9	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ、ナデ	1~2mm程度の砂粒を含む	良	青灰色～ 灰白色 はぼ完形
46-10	17	S B 0 1	环 (須恵器)	L径: 13.7 器高: 2.6	外面: 回転ナデ、ヘラ切り 内面: 回転ナデ	1~2mm程度の砂粒を含む	良	青灰色～ 灰白色 はぼ完形
46-11		S B 0 1	甕 (土師器)	口径: 17.6	外面: ナデ、 内面: ヨコナデ、ケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良	灰色～ 黒色 器壁が深い 残存率20%

第23表 2区SB01出土遺物観察表(2)

発掘 番号	写真 図版	出土地点	種別	長さ	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
46-12	18	S B 0 1	甕	14.9	2.3	0.4	

SK01～SK07(第47図～第49図、第24・25表)

2区中央付近から南側にかけて十坑が7基点在していた。それぞれの土坑の詳細については第25表に記載した。平面形はSK02が精円形、SK04が円形を呈するほかは不整形な形となっている。またいずれの土坑も深さはそれほどなく浅いものである。SK02・SK03から弥生土器が出土している以外は、各土坑とも出土遺物が小片またはほとんどないため時期は明らかでなく、その性格についても不明である。



第47図 2区SK02出土遺物実測図(S=1/3)

第48図 2区SK03出土遺物実測図(S=1/3)

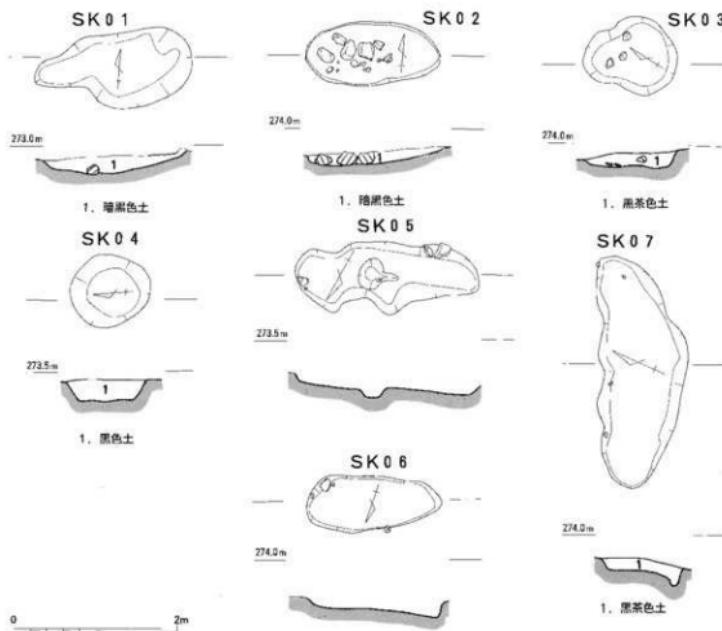
第24表 2区SK02・SK03出土遺物観察表

□()の数値は復元値

発掘 番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	調 整	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
47-1	18	SK02 (弥生土器)		外面: ナデ、ハケメ 内面: ナデ、ハケメ	横掲流水文、 キズミ	1mm以上の砂粒を含む	良	黄褐色～ 赤褐色		
48-1	18	SK03 (弥生土器)		外面: ハケメ 内面: ヘラケズリ		1mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色		

第25表 2区SK01～07計測表

遺構名	平面形	規模(長軸×短軸×深さ)	出土遺物	備 考
SK01	不整形	1.9 × 0.9 × 0.2		
SK02	精円形	1.9 × 0.8 × 0.2	弥生土器	
SK03	円形	1.2 × 1.0 × 0.2	弥生土器	
SK04	円形	1.0 × 0.9 × 0.3		
SK05	方形	2.2 × 0.9 × 0.2		
SK06	方形	1.7 × 0.7 × 0.2		
SK07	方形	2.8 × 1.1 × 0.3		



第49図 2区SK 01～SK 07実測図 (S = 1/60)



2区 SB 01出土遺物写真

遺構に伴わない遺物

2区においても1区同様包含層中から多くの遺物が出土している。縄文土器・弥生土器・土師器などが確認されるが、正倒的に多いのは弥生土器である。

第50図には縄文土器を掲載した。1、2はキザミのある突帯を有する土器、3～6は粗製の深鉢と考えられる。いずれも小片で全体のわかるものはない。2区においても縄文土器の出土は少なく、掲載したもののはかはわずかである。時期は後期～晩期にかけてと考えられる。

第51図～第56図は弥生土器を掲載した。

第51図は内面・外面とも無文の上器である。1区において出土したものと同様、口縁部の屈曲の弱いものと比較的強いものとが見られる。

第52図、第53図には主に壺・壺を掲載した。第52図1～6は口縁部が外方に屈曲し胴部が張り出す形の壺である。1、2は口縁端部に凹線文状の窪みを有し、胴部には列点文が施されている。4、5は頸部よりやや下にキザミのある突帯を有する。7～9は口縁部が拡張され、そこに凹線文が施される壺である。いずれも内面にヘラケズリは認められない。7は口縁部が上方に拡張され、胴部には列点文が認められる。10～13は凹線文と刺突文とが組み合わされた文様をもつもので、いわゆる「塙町式」上器と類似するものである。第53図2～12は口縁部が拡張し、内面頸部以下にヘラケズリが施されているものである。これらの土器の年代としては第52図1～5が中期中葉頃、6～13が中期後葉頃、第53図は後期前葉と考えられる。

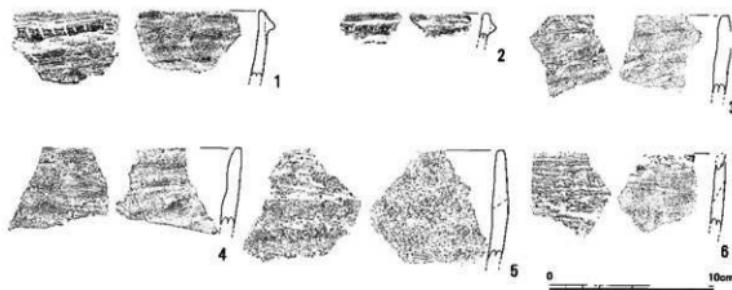
第54図は主に高壺と壺・甕の底部を掲載した。1は口縁部が水平な面となり、そこに斜格子文が描かれるもので、その端部にはキザミが施されている。2～4は壺部が屈曲し直立気味に立ち上がる形のもので、外面には凹線文が施されている。5～11は高壺の脚部である。6は欠損しているものの三角形と考えられる透かしが施され、外面は凹線文が描かれる。また7は円形の透かしや直線文が施されている。8～11は脚端部が拡張されそこに凹線文が施されるもので、内面にはヘラケズリの認められるものもある。20は鉢と考えられ、口縁部から胴部にかけて凹線文や直線文、キザミなどが施されている。これらの年代は1が中期中葉頃、ほかは中期後葉と考えられる。

第55図、第56図は主に壺を掲載した。第55図1～3は口縁部が大きく開く形の壺と考えられるものである。端部は下方にわずかに拡張し、2は内面に斜格子文、3は外面に斜行線が描かれる。4～7は口縁部がさらに拡張され、そこに凹線文が施されるものである。このうち6、7は内面にも凹線文が施され、さらに、櫛状工具によると考えられる波状文や半円状の文様が認められる。これらは後述する流水文の描かれた土器の口縁部になるものと考えられる。8、9は壺の頸部から胴部にかけての部分で装飾性が強く、凹線文、直線文、列点文、斜行線など多様な文様が描かれている。第56図には流水文の描かれた土器片を掲載している。いずれも櫛状工具によって描かれたと思われる、線の迷いや土器の焼成具合、色調などから2種類の固体が想定される。これらの年代については第55図1～3が中期中葉、そのほかは中期後葉と考えられる。

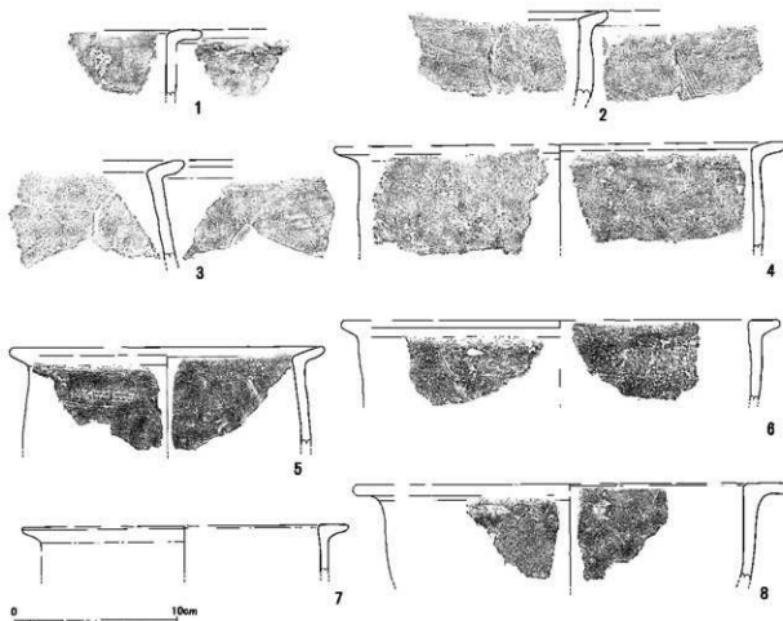
第57図は土師器である。壺の口縁部と考えられるものである。土師器の出土量は多くない。時期については断定できないものの、SB01に近い時期が考えられる。

第58図は主に陶磁器、石器を掲載した。陶磁器類には推定産地が肥前と考えられるもの以外に、中国と考えられるものも散見される。1は高台の付く壺である。中世土器と考えられるものはほかにわずかしか確認していない。2は白磁の皿である。口縁端部が反るもので、中国産と考えられる。

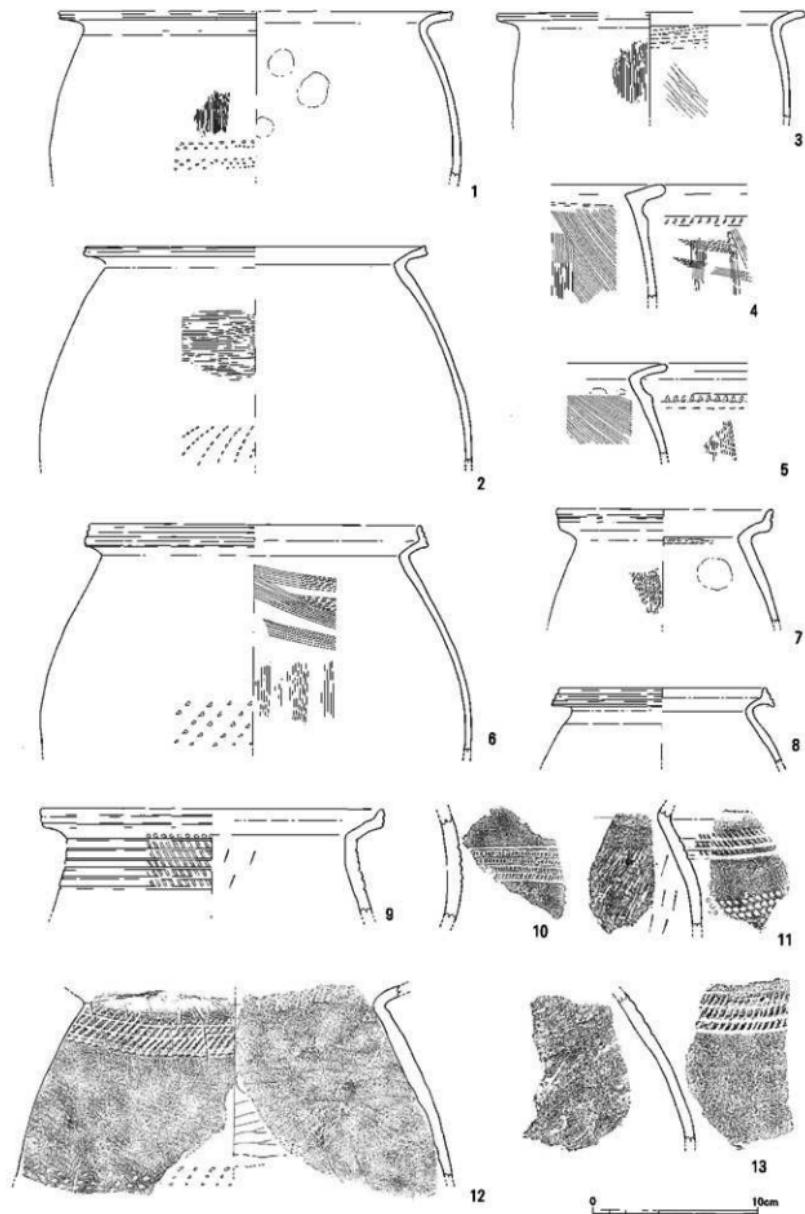
3は陶器碗である。三口月高台で、高台以外は施釉されている。4は磁器碗と考えられる。外面には回線が描かれ、見込みにも施釉される。5は磁器皿である。高台内面は施釉されず、また見込みは釉剥ぎされる。6、7は陶器碗である。内外面とも一部を除き施釉される。これらの年代は1が12世紀後半、2～5が16～17世紀頃、6、7が18世紀頃と考えられる。



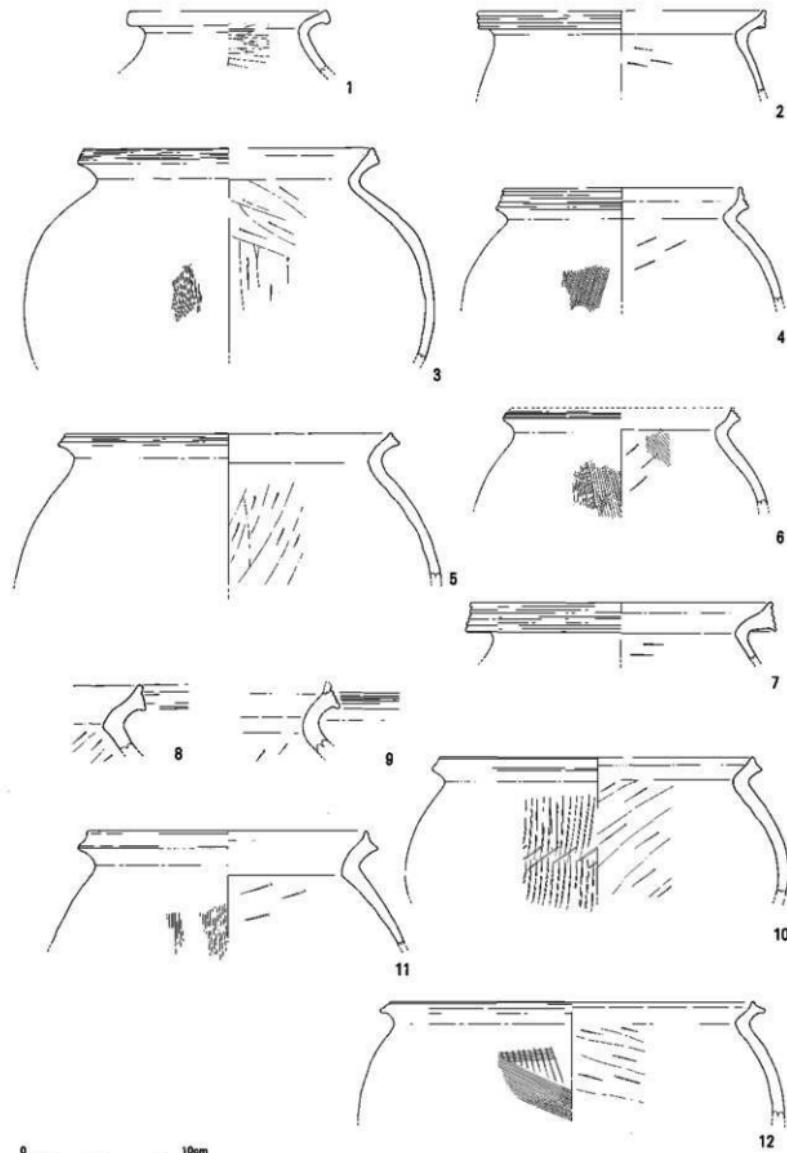
第50図 2区遺構に伴わない出土遺物実測図(1) 純文土器 (S = 1 / 3)



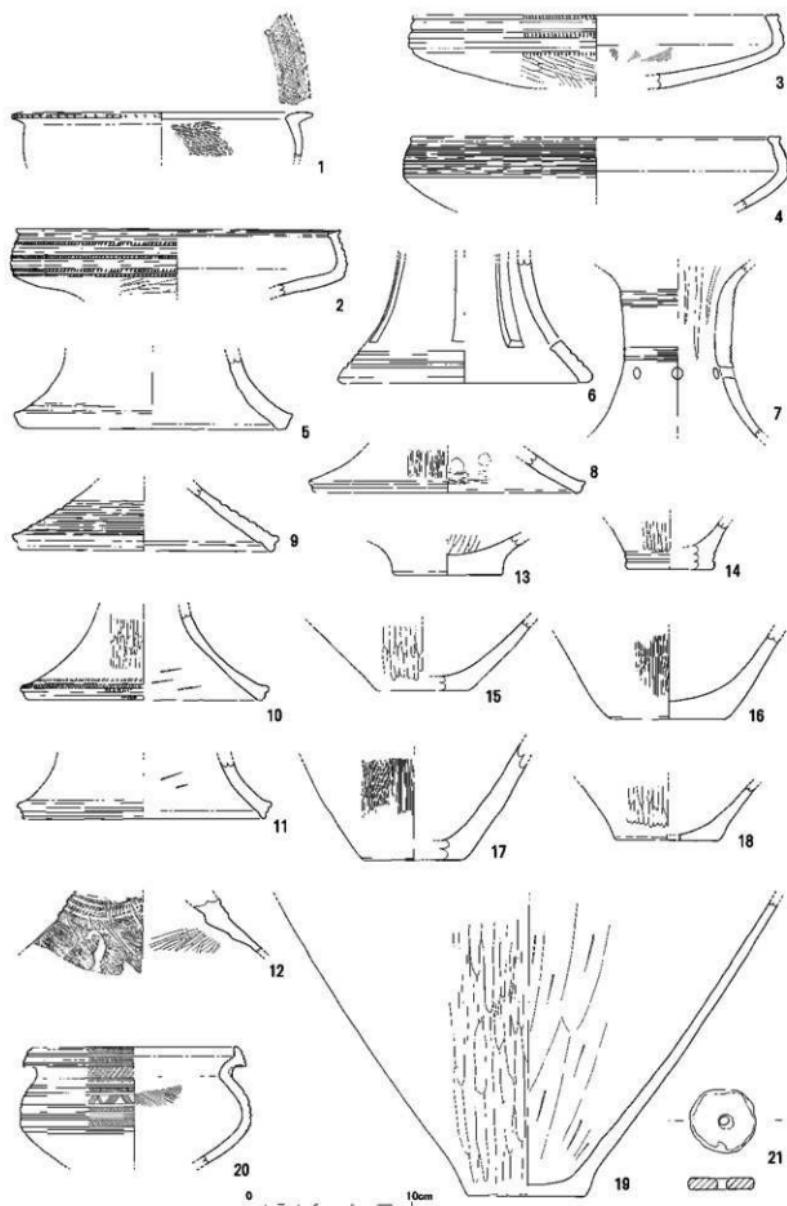
第51図 2区遺構に伴わない出土遺物実測図(2) 亦生土器 (S = 1 / 3)



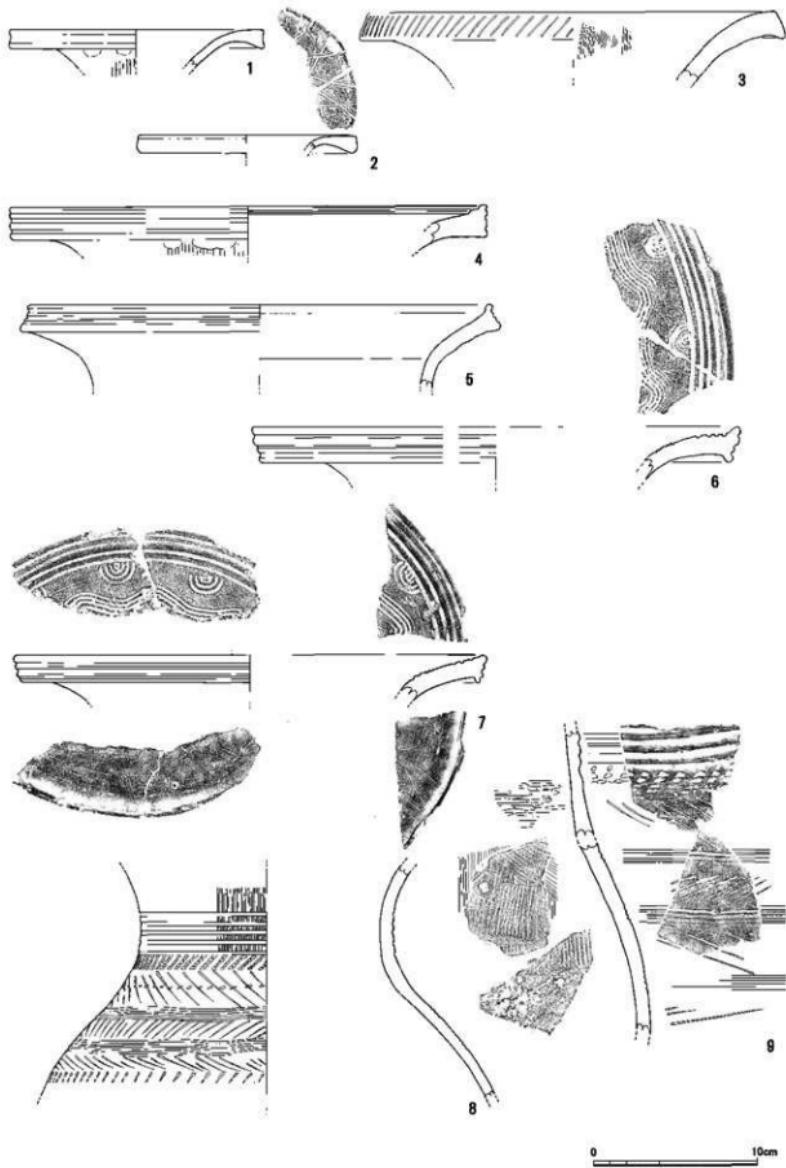
第52図 2区遺構に伴わない出土遺物実測図(3) 赤生土器 (S = 1 / 3)



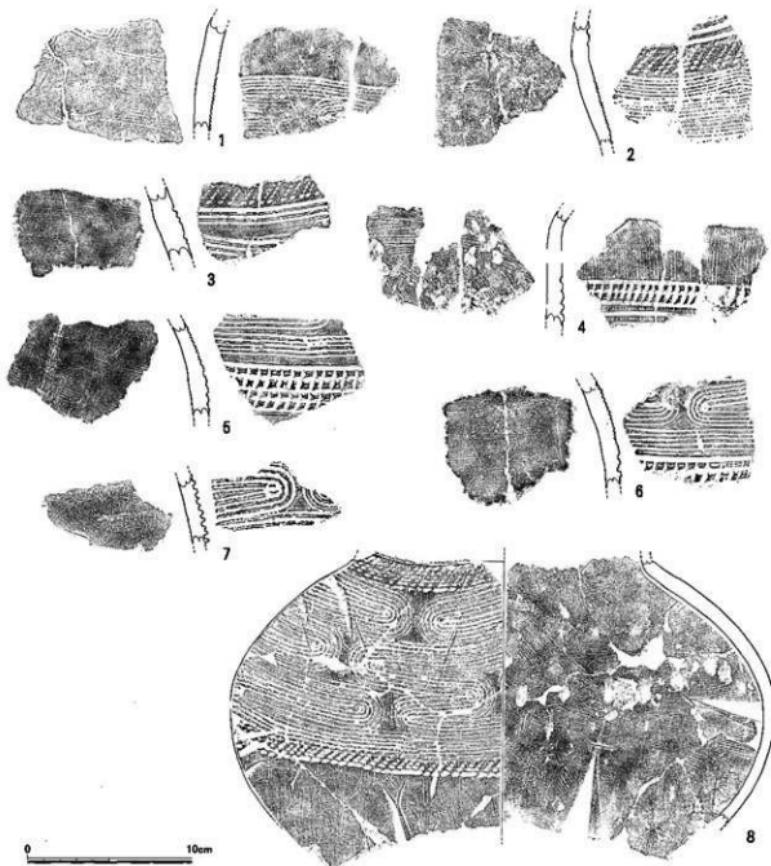
第53図 2区遺構に伴わない出土遺物実測図(4)弥生土器 (S = 1 / 3)



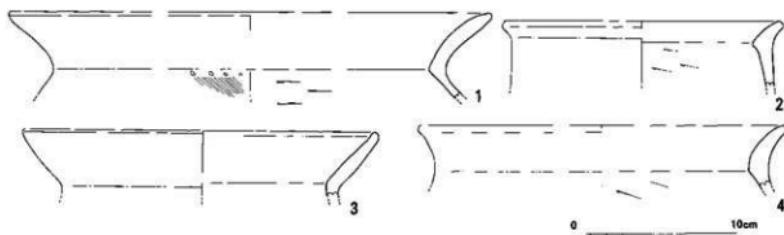
第54図 2区遺構に伴わない出土遺物実測図(5) 甌生土器 (S = 1 / 3)



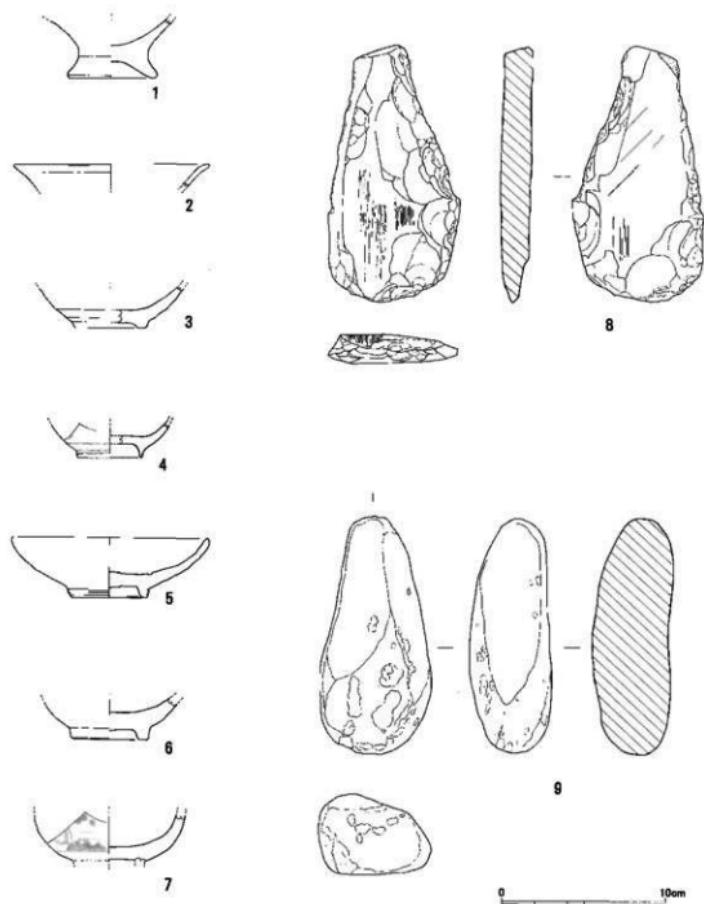
第55図 2区遺構に伴わない出土遺物実測図(6) 亦生土器 (S = 1 / 3)



第56図 2区遺構に伴わない出土遺物実測図(7) 亦生土器 (S = 1 / 3)



第57図 2区遺構に伴わない出土遺物実測図(8) 土師器 (S = 1 / 3)



第58図 2区遺構に伴わない出土遺物実測図(9) その他 (S = 1 / 3)

第26表 2区遺構に伴わない出土遺物観察表(1) (第50図)

口括()の数値は復元径

得回 番号	平真 面版	出土地点	種別	法量(cm)	調査	特徴	胎土	焼成	色調	備考
50-1	18	2区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	キザミのある突部	1~2mm程度の 砂粒を含む(石灰)	良	黄褐色	口縁部の一部のみ残存
50-2	18	2区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	キザミのある突部	2mm大の砂粒を 含む	良	黄褐色	口縁部の一部のみ残存
50-3	18	2区 (包含層)	深鉢 (縄文土器)		外面:ナデ、柔軟? 内面:ナデ		1~2mm程度の 砂粒をわずかに 含む	良	褐色	口縁部の一部のみ残存

50-4	18	2区 (包含層)	深鉢 (陶文土器)		外面:柔軟、ナデ 内面:柔軟、ナデ	口縁端部に面を有する	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	外面:黒褐色 内面:褐色	口縁部の一部のみ残存
50-5	18	2区 (包含層)	深鉢 (陶文土器)		外面:柔軟 内面:ナデ		1mm程度の砂粒を含む	良	外面:黒褐色 内面:褐色	口縁部の一部のみ残存
50-6	18	2区 (包含層)	深鉢 (陶文土器)		外面:柔軟? 内面:柔軟?		1~2mm程度の白色砂粒を含む	良	外面:黒褐色 内面:褐色	口縁部の一部のみ残存

第27表 2区造構に伴わない出土遺物観察表(2) (第51図)

口径()の数値は復元径

埠固 番号	写真 図版	出土地点	種 別	法量(cm)	調 整	特 徴	給 土	焼成	色 調	備考
51-1	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ、ミガキ	口縁部が外方に屈折	1mm程度の砂粒を含む	良	褐色	口縁部の一部のみ残存
51-2	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)			外面:ナデ、一部ハケメ 内面:ナデ	口縁部が外方に屈折	1mm程度の砂粒を含む	良	褐色	残存率10%
51-3	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	口縁部が外方に屈折	1~2mm程度の砂粒を含む(石英)	良	褐色	残存率10%
51-4	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)	口径:(27.6)	外面:ナデ 内面:ナデ	口縁部が外方に屈折	1~3mm程度の砂粒を含む(石英)	良	褐色	残存率10%
51-5	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)	口径:(19.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	口縁部が外方に屈折	1~4mm程度の砂粒を含む	良	褐色	残存率10%
51-6	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)		口径:(26.4)	外面:ナデ? 内面:ナデ?	口縁部が外方に屈折	1~2mm程度の砂粒を含む(石英)	良	褐色	表面風化のため測量小困難。残存率10%
51-7	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)	口径:(19.8)	外面:ナデ 内面:ナデ	口縁部が外方に屈折	1mm程度の砂粒を含む	良	褐色	残存率10%
51-8	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	口縁部が外方に屈折	1~3mm程度の砂粒を含む	良	褐色	残存率10%

第28表 2区造構に伴わない出土遺物観察表(3) (第52図)

口径()の数値は復元径

埠固 番号	写真 図版	出土地点	種 別	法量(cm)	調 整	特 徴	給 上	焼成	色 調	備考
52-1	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)	口径:(24.0)	外面:ヨコナフ、ナラ 内面:ヨコナフ、ナラ	回線文?(1条)、 列点文	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	黄褐色	残存率10%
52-2	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)	口径:(20.6)	外面:ヨコナフ、ナラ 内面:ヨコナフ、ナラ?	回線文?(1条)、 列点文	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	淡黄色	残存率20%
52-3	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)	口径:(18.6)	外面:ヨコナフ、ナラ 内面:ヨコナフ、ナラ?		1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	淡黄色	残存率10%
52-4	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)		外面:ヨコナフ、ナラ 内面:ヨコナフ、ナラ	キザミのある突審	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色	残存率10%
52-5	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)		外面:ヨコナフ、ナラ 内面:ヨコナフ、ナラ	キザミのある突審	1~2mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	残存率30%
52-6	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)	口径:(20.0)	外面:ヨコナフ、ナラ 内面:ヨコナフ、ナラ	回線文(2条)、 列点文	1mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	残存率10%
52-7	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)	口径:(13.0)	外面:ヨコナフ、ナラ 内面:ヨコナフ	回線文?(2条)	1mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	残存率10%
52-8	19	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)	口径:(12.4)	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ、ナラ?	回線文(3条)?	1mm程度の砂粒を含む	良	明褐色	残存率10%
52-9	20	2区 (包含層)	直 (陶生土器)	口径:(20.9)	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ、ナラ?	回線文、刺突文 列点文	1mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	残存率10%
52-10	20	2区 (包含層)	?		外面:ナラ 内面:ナラ?	回線文(キザミ)	2~4mm程度の砂粒を多く含む	良	黄褐色	一部のみ残存
52-11	20	2区 (包含層)	深鉢 (陶生土器)		外面:ヨコナフ、ナラ 内面:ナラ、ナラ?	回線文、刺突文、 列点文	1mm程度の砂粒を含む	良	黄褐色	一部のみ残存

52-12	20	2区 (包含層)	甕 (弥生土器)		外面:ヨコナデ 内面:ナ	回線文、刺突文、 列点文	1mm程度の砂粒 を含む	良	黒褐色～ 黄褐色	残存率40%
52-13	20	2区 (包含層)	甕 (弥生土器)		外面:ナデ? 内面:ナデ、ヘラケズリ?	回線文、刺突文	1~2mm程度の 砂粒を多く含む	良	黒褐色	一部のみ残存

第29表 2区遺構に伴わない出土遺物観察表(4) (第53図)

口径()の数値は復元径

探査 番号	写真 番号	出土地点	種別	法量(cm)	調 整	特 徴	給 土	焼成	色 調	備考	
53-1		2区 (包含層)	甕? (弥生土器)	口径:(12.0)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、 ヘラミガキ			1mm程度の砂粒 をわずかに含む	良	灰黄色	残存率10%
53-2	20	2区 (包含層)	甕 (弥生土器)	口径:(17.4)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	拡張された口縁部 に回線文(2条)		1mm程度の砂粒 を含む	良	淡黄色	残存率10%
53-3	20	2区 (包含層)	甕 (弥生土器)	口径:(17.8)	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	拡張された口縁部 に回線文		1~3mm程度の 砂粒をわずかに 含む	良	褐色	残存率30%
53-4	20	2区 (包含層)	甕 (弥生土器)	口径:(14.6)	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	拡張された口縁部 に回線文(3条)		1mm程度の砂粒 を含む	良	黄褐色	残存率10%
53-5		2区 (包含層)	甕 (弥生土器)	口径:(19.8)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	拡張された口縁部 に回線文(2条?)		1~2mm程度の 砂粒を含む	良	淡黄色	残存率10%
53-6	20	2区 (包含層)	甕 (弥生土器)	口径:(13.6)	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	拡張された口縁部 に回線文?		1~2mm程度の 砂粒を含む	良	淡黄色	残存率10%
53-7	20	2区 (包含層)	甕 (弥生土器)	口径:(18.4)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	拡張された口縁部 に回線文(4条)		1mm程度の砂粒 を含む	良	淡黄色	残存率10%
53-8		2区 (包含層)	甕 (弥生土器)		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	拡張された口縁部 に回線文		1mm程度の砂粒 を多く含む	良	黄褐色	残存率10%
53-9		2区 (包含層)	甕 (弥生土器)		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	拡張された口縁部 に回線文		1~2mm程度の 砂粒を多く含む	良	黄褐色	残存率10%
53-10	20	2区 (包含層)	甕 (弥生土器)	口径:(19.0)	外面:ヨコナデ、敷いハケメ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	脚部に刺突文		1mm程度の砂粒 を含む	良	黄褐色	残存率20%
53-11	20	2区 (包含層)	甕 (弥生土器)	口径:(17.0)	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ			1mm程度の砂粒 をわずかに含む	良	黄褐色	残存率20%
53-12	20	2区 (包含層)	甕 (弥生土器)	口径:(22.0)	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ			1mm程度の砂粒 を含む	良	黄褐色	残存率10%

第30表 2区遺構に伴わない出土遺物観察表(5) (第54図)

口径()の数値は復元径

探査 番号	写真 番号	出土地点	種別	法量(cm)	調 整	特 徴	給 土	焼成	色 調	備考	
54-1	21	2区 (包含層)	高坏 (弥生土器)	口径:(17.0)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	口縁部上面に斜格子文、口縁部端に キザミ		1mm程度の砂粒 を含む	良	淡黄色	残存率10%
54-2	21	2区 (包含層)	高坏 (弥生土器)	口径:(19.7)	外面:ナデ	环部外面に回線文 (7条)、キザミ		1mm程度の砂粒 をわずかに含む	良	淡黄色	残存率10%
54-3	21	2区 (包含層)	高坏 (弥生土器)	口径:(22.2)	外面:ナデ、ヘラミガキ 内面:ヨコナデ、ハケメ	环部外面に回線文 (4条)、キザミ		1~2mm程度の 砂粒をわずかに 含む	良	淡黄色	残存率20%
54-4	21	2区 (包含層)	高坏 (弥生土器)	口径:(22.0)	外面:ナデ? 内面:ナデ?	环部外面に回線文 ?		1mm程度の砂粒 を含む	良	褐色	表面風化のため 調整不明瞭 残存率10%
54-5		2区 (包含層)	高坏 (弥生土器)	底径:(15.3)	外面:ナデ? 内面:ナデ? ヘラケズリ?	脚部外面に回線文 (7条以上)		1~2mm程度の 砂粒を含む	良	淡黄色	表面風化のため 調整不明瞭 残存率10%
54-6	21	2区 (包含層)	高坏 (弥生土器)	底径:(15.0)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	透かし、回線文 (3条)		1mm程度の砂粒 を含む	良	淡黄色	残存率20%
54-7	21	2区 (包含層)	高坏? (弥生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ(ヘラケズリ?)	(櫛描き)直線文、 凹孔		1mm程度の砂粒 を含む	良	淡黄色	残存率10%
54-8		2区 (包含層)	高坏 (弥生土器)	底径:(16.1)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ	脚端部に回線文状 の凹み		1mm程度の砂粒 を含む	良	淡黄色	残存率10%

54-9	2区 (包含層)	高坏 (弥生土器)	底径:(15.4)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ	脚端部に凹線文(7条以上)	1mm程度の砂粒を多く含む	良	淡黄色	表面風化のため 調整不明瞭 残存率10%
54-10	21	2区 (包含層)	高坏 (弥生土器)	底径:(14.0)	外面:ヘラミガキ、 内面:ナデ?	脚端部に凹線文(1条?)、キザミ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色 残存率10%
54-11	21	2区 (包含層)	高坏 (弥生土器)	底径:(14.5)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、 ヘラケズリ	脚端部に凹線文(2条)	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	淡黄色 残存率10%
54-12		2区 (包含層)	高坏? (弥生土器)		外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	凹線文、キザミ	1mm程度の砂粒を含む	良	明褐色 残存率20%
54-13		2区 (包含層)	(底部) (弥生土器)	底径:(6.4)	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラミガキ?		1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色 残存率10%
54-14	21	2区 (包含層)	(底部) (弥生土器)	底径:(5.5)	外面:ヘラミガキ? 内面:ナデ	底部外面に沈線	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色 残存率10%
54-15		2区 (包含層)	(底部) (弥生土器)	底径:(5.6)	外面:ヘラミガキ? 内面:ヘラケズリ?		1~2mm程度の砂粒を含む	良	墨黄色 残存率10%
54-16		2区 (包含層)	(底部) (弥生土器)	底径:(7.0)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ		1~2mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色 残存率10%
54-17		2区 (包含層)	(底部) (弥生土器)	底径:(6.0)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ		1~2mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色 残存率10%
54-18		2区 (包含層)	(底部) (弥生土器)	底径:(6.4)	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ、 一部ヘラケズリ		1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色 残存率10%
54-19	21	2区 (包含層)	甕? (弥生土器)	口径:(7.2)	外面:ナデ、ヘラミガキ 内面:ナデ、ヘラケズリ		1~3mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色 残存率40%
54-20	21	2区 (包含層)	甕? (弥生土器)	口径:(12.2)	外面:ナデ 内面:ナデ、ハケメ	凹線文、キザミ	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色 残存率50%
54-21	21	2区 (包含層)	筋縄車		外面:ナデ		1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色 ほぼ完形

第31表 2区遺構に伴わない出土遺物観察表(6) (第55回)

口径()の数値は復元径

埠岡 番号	写真 図版	出土地点	種 別	法量(cm)	調 整	特 徵	胎 土	焼成	色 調	備考
55-1	22	2区 (包含層)	壺? (弥生土器)	口径:(15.4)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ		1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色	残存率10%
55-2	22	2区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(13.0)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	口縁部内面に斜角子文	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色	残存率10%
55-3	22	2区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(24.6)	外面:ナデ 内面:ナデ	口縁部に刺突文	1~2mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色	残存率10%
55-4	22	2区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(29.2)	外面:ナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ	口縁部に凹線文(外面3条・内面2条)	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色	残存率10%
55-5	22	2区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(28.0)	外面:ヨコナデ 内面:ナデ?	口縁部に凹線文(3条)	1~2mm程度の砂粒を含む(石欠失)	良	淡黄色	表面風化のため 調整不明瞭 残存率10%
55-6	22	2区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(29.6)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	口縁部に凹線文、 側縫き波状文	1mm程度の砂粒を含む	良	褐色	残存率10%
55-7	22	2区 (包含層)	壺 (弥生土器)	口径:(29.0)	外面:ヨギテ'、ナ?、 内面:ヨコナデ	口縁部に凹線文、 側縫き波状文	1~3mm程度の砂粒を含む	良	褐色	残存率10%
55-8	22	2区 (包含層)	壺 (弥生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	頭部から肩部にかけて凹線文(4条) 列点文、へら拂き斜縫	1~2mm程度の砂粒を含む	良	褐色	残存率10%
55-9	22	2区 (包含層)	壺 (弥生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ、 ナギテ'、ナ?、 ナギテ'、ナ?	頭部から肩部にかけて凹線文、 斜縫文、へら拂き斜縫	1mm程度の砂粒を含む	良	淡黄色	残存率10%

第32表 2区遺構に伴わない出土遺物観察表(7) (第56図)

探査 番号 回版	出土地点	種別	法量(cm)	調査	特徴	粘土	焼成	色調	備考
56-1 23	2区 (包含層)	盃 (弥生土器)		外面:ナデ、ハヘメ 内面:ナデ、ハケメ	柳葉流水文	1mm程度の砂粒 を含む	良	明褐色	残存率10%
56-2 23	2区 (包含層)	盃 (弥生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ、ハケメ	柳葉流水文		良	明褐色	残存率10%
56-3 23	2区 (包含層)	盃?		外面:ナデ、ハヘメ 内面:ナデ、ハケメ	柳葉流水文? 刺突?	1mm程度の砂粒 を含む	良	明褐色	残存率10%
56-4 23	2区 (包含層)	盃 (弥生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ	柳葉流水文	1mm程度の砂粒 をわずかに含む	良	明褐色	残存率10%
56-5 23	2区 (包含層)	盃 (弥生土器)		外面:ナデ、ハヘメ 内面:ナデ、ハケメ	柳葉流水文、柳葉 文刻目	1~2mm程度の 砂粒を含む	良	明褐色	残存率10%
56-6 23	2区 (包含層)	盃 (弥生土器)		外面:ナデ、ハヘメ 内面:ナデ、ハケメ	柳葉流水文、柳葉 文刻目	1mm程度の砂粒 を含む	良	黑褐色~ 明褐色	残存率10%
56-7 23	2区 (包含層)	盃 (弥生土器)		外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ	柳葉文、キザミ	1mm程度の砂粒 を含む	良	明褐色	残存率10%
56-8 23	2区 (包含層)	盃 (弥生土器)		外面:ナデ、ハケメ 内面:ナデ、ハカタ	柳葉文、流水文 刺突文		良	赤褐色	残存率40%

第33表 2区遺構に伴わない出土遺物観察表(8) (第57図)

探査 番号 回版	出土地点	種別	法量(cm)	調査	特徴	粘土	焼成	色調	備考
57-1	2区 (包含層)	甕 (土師器)	口径:(29.6)	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ハカタ	刺突?	1~2mm程度の 砂粒を含む	良	淡黄色~ 明褐色	残存率10%
57-2	2区 (包含層)	甕 (土師器)	口径:(16.6)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ハカタ		1mm程度の砂粒 を含む	良	黄褐色	残存率10%
57-3	2区 (包含層)	甕?	口径:(21.4)	外面:ナデ 内面:ナデ		1~2mm程度の 砂粒を含む	良	明褐色	残存率10%
57-4	2区 (包含層)	甕 (土師器)	口径:(22.6)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ハカタ		1~2mm程度の 砂粒を含む	良	黄褐色	残存率10%

第34表 2区遺構に伴わない出土遺物観察表(9) (第58図)

探査 番号 回版	出土地点	種別	法量(cm)	調査	特徴	粘土	焼成	色調	備考
58-1	2区 (包含層)	甕(高台付) (中世土器)	底径:(5.2)	外面:鉄輪ナデ 内面:鉄輪ナデ		1mm程度の砂粒 を含む	良好	淡黄色	

第35表 2区遺構に伴わない出土遺物観察表(10) (第58図)

探査 番号 回版	出土地点	種別	法量(cm)			特徴および文様・施釉	推定生産地	残存量	
			口径	底径	器高				
58-2	2区 (包含層)	磁器	里			堆瓦且と考えられる	中國	口縁部の一帯のみ残存	
58-3	2区 (包含層)	磁器	碗			三ヶ月高台 高台以外に施釉	肥前	底部の一帯が残存	
58-4	2区 (包含層)	磁器	碗			外面上界線 見込みに施釉	中國 (奈良朝?)	底部の一帯が残存	
58-5	2区 (包含層)	磁器	碗	12.0	3.7	4.4	見込みの部分は釉ハギ 高台部分は釉がかからない	肥前	40%程度の残存
58-6	2区 (包含層)	陶器	碗		4.7			肥前	底部が残存
58-7	2区 (包含層)	陶器	碗					肥前	底部の一帯が残存

第36表 2区遺構に伴わない出土遺物観察表(11) (第58図)

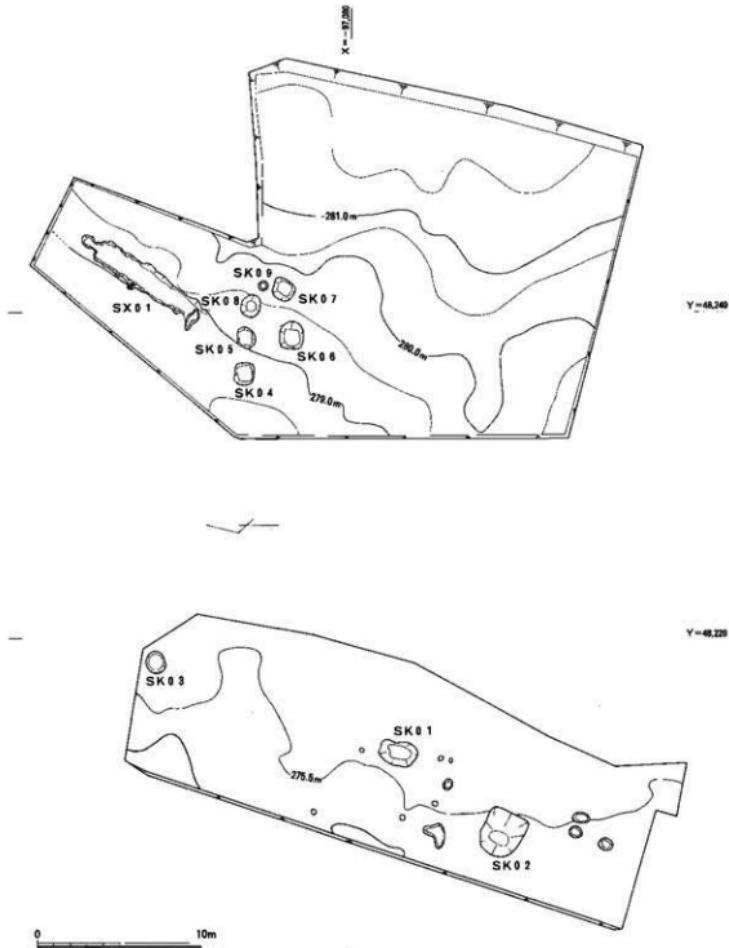
探査 番号 回版	出土地点	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
58-8	2区	打製石斧	15.7	9.1	1.8	
58-9	2区	叩石	14.6	6.9	5.0	

第5節 3区の調査

3区は2区のさらに南側に位置する調査区である。調査前は地形が3段に加工されており、水田や荒地となっていた。この3段のうち、中段を除く上下2段の面から遺物の出土がみられたため、この部分について調査をおこなった。神戸川からの比高は上段が22m~23m、下段で18.5mを測る。

基本的な土層の層序は水田造成時の盛土、黒色土、ハイカとなっているが、上段では黒色土の中に疊の含まれた層も確認された。また第2黒色土層の検出を行ったが、確認されなかったためそれ以下の層の調査は行っていない。

調査の結果、土坑や炭窯状の遺構を確認した。以下各遺構・遺物について報告する。



第59図 3区遺構配置図・地形測量図 (S = 1/300)

SK 01 (第60図、第37表)

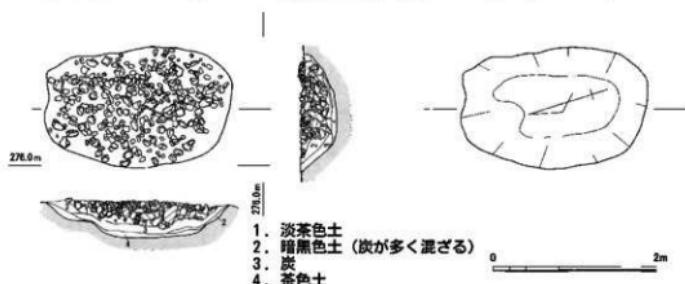
3区下段の中央付近で検出した七坑である。平面形は不整椭円形を呈しており、規模は、長軸2.2m、短軸1.5m、深さ0.5mを測る。十坑内には大きさが10cm程度の焼石が多く入っており、その下の層には炭を含む層が堆積している状況が確認された。遺構に伴う遺物は確認されていない。

この十坑の性格については、これまでの調査などから麻蒸施設に関係した遺構と考えられる。^(註)

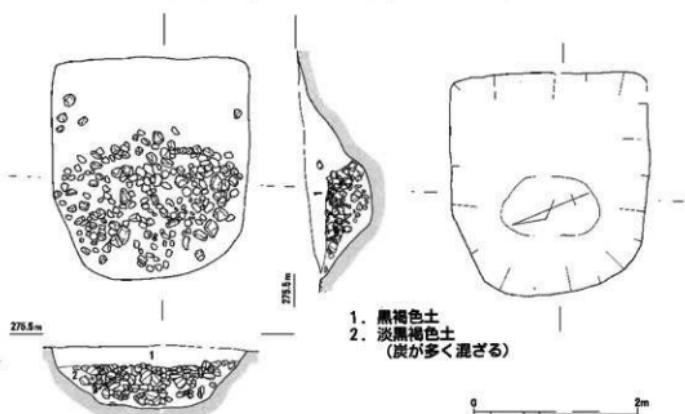
SK 02 (第61図、第37表)

3区下段、SK 01からやや南に位置している。平面形は、円形と方形を組み合わせたような不整形な形を呈しており、規模は長軸2.7m、短軸2.3m、深さ0.7mを測る。SK 01と同様に大きさが10cm程度の焼石が多く入っており、また炭を多量に含む層も確認された。遺構に伴う遺物は確認されていない。

この土坑の性格についても、SK 01同様麻蒸施設に関係した遺構と考えられる。



第60図 3区SK 01実測図 (S = 1 / 60)



第61図 3区SK 02実測図 (S = 1 / 60)

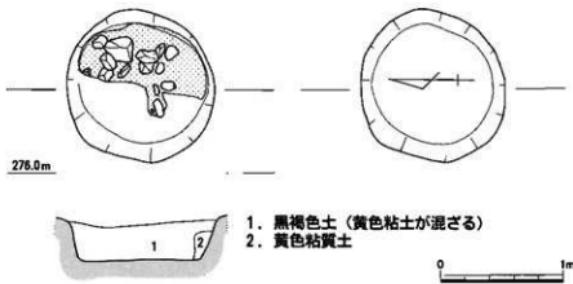
第37表 3区SK 01・SK 02計測表

(単位はm)

遺構名	平面形	規模 (長軸×短軸×深さ)	出土遺物	備考
SK 01	椭円形	2.2 × 1.5 × 0.5		炭、焼石を多く含む
SK 02	不整形	2.7 × 2.3 × 0.7		炭、焼石を多く含む

SK03 (第62図、第38表)

3区下段の北側で検出した土坑である。平面形は円形で、規模は径1.2m、深さ0.3mを測るが、本来はもう少し上面から掘り込まれていたものと思われる。この上坑内からは10cm程度の角礫が確認され、また内面の一部には粘土が貼られている状況が確認されたが、残存状況があまりよくないため詳細は不明である。この造構に伴う遺物は確認されていない。



第62図 3区SK03実測図 (S=1/40)

第38表 3区SK03計測表

(単位はm)

造構名	平面形	規模(長軸×短軸×深さ) (底面面積)	出土遺物	備考
SK03	円形	1.2×1.2×0.3 1.0×1.0		本来は粘土貼りであったと考えられる

SK04～SK09 (第63図、第39表)

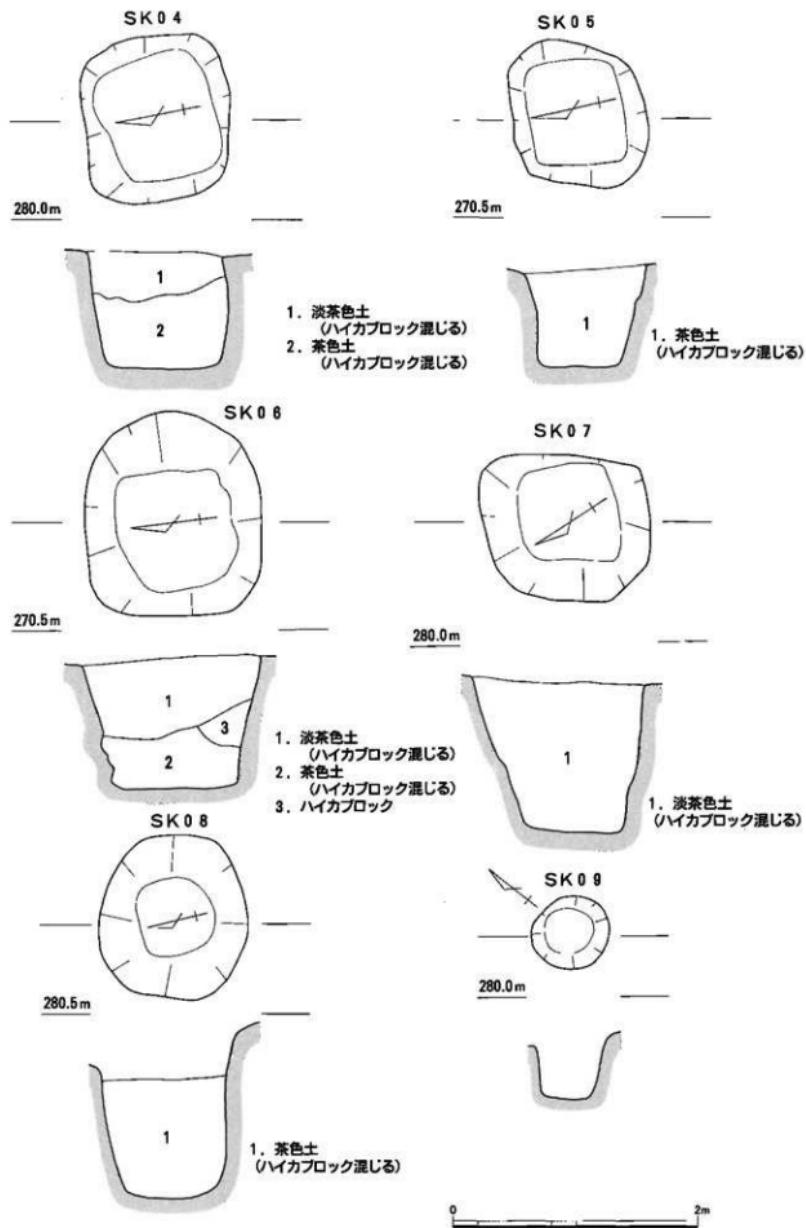
3区上段において検出した土坑群である。各土坑の詳細と出土遺物については第39表に記載している。概観すると平面形は、SK08、SK09がほぼ円形を呈しているものの、それ以外は方形を基調としている。規模は、SK09が径約60cm、深さ50cmと小さめであるが、ほかの5基はほぼ同じ大きさで長さ(径)約1.2～1.7m、深さ0.8～1.2mを測る。遺物はSK09以外のすべてから出土し、鉄釘や煙管、鉄釘などがみられる。

これらの土坑の性格については出土遺物などから近世墓であるものと考えられる。ただしSK09については規模もほかのものと比べて小さく、また出土遺物もないと現状ではわからない。

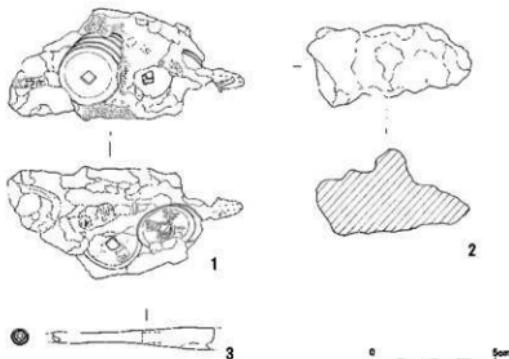
第39表 3区SK04～SK09計測表

(単位はm)

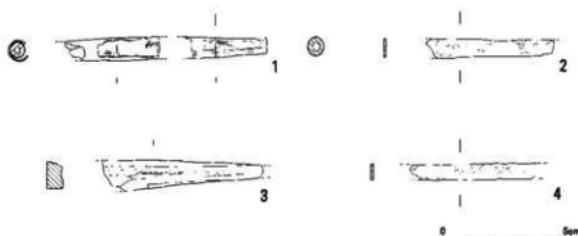
造構名	平面形	規模(長軸×短軸×深さ) (底面面積)	出土遺物	備考
SK04	方形	1.4×1.2×1.0 (1.0×0.9)	鉄釘・煙管・鉄洋 古鏡(寛永通寶)10以上	
SK05	方形	1.2×1.1×0.8 (0.9×0.6)	鉄釘・煙管・小刀? 古鏡(寛永通寶)18	
SK06	方形	1.6×1.4×1.1 (1.0×0.9)	鉄釘・煙管・鉄洋・小刀? 古鏡(寛永通寶)12	
SK07	方形	1.4×1.2×1.2 (0.8×0.8)	鉄釘・煙管・古鏡(寛永通寶)10	
SK08	円形	1.2×1.2×1.1 (0.6×0.6)	鉄釘・古鏡(寛永通寶)7	
SK09	円形	0.6×0.6×0.5 (0.4×0.4)		SK04～SK08に比べ小規模である



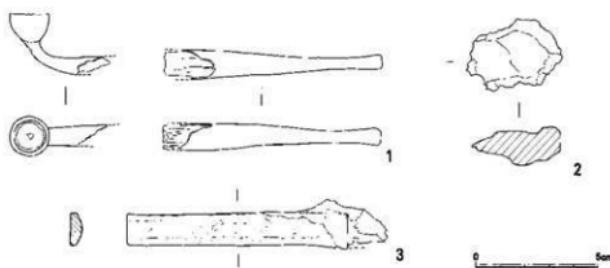
第63図 3区SK 04～SK 09実測図 (S = 1/40)



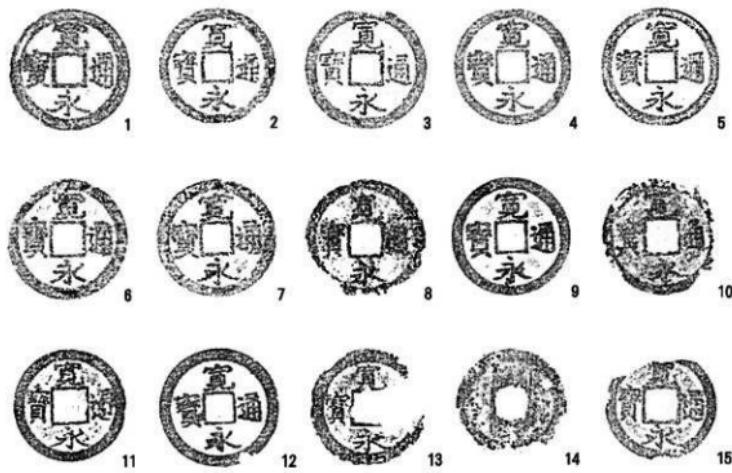
第64図 3区SKO 4出土遺物実測図 (S = 1 / 2)



第65図 3区SKO 5出土遺物実測図 (S = 1 / 2)



第66図 3区SKO 6出土遺物実測図 (S = 1 / 2)



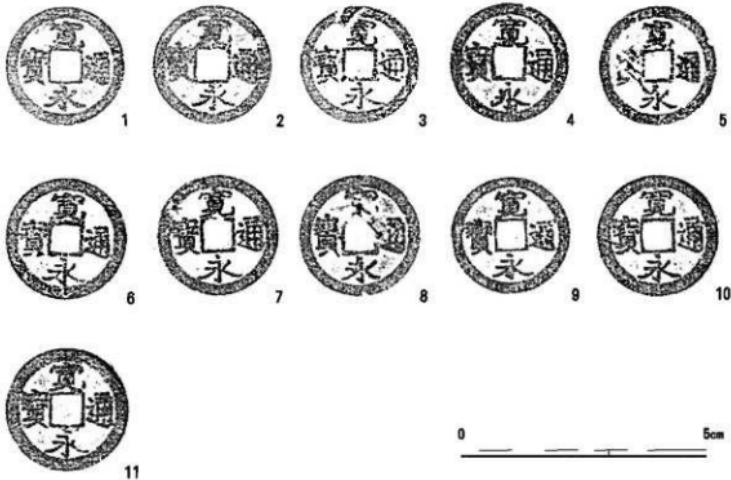
0 5cm

第67図 3区SK05出土銭貨拓本 (S=1/1)

第40表 SK05出土銭貨計測表

No.	標記番号	出土地	名 称	初鑄年	銭徑(A)/銭厚(D) (mm)	銭孔(B)/銭厚(D) (mm)	銭 厚 (mm)	量 目 (g)	備 考
1	67-1	SK05	寛永通寶		25.05 25.08	20.20 19.63	1.12~1.26	3.10	
2	67-2	SK05	寛永通寶		24.04 24.12	19.72 19.43	1.21~1.30	3.45	
3	67-3	SK05	寛永通寶		25.32 25.31	20.58 20.43	1.52~1.63	4.71	
4	67-4	SK05	寛永通寶		24.31 24.27	20.13 19.86	1.38~1.58	4.46	
5	67-5	SK05	寛永通寶		24.62 24.54	20.58 20.26	1.17~1.34	3.11	
6	67-6	SK05	寛永通寶		25.17 25.11	20.36 19.93	1.30~1.42	2.27	
7	67-7	SK05	寛永通寶		24.70 24.61	19.76 19.38	1.19~1.36	3.47	
8		SK05	寛永通寶		24.15 24.77	20.63? 20.16	*		
9	67-8	SK05	*		*	*	*	2.78	8と9重なっている
10	67-9	SK05	寛永通寶		24.51 24.57	20.36 19.97	1.22~1.32	3.66	
11		SK05	寛永通寶		*	20.22? 20.21	*		
12	67-10	SK05	*		*	*	*	5.20	11と12重なっている
13	67-11	SK05	寛永通寶		23.33 23.29	18.97 18.89?	1.16~1.20	2.57	
14	67-12	SK05	寛永通寶		*	24.76	*	1.96	1.01~1.03
								1.80	

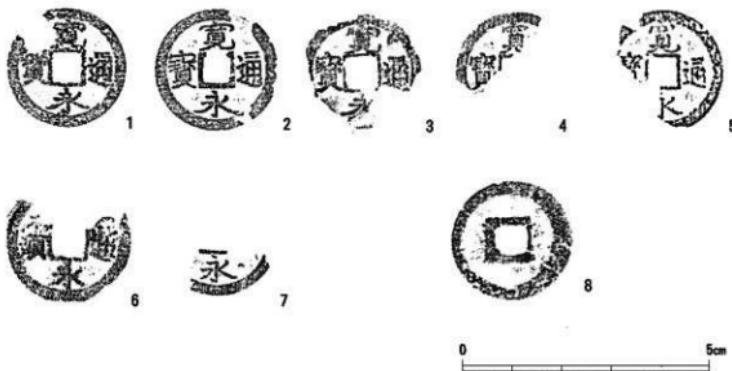
15	67-13	SK05	寛永通寶	*	18.67	*	1.08~1.13	1.16	
16		SK05	*	*	*	*			
17	67-14	SK05	*	*	*	*		2.44	16と17重なっている
18	67-15	SK05	寛永通寶	*	23.00	*	19.02	0.83~0.92	1.32



第68図 3区SK06出土錢貨拓本 (S=1/1)

第41表 SK06出土錢貨計測表

No.	通号 番号	山土地 名	称	初年 年	錢徑(A)/錢徑(B) (mm)	錢徑(C)/錢徑(D) (mm)	錢 厚 (mm)	重 量 (g)	備 考
1	68-1	SK06	寛永通寶		21.48	21.29	19.51	19.54	0.96~1.15
2	68-2	SK06	寛永通寶		21.39	21.43	19.61	19.75	1.12~1.22
3	68-3	SK06	寛永通寶		24.48	24.43	19.61	19.60	1.03~1.20
4	68-4	SK06	寛永通寶		24.30	24.29	19.90	19.59	0.99~1.23
5		SK06	寛永通寶		24.50	24.21	19.91	19.56	*
6	68-5	SK06	*	*	*	*	*		6.94 5と6重なっている
7	68-6	SK06	寛永通寶		24.97	24.99	19.70	19.91	1.15~1.23
8	68-7	SK06	寛永通寶		24.71	24.69	19.69	20.04	1.04~1.09
9	68-8	SK06	寛永通寶		24.88	24.89	19.95	19.97	1.13~1.21
10	68-9	SK06	寛永通寶		24.39	24.31	19.71	19.72	1.21~1.33
11	68-10	SK06	寛永通寶		24.99	25.01	19.69	19.68	1.18~1.25
12	68-11	SK06	寛永通寶		25.23	25.22	19.99	19.83	0.92~1.03



第69図 3区SK07・SK08出土銭貨拓本 (S=1/1)

第42表 SK07出土銭貨計測表

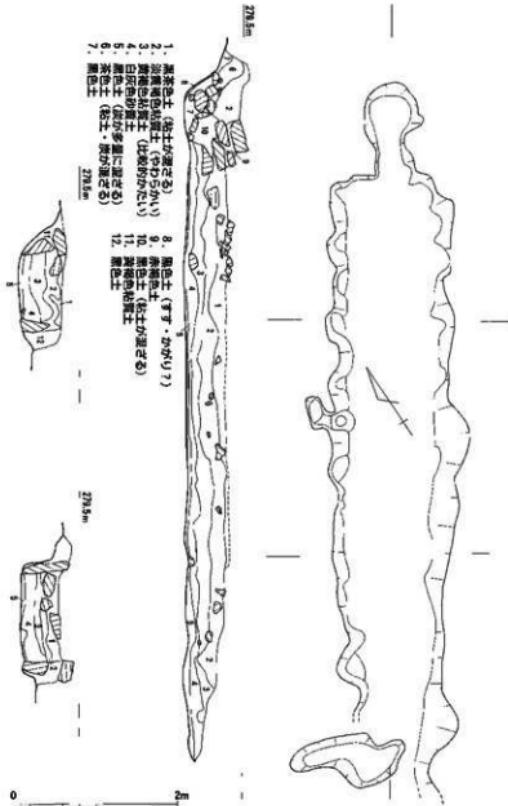
No.	標印番号	出土地	名 称	初 調年	銭径A/銭径B (mm)	銭径C/銭径D (mm)	銭 厚 (mm)	量 量 (g)	備 考
1	69-1	SK07	寛永通寶		24.48 24.49	19.49 19.47	1.23~1.34	2.43	
2	69-2	SK07	寛永通寶		25.02 25.04	20.52 20.18	*	8.16	2+3+4+5 4枚重なっている
3		SK07	*	*	*	*	*		
4		SK07	*	*	*	*	*		
5		SK07	*	*	*	*	*		
6	69-3	SK07	寛永通寶		*	*	*	1.34	6と7重なっている
7	69-4	SK07	寛永通寶		*	*	*		
8	69-5	SK07	寛永通寶		*	*	1.21~1.29	1.77	
9	69-6	SK07	寛永通寶		*	*	1.07~1.11	2.21	
10	69-7	SK07	寛永通寶		*	*	1.28~1.31	0.32	

第43表 SK08出土銭貨計測表

No.	標印番号	出土地	名 称	初 調年	銭径A/銭径B (mm)	銭径C/銭径D (mm)	銭 厚 (mm)	量 量 (g)	備 考
1	69-8	SK08	*		*	*	*	3.15	1と2重なっている
2		SK08	*		*	*	*		
3	SK08	*			*	*	*		
4	SK08	*			*	*	*		
5	SK08	*			*	*	*		
6	SK08	*			*	*	*		
7	SK08	*			*	*	*		

SX01

3区上段の北西側、標高279mのところ等高線にはほぼ平行に地山を掘り込んで構築されている。本造構からは多量の炭化物が確認されており、また形態等からも半地下式の炭窯である可能性が高いものと判断し以下報告する。平面形はほぼ長方形を呈し、規模は全長8.7m、炭化室奥行き約7.0m、炭化室床面幅は焚口側で1.1m、奥壁側で0.8mを測る。高さは天井部分が心の状態を保っていないために明らかでない。調査段階では東側壁面の高さは40cm~70cm程度であった。炭化室側壁面には、東側壁面中央部を除いて石が立て並べられており、一部にはその上にさらに石が積まれている状況が確認できた。周辺からはこの壁面に用いられている石と同様の石が散乱しており、本来はもう数段積まれていたことも考えられる。煙出し部は奥行き約1m、幅約50cmで、炭化室床面に対

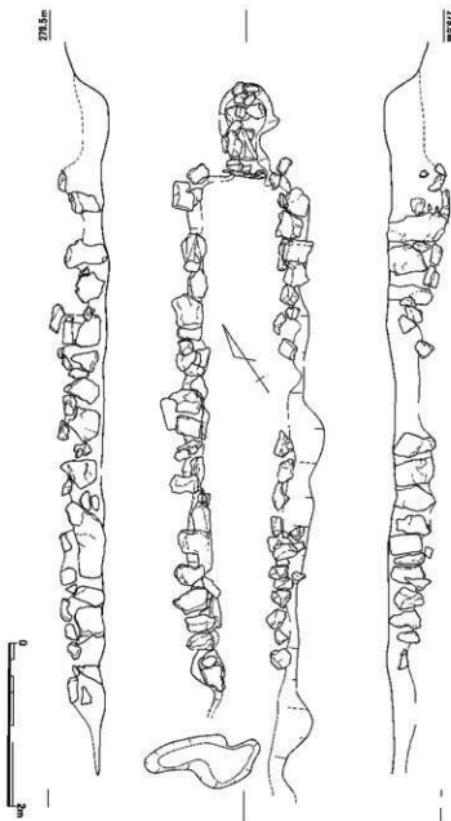


第70図 3区SX01実測図(1) (S=1/60)

して50°の傾斜をもって掘られている。底面は円形に近い。煙出し部分にも石がみられ、石を積み上げることによって煙道の一部が構築されていたことが推測されるが、残存状況が悪くはっきりとしたことは不明である。炭化室の壁面の右は全体的に被熱しているものの、中央よりやや煙出し部側にかけては青灰色を呈していて強く焼けている状況が確認された。炭化室内には上層で粘土塊が、その下層で木炭片や木炭粉が堆積していた。粘土塊や粘土は天井部に出来るものと考えられる。

また焚口部の西側では長さ約1.5m、幅約50cmの不整形な浅い窪みが確認されたが、これはこの炭窯に何らかの関わりをもつものと考えられる。

この炭窯の時期については、熱残留磁気年代測定等が行えなかったため不明である。^(註10)類例などから推測して近世以前のものである可能性が高いと考えられる。

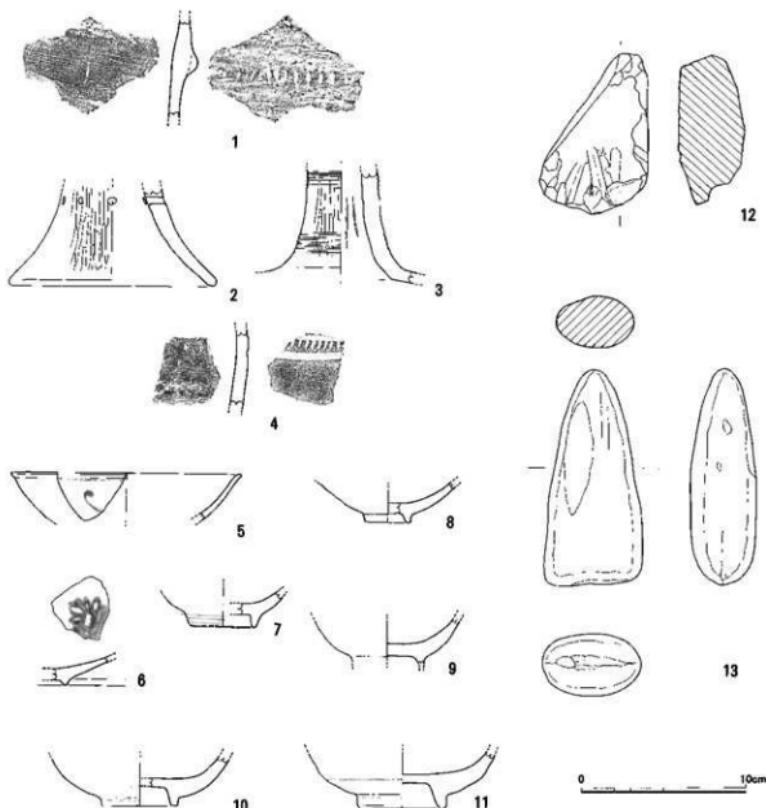


第71図 3区SX01実測図(2) (S = 1/60)

遺構に伴わない遺物

3区においても縄文土器、弥生土器、陶磁器類、石器などが出土しているものの、ほかの調査区と比べると量は少ない。ただし、出土した遺物は、時期的には周辺のものと同様の傾向をみせている。

1は縄文土器と考えられる。破片は口縁部よりわずかに下がった部分と考えられ、キザミのある突帯を有している。2~4は弥生土器である。2・3は高環の脚部で、外面はヘラミガキがなされ、2には円形の透かし、3には直線文が認められる。4は壺または甕の胸部破片と考えられ、回線文とキザミが施されている。5~11は陶器・磁器類である。破片が小さいためはっきりしない部分も多いが、5と7~9が磁器碗、6が磁器皿、10・11が陶胎染付の碗で、肥前系と考えられる。12・13は石器で、それぞれ砥石、磨製石斧と考えられる。



第72図 3区遺構に伴わない出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

これらの時期は、1が繩文時代晚期、2～4が弥生時代中期後葉、6・7が17世紀代、8～11が18世紀代と考えられる。

第44表 3区遺構に伴わない出土遺物観察表(1) (第72図)

口括()の数値は復元値

擇団 番号	写真 版面	出土地点	種別	法益(cm)	調査	特徴	胎土	焼成	色調	備考
72-1	25	3区 (包含層)	漆鉢 (縄文土器)		外面:茶唐、ナデ 内面:ナデ	キサミのある突起	1mm程度の砂粒 を含む	良	黄褐色	残存率10%
72-2	25	3区 (包含層)	高杯 (弥生土器)	底径: 12.0	外面:ナデ、ヘラミガキ 内面:ナデ	円形透かし(10?)	1mm程度の砂粒 をわずかに含む	良	淡黄褐色	残存率10%
72-3	25	3区 (包含層)	高杯 (弥生土器)		外面:ナデ、ヘラミガキ 内面:ナデ	(擦挫) 直線文	1mm程度の砂粒 を含む	良	淡黄褐色	残存率10%
72-4	25	3区 (包含層)	漆かづ (弥生土器)		外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ	刺突文?、凹縞文?	1mm程度の砂粒 を含む	良	淡黄褐色	残存率10%

第45表 3区遺構に伴わない出土遺物観察表(2) (第72図)

口括()の数値は復元値

擇団 番号	写真 版面	出土地点	種別	器種	法量(cm)			特徴および文様・施釉	推定生産地	残存量
					口径	底径	器高			
72-5	25	3区 (包含層)	磁器	碗	(13.6)				肥前?	口縁～体部にかけて残存
72-6	25	3区 (包含層)	磁器	皿?				低い高台の内面に砂	肥前?	底部の一部が残存
72-7	25	3区 (包含層)	磁器	碗					肥前	口縁～体部にかけて残存
72-8	25	3区 (包含層)	磁器	碗	(2.7)			見込みの部分は船ハギ	肥前	
72-9	25	3区 (包含層)	磁器	碗	(4.0)				肥前	底部が残存
72-10	25	3区 (包含層)	陶器	碗					肥前	口縁～体部にかけて残存
72-11	25	3区 (包含層)	陶器	碗	(5.2)				肥前	底部が残存

第46表 3区遺構に伴わない出土遺物観察表(3) (第72図)

擇団 番号	写真 版面	出土地点	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
72-12	25	3区 (包含層)	砾石	10.0	6.7	4.0	
72-13	25	3区 (包含層)	磨製石斧	13.3	6.1	4.0	

第6節 まとめ

神原Ⅱ遺跡の調査は平成9（1997）年度より開始され、これまでに多くの遺構・遺物の存在が明らかとなっている。前節において報告してきたとおり、平成9（1997）年度の調査においても縄文時代～近世^{（and）}にいたる遺構・遺物を確認し、この地域の歴史を明らかにしていくうえでの貴重な資料を得ることができた。ここでは今回の調査結果について時代ごとにまとめてみたい。

1. 縄文時代の遺構・遺物について

縄文時代の遺構・遺物として確認できたのは、晩期と考えられる少量の縄文土器片及び第2黒色土中の土器片のみで、それ以外に顕著な遺構・遺物は確認できなかった。平成9（1997）年度～平成12（2000）年度にかけて行なわれた神原Ⅱ遺跡のほかの調査区を含め、周辺遺跡で行われた調査においては多くの縄文時代の遺構・遺物が確認されていることからすると量的に少なく、また時期的にも限られていることが指摘できる。このことは、調査面積など考慮しなければならない点はあるものの、第1黒色土・第2黒色土ともに言えることである。縄文時代における人々の活動の痕跡は認めるとても、今回の調査区付近は安定的な生活場所としては選ばれなかったことを示しているものと考えられる。この河岸段丘における縄文時代の居住域は、平成9・10（1997・1998）年度に行なわれた調査から、段丘の中央から南西部にかけて存在している可能性が高いと判断される。

2. 弥生時代の遺構・遺物について

弥生時代の遺構・遺物としては主に2区において建物跡及び多くの弥生土器を確認した。弥生土器は縄文土器に比べるとその出土量が格段が多く、なかでも中期後半代のものが圧倒的に多いことが指摘できる。また、建物跡もその出土遺物から弥生時代中期後半代のものと考えられ、この時代から今回の調査区付近に人々が生活はじめたことをうかがわせている。同じ河岸段丘にあるほかの調査区や神原Ⅰ遺跡、対岸の門遺跡においてもそのような傾向があることから、神戸川を挟むこの河岸段丘一帯でこの時期に本格的に集落が営まれ始めたことを示していると考えられよう。

こうした中期後半代の状況に対し、前期～中期前半代のものは今回の調査区においては遺構・遺物とも確認しておらず、様相を知る手がかりを得ることができなかった。ただし周辺の遺跡では、北に約600mのところにある板屋Ⅲ遺跡、また南に約2kmのところにある小丸遺跡などにおいて前期の遺物が確認されていることから、今回の調査区以外において存在する可能性も考えられる。

ところで、検出された建物跡2棟はどちらも平面形が円形で、規模が直径約4.0m～6.0mのものである。形態・規模等は一般的な建物跡と考えられるが、注目されるのは床面から石の剥片が確認された2区S I 0 1である。同様の例は対岸の門遺跡においても認められ、同じく中期後半代の建物跡（門遺跡S I 0 9・S I 1 0・S I 1 4）から剥片が多数出土している。特に門遺跡S I 0 9からは多量の剥片が出土しており、剥片と共に石鐵の完形品も出土していることから、こうした剥片が石鐵作成の過程で生じたものと想定されている。神原Ⅱ遺跡2区S I 0 1における剥片が何によって生じたのかは断言できないものの、こうした例から石鐵作成に伴う剥片である可能性が高いと考えられる。ほぼ同時期に営まれたと思われる神原Ⅱ遺跡・門遺跡の集落においては、このような石器の製作がある程度行なわれていた可能性が考えられよう。

また今回出土した土器の中には、文様などがいわゆる「塙町式」土器の特徴を備えた土器や、櫛

状工具によって流水文の描かれた土器など特徴的な土器が確認されている。今回確認したこれらの資料は当時の様相を解明するうえでの貴重な資料になるものと思われる。

3. 古墳時代の遺構・遺物について

古墳時代の遺構・遺物については、後期前半代と推測される1×SK02のほか、同じく1区の箱式石棺がその可能性のあるものと考えられる。しかしながらそのほかは確認されておらず、特に前期から中期にかけては遺構・遺物とも認められないことから、今回の調査範囲においては空白期となっている。したがってこの時期の様相は明らかにできなかった。前期から中期にかけての遺構・遺物が確認されない傾向は神原II遺跡（98年度調査区）や周辺の遺跡においても認められ、全体として前期から中期は様相が明らかでない。

4. 奈良～平安時代の遺構・遺物について

奈良時代～平安時代にかけての遺構・遺物としては、1、2区において建物跡を確認したほか1区において多くの土器も出土した。奈良・平安時代の遺構はこれまでにも門遺跡、神原II遺跡（98年度調査区）などにおいて確認されており、特に門遺跡のものは『出雲國風上記』に記載のある「刻」と関連する可能性も考えられているものである。今回確認した遺構はそうした遺構とは近距離にあり、密接な関わりをもつものと考えられる。

5. 中世の遺構・遺物について

中世の遺構・遺物として確認できたのは、その可能性の考えられるSX01のほかわずかな遺物のみで、古墳時代同様その様相がはっきりとしない。しかしながら、確認された遺物の中には15世紀代と考えられる青磁などもみられ、この地域における有力者の存在を推測させる。今回の調査範囲においては直接関係するような遺構は確認されなかったが、神原II遺跡の対岸の丘陵上には森脇山城が、また2kmほど上流には森V遺跡など中世期の遺跡も確認されており注目される。

6. 近世の遺構・遺物について

近世の遺構は人鍛冶場跡などを除けば主に3区において確認した。3区下段において確認した土坑は焼石や炭を多く含むもので、前節においても述べたとおり当地域における産業の一つであった麻の生産に関わる遺構と考えられる。こうした遺構はこれまでの調査で多数確認されており、調査例も増加している。製鉄などと並ぶ地域の産業の実態を明らかにしていく上で手がかりになるものと考えられる。

- (註1) 烏根県教育委員会『神原I遺跡・神原II遺跡』2000
- (註2) 原 喜久子「烏根県における古墳時代の鐵器について」『鳥根考古学会誌』10 1993
- (註3) 繩文土器の年代については
『繩文土器大観』1～4 1988、1989
を参考にしている。
- (註4) 弦生土器の年代については
松本岩雄「出雲・隠岐」『弦生土器の様式と編年 山陰・山陽』1992
を参考にしている。
- (註5) 銀器類については西尾克己氏にご教示いただいた。
- (註6) 前掲(註1)と同じ。
- (註7) 前掲(註1)と同じ。
- (註8) 前掲(註1)と同じ。
- (註9) 出土銭貨の計測法については次のものを参考にした。
永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』1994
- (註10) 河瀬正利氏にご教示いただいた。また以下のものを参考にした。
飼広島県埋蔵文化財調査センター『平家ヶ城跡発掘調査報告書』1997
- (註11) 烏根県教育委員会『埋蔵文化財調査センター年報』VI 1999
島根県教育委員会『埋蔵文化財調査センター年報』VII 2000ほか

写 真 図 版 (1)



神原Ⅱ遺跡全景（南から）



神原Ⅱ遺跡97年度調査区及びその周辺

写真図版 2

1区 S I 0 1



1区 S B 0 2 及び
箱式石棺



1区 S K 0 1





1区 SK02 (検出状況)



1区 SK02



1区 SK03

写真図版 4



1区 箱式石棺



1区 箱式石棺



1区 土層



2区 S104



2区 SB01 (遺物出土状況)

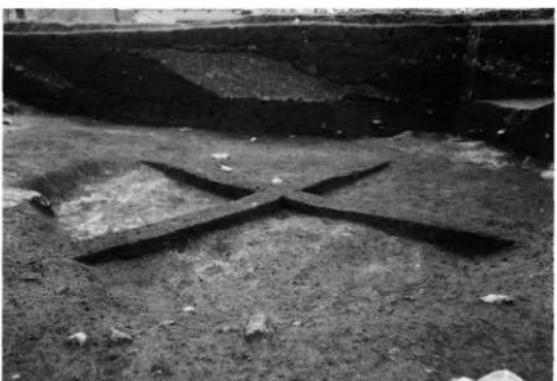
写真図版 6



2区 S101



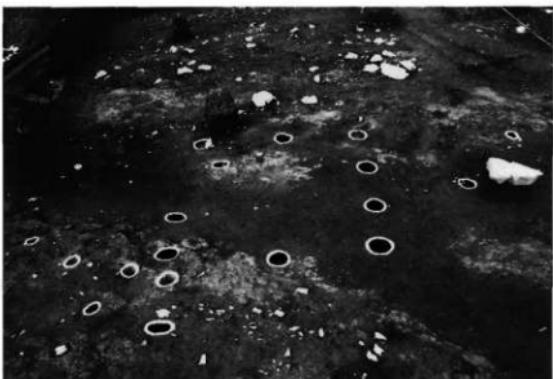
2区 S102



2区 S103



2区 S I 0 4
(遺物出土状況)



2区 S B 0 1



2区 S K 0 2

写真図版 8



3区 下段（遺構検出状況）



3区 SK01



3区 SK03



3 区 上段



S X 0 1

写真図版10



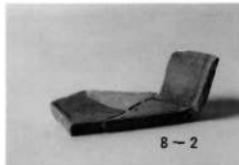
3区 SX01 土層



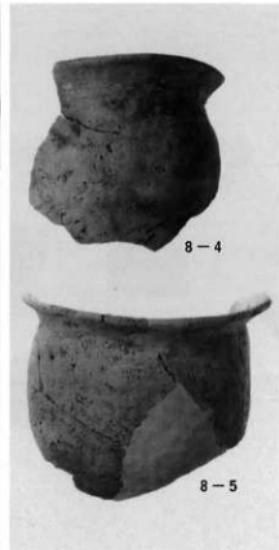
3区 SX01 倒石



3区 SX01 石除去後

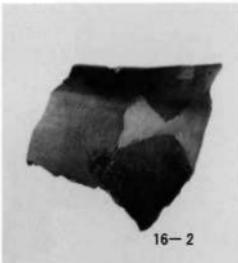


8-2

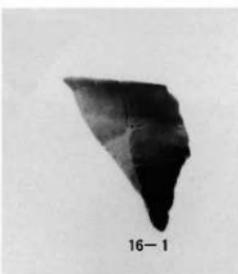


8-4

8-5



16-2



16-1

1区 SK01 出土遺物

1区 SK01 出土遺物



18-5



18-6



18-7

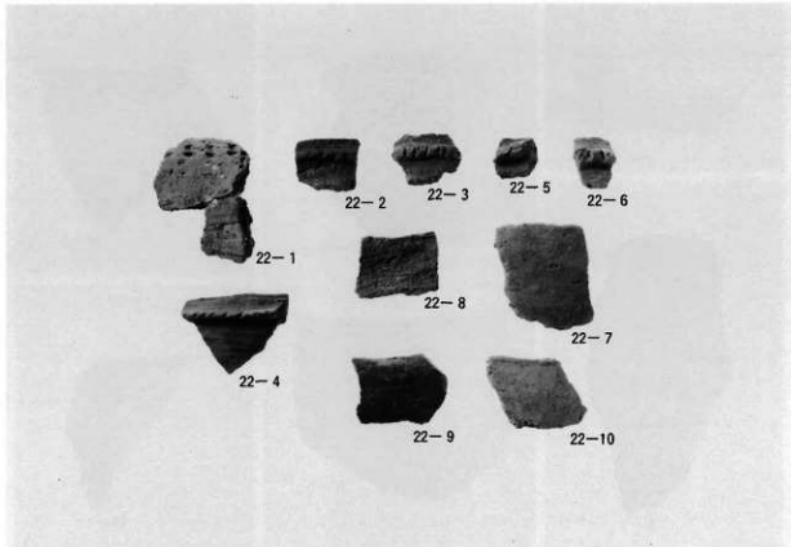


19-1

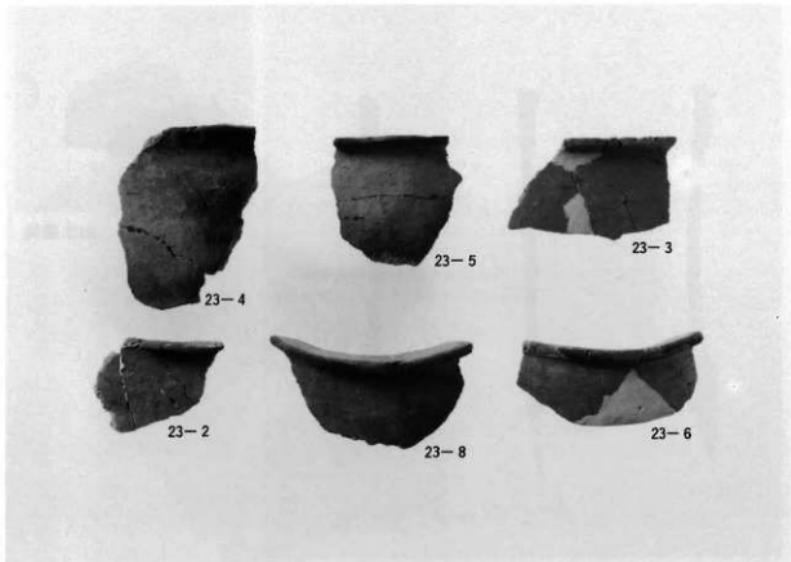
1区 SK04 出土遺物

1区 SK02 出土遺物

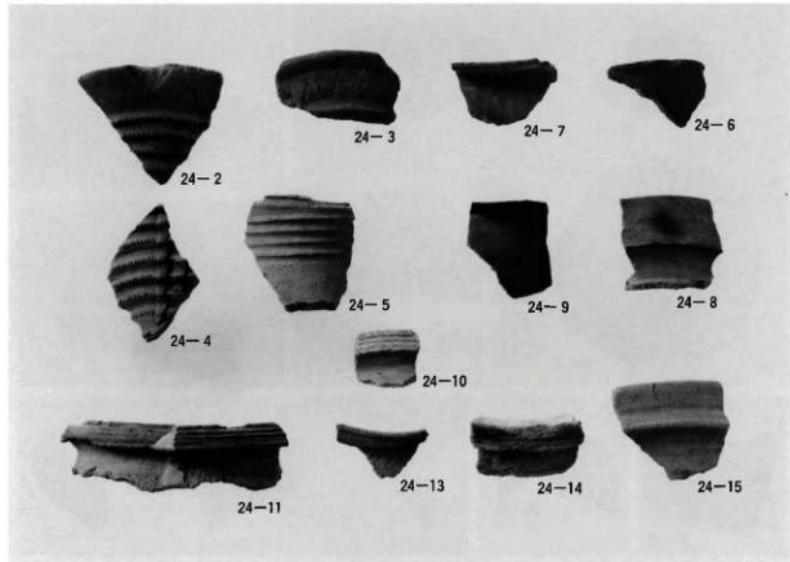
写真図版12



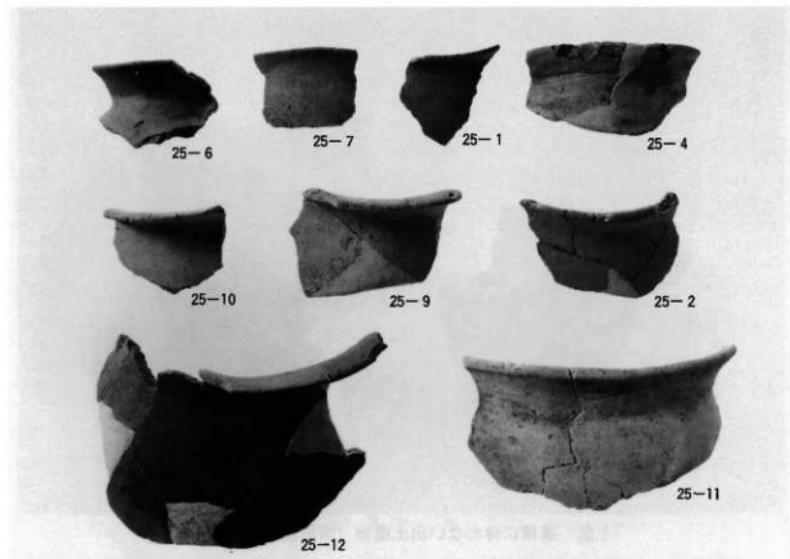
1区 遺構に伴わない出土遺物（縄文土器）



1区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）

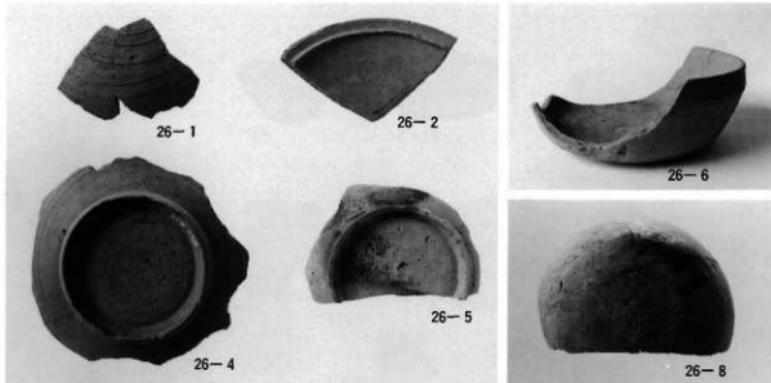


1区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）

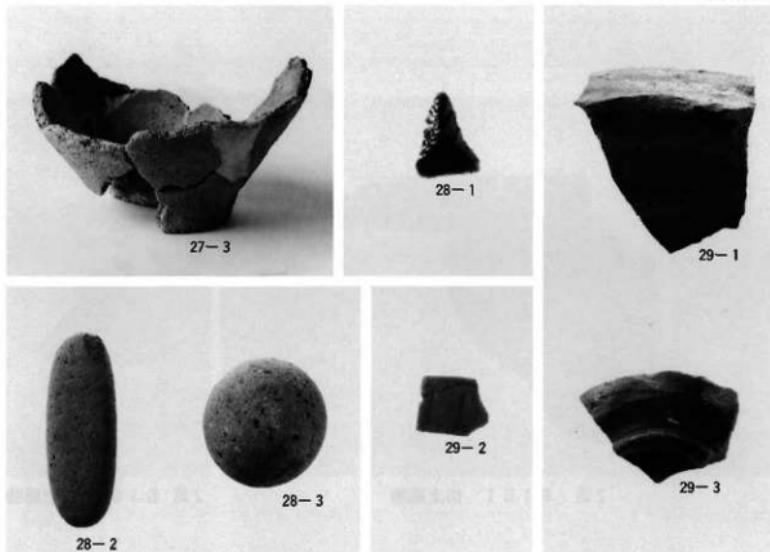


1区 遺構に伴わない出土遺物（土師器）

写真図版14



1区 遺構に伴わない出土遺物（須恵器・土師器）

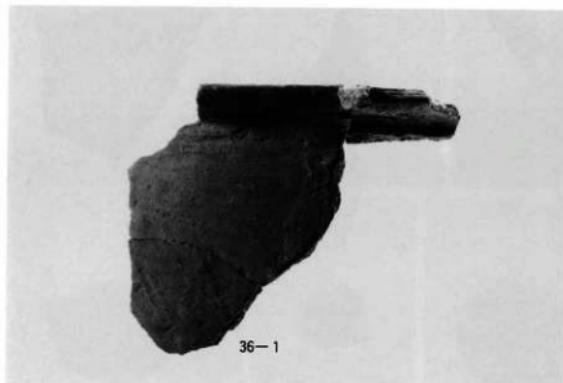


1区 遺構に伴わない出土遺物（石器・弥生土器・陶磁器）



1区 遺構に伴わない出土遺物 第2 黒色土（縄文土器）

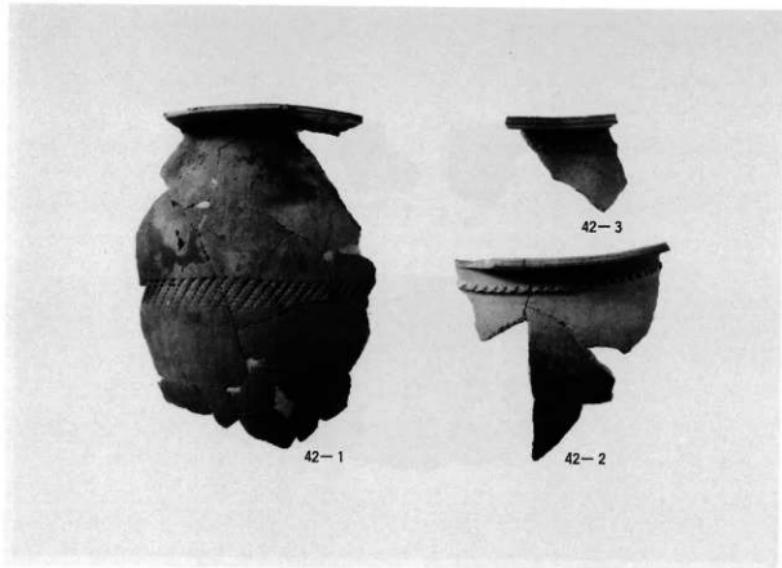
写真図版16



2区 S I 0 1 出土遺物



2区 S I 0 4 出土遺物



2区 S I 0 4 出土遺物



45-2



46-1



45-5



46-2



46-3



45-3



46-8



46-9

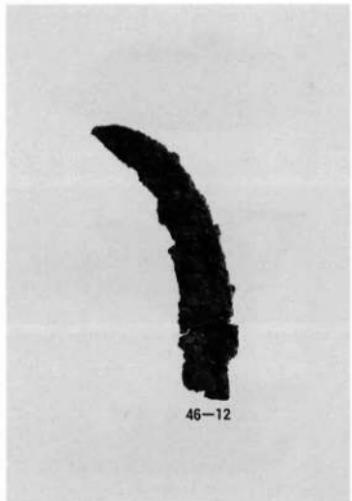


45-6

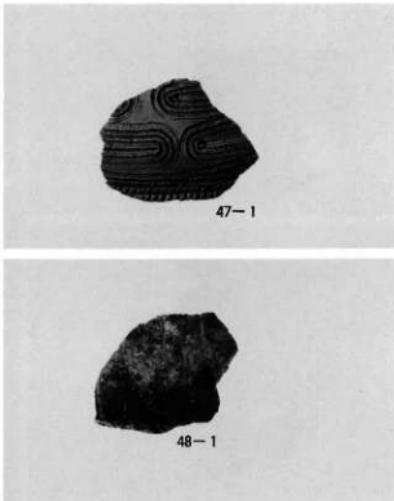


46-10

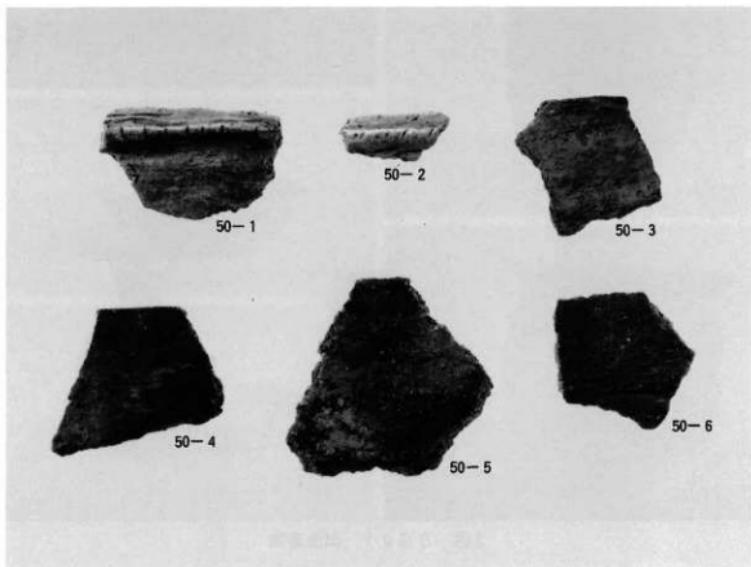
写真図版18



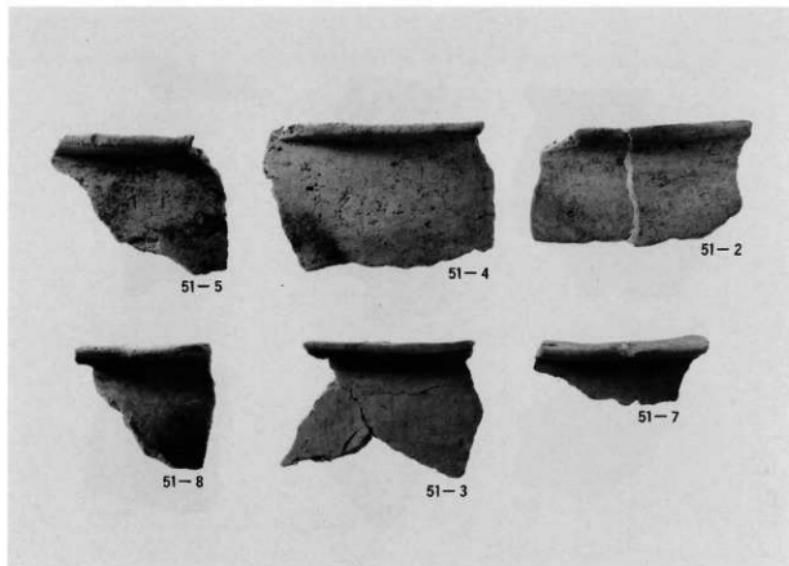
2区 SB01 出土遺物



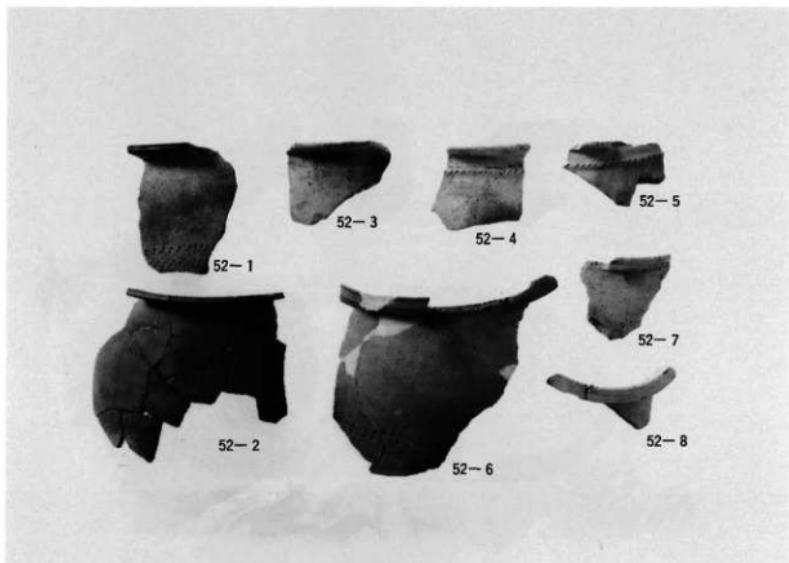
2区 SK02・SK03 出土遺物



2区 遺構に伴わない出土遺物（縄文土器）

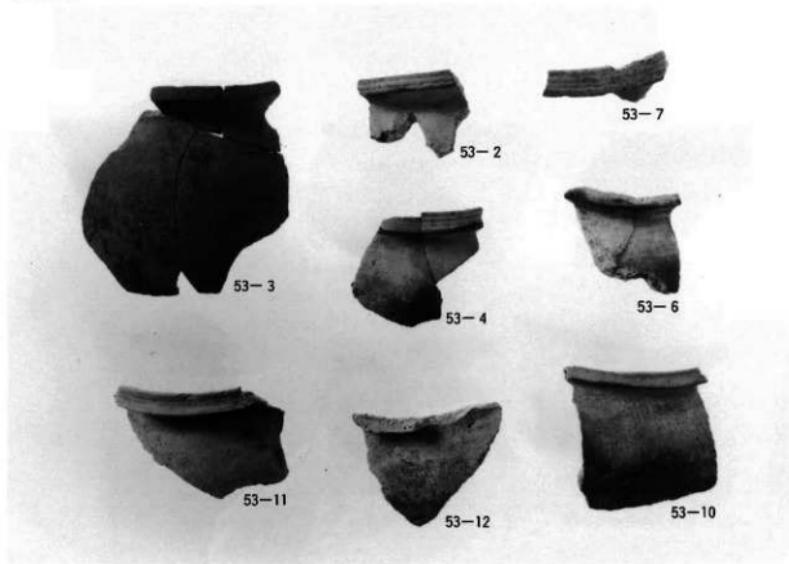


2区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）

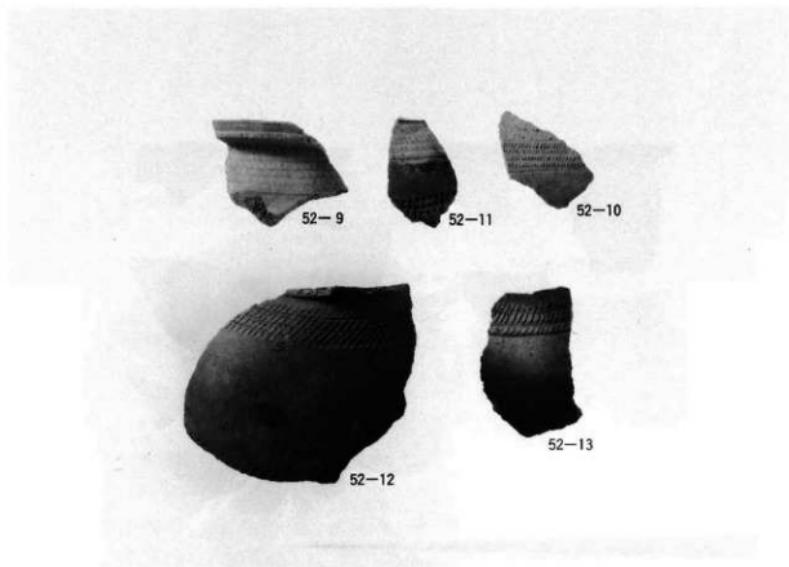


2区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）

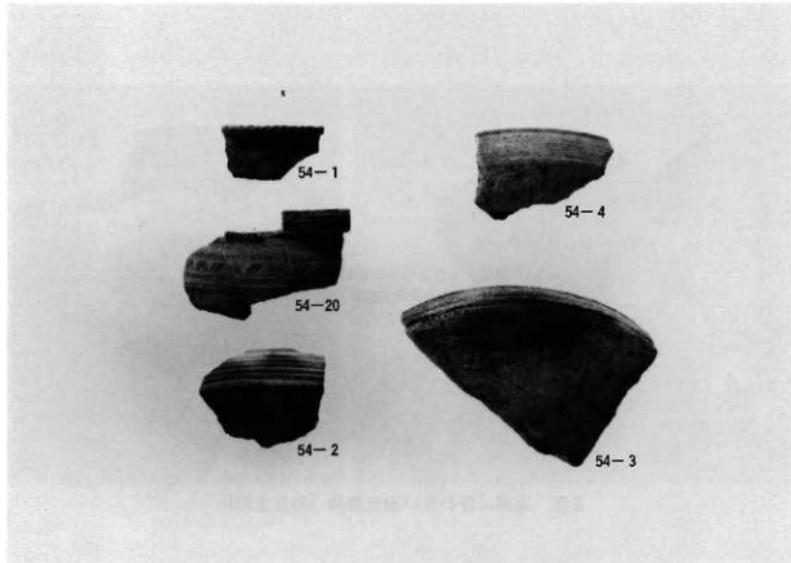
写真図版20



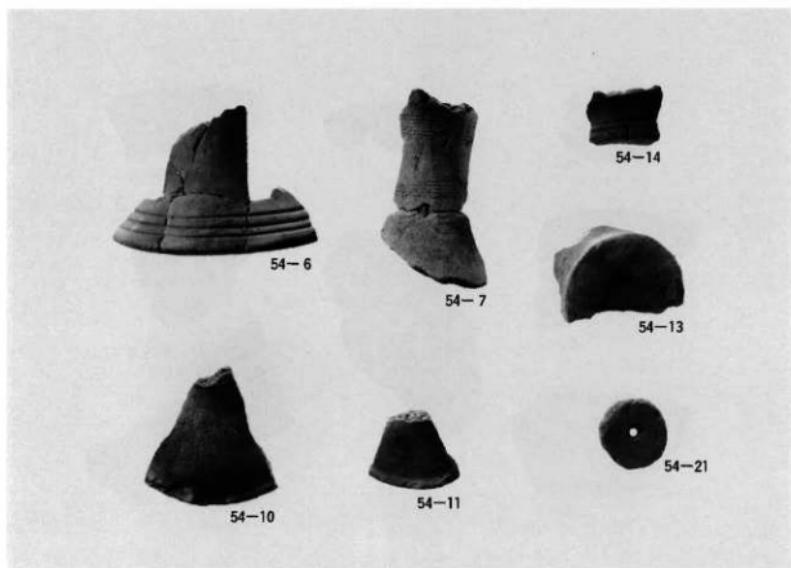
2区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）



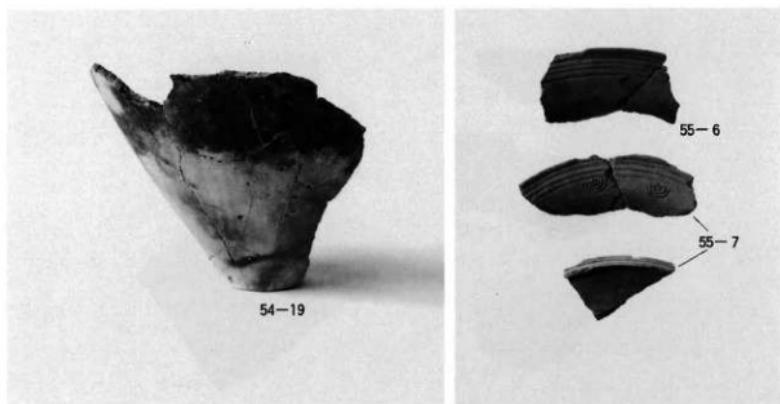
2区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）



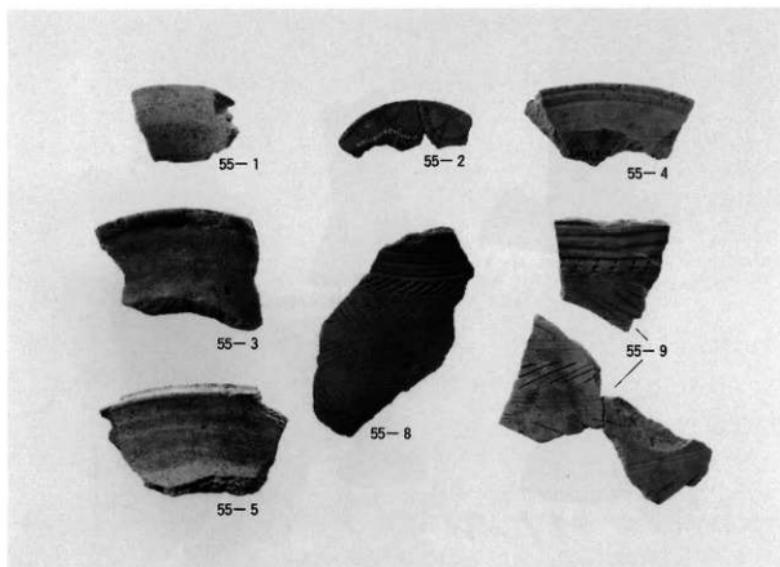
2区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）



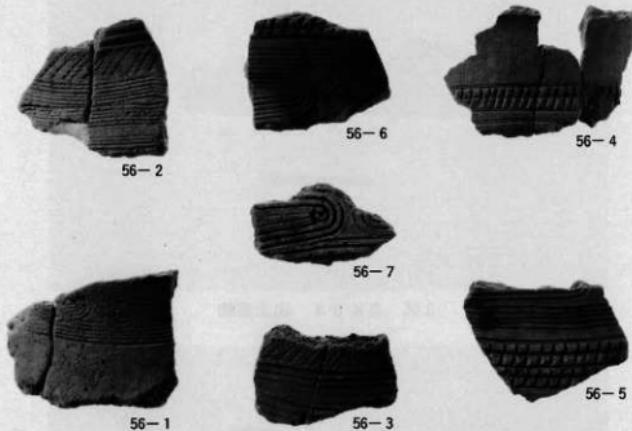
2区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）



2区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）



2区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）

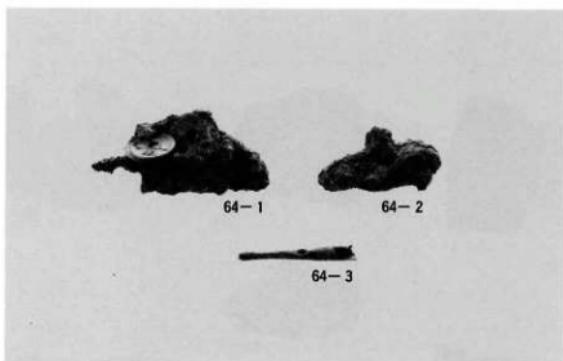


2区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）

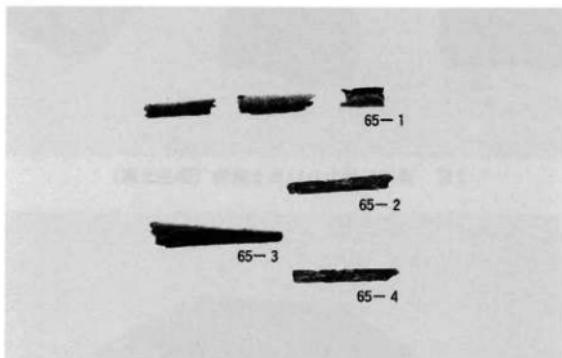


2区 遺構に伴わない出土遺物（弥生土器）

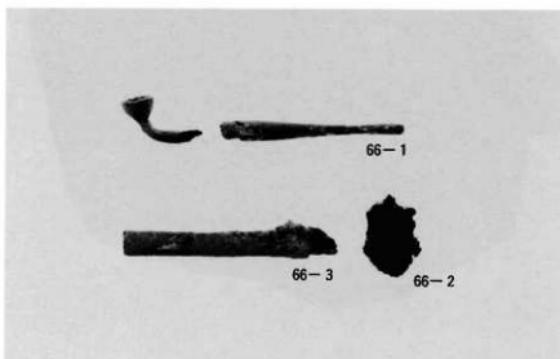
写真図版24



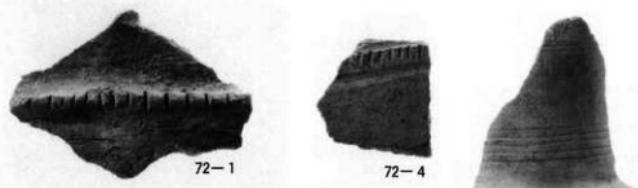
3区 SK 04 出土遺物



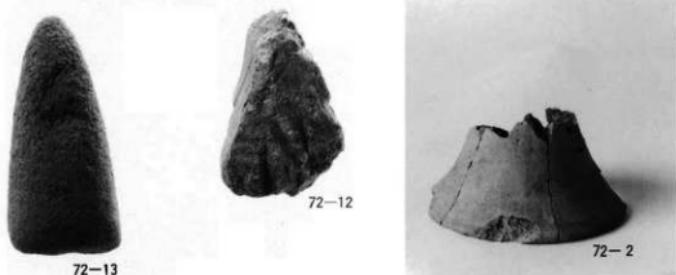
3区 SK 05 出土遺物



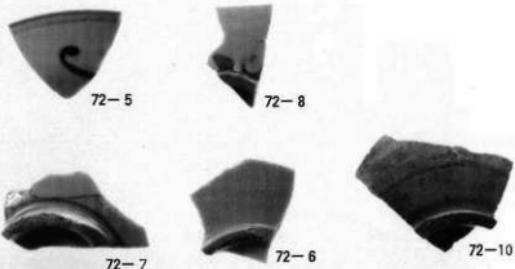
3区 SK 06 出土遺物



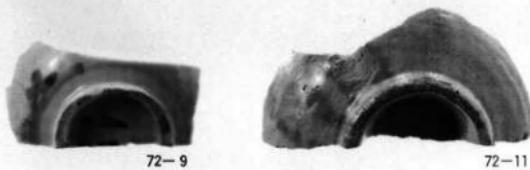
72-3



72-2



72-10



72-11

3区 遺構に伴わない出土遺物

報告書抄録

フリガナ	カンバラニイセキ					
書名	神原II遺跡					
副書名	1997年の調査成果					
巻次	第1分冊					
シリーズ名	志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	13					
著者名	田原淳史、寺尾令					
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/					
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番 Tel0852-36-8608 e-mail maibun@pref.shimane.jp					
発行年月日	平成14年(2002年)3月29日					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	位置 遺跡番号	北緯	東經	調査期間 調査面積 調査原因
シバライセキ 神原II遺跡	日本 島根県 飯石郡 頓原町 志津見	32884		32° 59' 57"	129° 30' 02"	1997.04 から 1997.12 6500m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
シバライセキ 神原II遺跡	集落	弥生時代 奈良時代 江戸時代	建物跡(竪穴・堀立柱) 土塙墓 土坑 ピット	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器	第1分冊	
	製鉄遺跡					第2分冊